川半貝塚発掘調査報告書

町営災害公営住宅建設事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多くのこされております。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料であります。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らねばなりません。

一方、県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要とされます。それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財の保護との調和も求められるところであります。

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行ない、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は山田町における町営災害公営住宅建設事業に関連して、平成27年度に発掘調査された川半貝塚の調査成果をまとめたものであります。川半貝塚は山田町船越半島の北端、大浦漁港より東側に位置する縄文時代の遺跡で、昭和期には遺跡範囲の西側、低地面で貝層が見つかっています。今回の調査では貝層は見つかりませんでしたが、代わりに本遺跡が縄文時代前期と中期に小規模な集落が営まれていたこと、また近世には墓域として利用されていたことが分かりました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました山田町建設課、山田町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成29年３月

公益財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　　菅　野　洋　樹

例　　言

1　本報告書は、平成27年度に行った川半貝塚（下閉伊郡山田町船越第22地割ほか）の発掘調査の成果を収録したものである。

2　今回の調査は、町営災害公営住宅建設事業に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と山田町との協議を経て、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。

3　遺跡台帳に登録されている遺跡番号は「MG05－0171」である。

4　遺跡略号、発掘調査期間、担当者、調査面積、委託者名は以下の通りである。

遺跡略号：KHK－15
調査期間：平成27年７月１日～ 10月23日
調査担当者：須原　拓・澤目雄大・佐藤直紀
調査面積：5,000㎡
委 託 者：山田町建築住宅課

5　室内整理期間と担当者は、以下の通りである。

整理期間：平成27年11月２日～平成28年３月31日
担当者：佐藤直紀

6　調査および整理における委託業務については次の機関に依頼した。

基準点測量：釜石測量設計　株式会社
航空撮影：株式会社　リッケイ
遺構図面の写真解析図化および図版編集：株式会社　リッケイ
石材鑑定：花崗岩研究会
黒曜石産地同定：株式会社 パリノ・サーヴェイ
火山灰産地同定：株式会社 パリノ・サーヴェイ
炭化物年代測定（ＡＭＳ）：株式会社　加速器分析研究所

7　本遺跡の調査成果は、すでに『平成27年度発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第661集）において発表しているが、内容については本書が優先する。

8　土色の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修1993）を使用している。

9　本報告書の執筆は須原　拓・佐藤直紀・澤目雄大が行い、文末に氏名を名記している。編集は須原が行った。

10　本報告書で使用した地形図は、国土地理院発行1:25,000「陸中山田」、「霞露ヶ岳」を使用している。

11　野外調査ならびに整理作業、報告書作成に際し、次の方々からご協力、ご指導いただいた。記して深く感謝いたします。（敬称略）

竹下将男・山田町教育委員会

12　本遺跡の調査で得られた一切の資料、出土遺物・撮影写真・遺構実測図・遺物実測図は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡　例

1　遺構について

（1）本文中の図版縮尺

以下を原則とし、各図版にはスケールを付している。

竪穴住居跡の平面・断面：1/50・1/60

土坑の平面・断面：1/40

炉・焼土遺構の平面・断面：1/20

（2）遺構断面の土層注記

野外調査の際、土層の観察記録については以下の項目を基本とし、記録した。

色調（『標準土色帖』（農林水産省農林技術会議局監修1993）を基準とする）

粘性（4段階表示：**強い**、**やや強い**、**やや弱い**、**弱い**）

しまり（4段階表示：**密**、**やや密**、**やや疎**、**疎**）

混入物の有無（混入量は5段階表示：**微量**　1～10%・**少量**　11～20%・**中量**21～30%・**やや多い**31～40%・**多量**41～50%）

2　遺物について

（1）本文中の図版縮尺は以下を原則とし、各図版にはスケールを付している。

縄文土器：1/3　　土製品：1/2　　銭貨：1/1

剥片石器：2/3　　礫石器：1/3・1/4

（2）遺物図面のアミかけについては凡例図に示した通りである。

（3）観察表の表記項目について

出土位置・層位、器種、残存部位、外面文様（文様、縄文原体の種類、施文方法）、内面調整（文様）色調（外面・内面）・焼成・胎土混入物・土器型式（時期）について観察し、記載している。

文様については、口唇部（「唇」と表記）、口縁部（「口」と表記）、胴部（「胴」と表記）、底部（「底」と表記）に分けて観察し、観察表に記している。

焼成：土器の断面を観察し、断面内の黒色層を基準として土器の焼成具合を4分類した。

良　好→断面に黒色層がみとめられず、断面の色調が橙色を帯びるもの。

やや良好→断面に明瞭な黒色層は認められないが、土器の内外面色調と比べ、やや暗い（黒色味がかっている）もの。

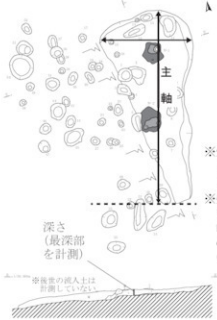
やや不良→断面の中央部にのみ黒色層がみとめられるもの。

不　良→断面の半分以上に黒色層が認められ、焼成の際の火回りが悪いもの。

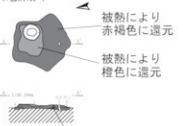
色調：外内面については『標準土色帖』（農林水産省農林技術会議局監修1993）の色調を基準とし、観察表には色調のみ記した。

竪穴住居跡

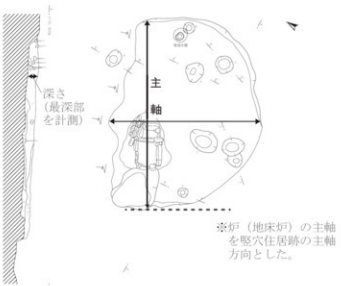
縄文時代前期



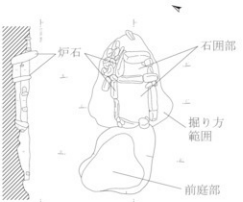
炉（地床炉）



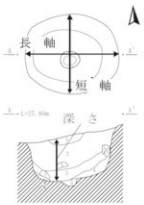
縄文時代中期



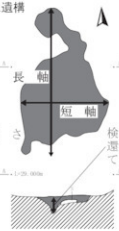
炉（複式炉）



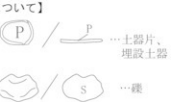
土坑



焼土遺構



【表記について】



凡例図

目　　次

Ⅰ　発掘調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　位置・立地 …… 1
2　周辺の遺跡 …… 3

Ⅲ　調査の経過と方法

1　野外調査について …… 7
2　室内整理について …… 8
3　出土遺物について …… 8

Ⅳ　調査の概要と基本土層

1　調査の概要 …… 12
2　基本土層 …… 14

Ⅴ　検出遺構・出土遺物

1　縄文時代 …… 16
2　江戸時代 …… 78

Ⅵ　自然科学分析

1　川半貝塚における放射性炭素年代測定（AMS測定） …… 84
2　川半貝塚における火山灰の同定 …… 88
3　川半貝塚出土黒曜石製遺物の産地同定 …… 94

Ⅶ　総　　括

1　出土遺物の検討 …… 99
2　遺構の変遷 …… 104
報告書抄録 …… 137

図版目次

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　周辺の遺跡 …… 4
第３図　グリッド位置図 …… 7
第４図　石器の分類 …… 11
第５図　遺構配置図 …… 13
第６図　基本土層 …… 15
第７図　１号住居跡 …… 16
第８図　２号住居跡（１） …… 18
第９図　２号住居跡（２）・出土遺物（１） …… 19
第10図　２号住居跡出土遺物（２） …… 20
第11図　２号住居跡出土遺物（３） …… 21
第12図　３号住居跡（１） …… 22
第13図　３号住居跡（２） …… 23
第14図　３号住居跡出土遺物（１） …… 24
第15図　３号住居跡出土遺物（２） …… 25
第16図　４号住居跡（１） …… 27
第17図　４号住居跡（２） …… 28
第18図　４号住居跡（３）・出土遺物（１） …… 29
第19図　４号住居跡出土遺物（２） …… 30
第20図　５号住居跡（１） …… 31
第21図　５号住居跡（２） …… 32
第22図　５号住居跡出土遺物（１） …… 33
第23図　５号住居跡出土遺物（２） …… 34
第24図　６号住居跡（１） …… 36
第25図　６号住居跡（２）・出土遺物 …… 37
第26図　７号住居跡（１） …… 38
第27図　７号住居跡（２） …… 39
第28図　土坑（縄文時代） …… 41
第29図　土坑出土遺物 …… 42
第30図　焼土遺構 …… 43
第31図　柱穴状土坑分布図・出土遺物 …… 44
第32図　遺構外出土遺物（１） …… 46
第33図　遺構外出土遺物（２） …… 47
第34図　遺構外出土遺物（３） …… 48
第35図　遺構外出土遺物（４） …… 49
第36図　遺構外出土遺物（５） …… 50
第37図　遺構外出土遺物（６） …… 51
第38図　遺構外出土遺物（７） …… 52
第39図　遺構外出土遺物（８） …… 53
第40図　遺構外出土遺物（９） …… 54
第41図　遺構外出土遺物（10） …… 55
第42図　遺構外出土遺物（11） …… 56
第43図　遺構外出土遺物（12） …… 57
第44図　遺構外出土遺物（13） …… 58
第45図　遺構外出土遺物（14） …… 59
第46図　遺構外出土遺物（15） …… 60
第47図　遺構外出土遺物（16） …… 61
第48図　遺構外出土遺物（17） …… 62
第49図　遺構外出土遺物（18） …… 63
第50図　遺構外出土遺物（19） …… 64
第51図　近世墓 …… 79
第52図　近世墓出土銭貨 …… 81
第53図　遺構外出土遺物（近世） …… 82
第54図　縄文時代前期初頭から前葉の土器 …… 100
第55図　石器の分析 …… 103
第56図　遺構の変遷（１） …… 105
第57図　遺構の変遷（２） …… 106

表目次

第１表　周辺の遺跡一覧 …… 5
第２表　遺構名変更表 …… 8
第３表　遺構内・外出土遺物一覧 …… 12
第４表　柱穴状土坑一覧 …… 45
第５表　遺物観察表（縄文時代） …… 66
第６表　遺物観察表（近世） …… 83

写真図版目次

写真図版１　遺構全景・基本土層 …… 108
写真図版２　１・２号住居跡 …… 109
写真図版３　２号住居跡 …… 110
写真図版４　３号住居跡 …… 111
写真図版５　４号住居跡 …… 112
写真図版６　４・５号住居跡 …… 113
写真図版７　５・６号住居跡 …… 114
写真図版８　６・７号住居跡 …… 115
写真図版９　１～４号土坑 …… 116
写真図版10　５号土坑・１・２号焼土遺構 …… 117
写真図版11　近世墓 …… 118
写真図版12　縄文土器（１） …… 119
写真図版13　縄文土器（２） …… 120
写真図版14　縄文土器（３） …… 121
写真図版15　縄文土器（４） …… 122
写真図版16　縄文土器（５） …… 123
写真図版17　縄文土器（６） …… 124
写真図版18　縄文土器（７） …… 125
写真図版19　縄文土器（８） …… 126
写真図版20　縄文土器（９） …… 127
写真図版21　石器（１） …… 128
写真図版22　石器（２） …… 129
写真図版23　石器（３） …… 130
写真図版24　石器（４） …… 131
写真図版25　石器（５） …… 132
写真図版26　石器（６） …… 133
写真図版27　石器（７） …… 134
写真図版28　石器（８） …… 135
写真図版29　銭貨・陶磁器 …… 136

Ⅰ　発掘調査に至る経緯

川半貝塚は、「山田町災害公営住宅整備事業」に伴い、その事業地内に遺跡が所在することから発掘調査を実施することとなったものである。

平成23年３月11日に発生した東日本大震災による津波と地震によって、山田・船越両湾に面した大沢・山田・織笠・船越の４地区は、甚大な被害を蒙った。この未曾有の災害から立ち上がるべく、山田町では平成23年12月に「山田町復興基本計画」を策定し、

①　津波から命を守るまちづくり
②　産業の早期復旧と再生・発展
③　住民が主体となった地域づくり

を基本理念に、新しい町づくりを進めているところである。

本事業は、山田町災害公営住宅整備事業の一環として、大浦地区に木造長屋建の災害公営住宅を整備するものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成26年７月17日付建築第175号で山田町建築住宅課から山田町教育委員会に対し試掘調査実施依頼があったことに端を発する。

試掘調査は、平成26年８月27日から９月４日まで岩手県教育委員会の協力を受けて実施し、縄文時代の竪穴住居跡をはじめとする遺構を検出した。

この結果を受けて、岩手県教育委員会、山田町建築住宅課及び教育委員会が協議を行い、平成27年６月15日付で公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターと委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

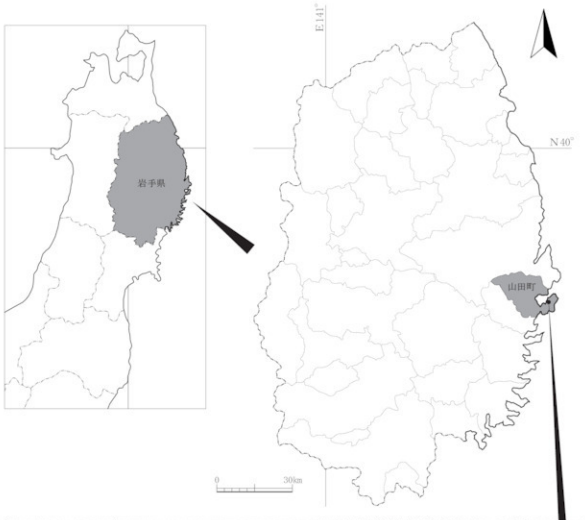
（山田町）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１　位置・立地

川半貝塚は、岩手県下閉伊郡山田町船越第22地割ほかに所在する。山田町は、陸中海岸のほぼ中央に位置し、総面積262.81㎢、人口約１万６千人の町で、船越地区は町の南東部にあたる。本遺跡は、北緯39度26分58秒、東経142度00分26秒付近に位置し、国土地理院が発行している２万５千分の１地形図「霞露ヶ岳」の図幅に含まれる（第１図）。

本遺跡は、船越半島ほぼ中央北西側、霞露ヶ岳から続く西側丘陵から大浦低地にかけての緩斜面上に立地し、標高は約24～32m前後である。調査前の現況は耕作地であった。



第１図　遺跡位置図　　25,000 分の１「陸中山田」「霞露ヶ岳」

2　周辺の遺跡

（1）山田町内の遺跡

川半貝塚が所在する山田町内の遺跡は、平成11年から14年にかけて山田町教育委員会によって行われた遺跡詳細分布調査で、517遺跡が確認されている。この517遺跡のうち、縄文時代の遺跡は251遺跡である。そのうち川半貝塚から半径約６㎞圏内の縄文時代の遺跡分布を、第２図に示した。104遺跡がそれに相当し、そのほとんどが、山の尾根に沿った丘陵から続く緩斜面上や台地上、もしくは、海岸の段丘上、また一部は大沢低地と船越低地に立地する。

遺跡群を時期別にみると、早期が最も古い。早期の沢田Ⅰ遺跡（66）が、関口川低地の北側に位置する丘陵から続く緩斜面上にあり、竪穴住居跡が調査されている。前期の遺跡も、同緩斜面上に、沢田Ⅰ遺跡、間木戸Ⅱ・Ⅴ（62・63）遺跡があり、特に前期前葉の遺構・遺物が顕著に見られる。

中期の遺跡も、同様の場所に沢田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡（66・67・69）、房の沢Ⅳ遺跡（74）、間木戸Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ遺跡（60・62・63）がある。これらの遺跡からは、それぞれ多くの遺構・遺物が見つかっており、大規模な集落が点在していたと考えられる。また、大沢低地の東側に位置する丘陵から続く緩斜面上に紅山B遺跡（44）が、浜川目低地の北側、低位段丘上に、浜川目沢田Ⅰ遺跡（54）が、立地している。特に遺構・遺物が顕著に見られるのは、中葉から後葉である。

後期の遺跡では、浜川目沢田Ⅰ遺跡（54）と、船越低地の西側に位置する丘陵上から続く緩斜面上に山の内Ⅱ遺跡（７）がある。しかし、遺物は出土したが、遺構は見つかっていない。晩期の遺跡には、浜川目沢田Ⅰ遺跡と、織笠低地北側の丘陵上に後山Ⅰ遺跡（82）がある。浜川目沢田Ⅰ遺跡で、多量の土器と共に、住居状遺構等が、後山Ⅰ遺跡において竪穴住居跡が見つかっている。

このように、第２図に示した川半貝塚から半径約6㎞圏内の遺跡は、早期から晩期にかけて、遺構・遺物が見られる。その中でも特に、前期～中期の遺構・遺物が顕著である。

（2）船越地域の遺跡

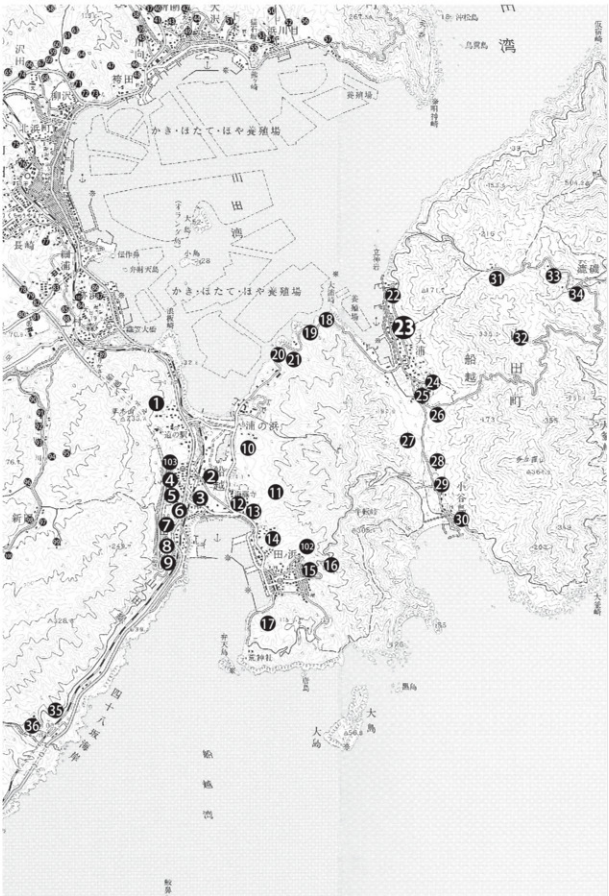
川半貝塚が所在する船越地域についてみていく。船越地域で、現在分かっている遺跡が位置する地域は、浦の浜地区（半島北西側）、田ノ浜地区（半島南西側）、大浦地区（半島中央北側）、小谷鳥地区（半島中央南側）である。また、半島の付け根にあたる所は、船越・田の内地区が相当する。縄文時代の遺跡は、前述した遺跡群の多くと同様に、半島内に形成された山の尾根に沿った丘陵から続く緩斜面上や台地上、もしくは、海岸の段丘上に分布する。

船越・田の内地区では、湾台Ⅱ遺跡（５）、山の内Ⅱ・Ⅲ遺跡（７・８）が調査されており、中期の竪穴住居跡が多数見つかっている。また、焼山遺跡（103）で、中期の遺物が出土している。

浦の浜・田ノ浜地区には、新道貝塚（10）、田の浜館跡（102）がある。新道貝塚では、中期後葉の竪穴住居跡と土坑が、田の浜館跡では、中期の竪穴住居跡が調査されている。

小谷鳥地区には、割畠沢Ⅰ遺跡（28）があり、縄文時代中期後半の集落が調査されている。

川半貝塚の所在する大浦地区をみてみると、畠中遺跡（24）があり、後期に形成された土器捨て場および、晩期に造られた土坑や柱穴状土坑が調査されている。しかし、他に発掘調査は行われておらず、前期・中期の様相は、これまで良くわかっていなかった。　（佐藤）



第２図　周辺の遺跡　　50,000 分の１「大槌」「霞露ヶ岳」

第１表　周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	備考・参考文献
1	長林	製鉄跡・散布地	縄文・不明	縄文土器・鉄滓	山田町　第9集
2	船越館	城館跡・散布地	縄文・中世	土師・須恵・縄文土器	山田町　第9集
3	湾台Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器・石器・石器	山田町　第9集
4	湾台Ⅲ	製鉄跡・散布地	縄文・古代	竪穴住居跡・製鉄炉・縄文土器・石器・土師器・須恵器・鉄滓・羽口	岩手県　第186集
5	湾台Ⅱ	製鉄跡・散布地	縄文・弥生・古代	竪穴住居(平安)・集石・縄文土器・弥生土器・石器・鉄製品・鉄滓・羽口	岩手県　第186集
6	船越西館	城館跡・製鉄跡・散布地	縄文・中世	土師・擂鉢・空堀・畝・古銭・縄文土器・鉄滓	山田町　第9集
7	山の内Ⅱ	集落跡・製鉄跡	縄文・平安	竪穴住居(縄文)・貯蔵穴・集石・縄文土器・石器・弥生土器・製鉄炉・鍛冶炉・炭窯・鉄製品・鉄滓・羽口・鋼製品・銭貨	岩手県　第249集
8	山の内Ⅲ	集落跡・製鉄跡	縄文・平安	竪穴住居(縄文・平安)・縄文土器・石器・製鉄炉・炭窯・土師器・須恵器・鉄製品・鉄滓・羽口・銭貨	岩手県　第250集
9	滝の沢	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第9集
10	新道貝塚	貝塚・製鉄跡	縄文	竪穴住居・土坑・後土・縄文土器・石器・鉄滓	山田町　第2集 山田町　第12集
11	クク井	散布地	縄文	縄文土器・石器	山田町　第9集
12	船越御所	散布地・城館跡	縄文・中世	土師・擂鉢・空堀・畝・縄文土器	山田町　第9集
13	岩ヶ沢	集落跡	縄文	縄文土器・石器	山田町　第9集
14	早川	集落跡・製鉄跡	縄文	縄文土器・石器・鉄滓	山田町　第9集
15	大洞貝塚	貝塚・集落跡	縄文	縄文土器・石器	山田町　第9集
16	大洞Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第9集
17	小田の御所	城館跡・散布地	縄文・中世	土師・二の郭・二の郭・空堀・古銭・縄文土器	山田町　第9集
18	大浦崎	貝塚・生産跡(製塩ヤ)	縄文	貝塚・縄文土器・鉄滓	山田町　第9集
19	糸井沢	生産跡(製塩ヤ)・散布地	縄文	石組遺構・縄文土器	山田町　第9集
20	白石西	生産跡(製塩ヤ)・散布地	縄文	石組遺構・縄文土器	山田町　第9集
21	白石沢	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第9集
22	鍋楽	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第9集
23	**川半貝塚**	**貝塚・製鉄跡**	**縄文・古代**	**縄文土器**	**本報告書**
24	品中	集落跡・製鉄跡	縄文・奈良～平安	土器捨て場・土坑・縄文土器・石器・ピスノ穴・掘立柱建物跡(奈良～平安)・集石・炭窯・土師器・羽口・鉄滓	現地説明会資料
25	マダノキ沢	製鉄跡・散布地	縄文	縄文土器・石鏃・石器・鉄滓	山田町　第9集
26	マダノキ沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器・石器	山田町　第9集
27	新掛沢Ⅱ	製鉄跡・散布地	縄文	縄文土器・鉄滓	山田町　第9集
28	新掛沢Ⅰ	集落跡・製鉄跡	縄文	竪穴住居・貯蔵穴・後土・縄文土器・石器・鉄滓	現地説明会資料
29	杭の子	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第9集
30	小谷鳥	製鉄跡・散布地	縄文	縄文土器・石器・鉄滓	山田町　第9集
31	バンコ坂	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第9集
32	滝置沢	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第9集
33	進磯Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器・石器	山田町　第9集
34	進磯Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器・石器	山田町　第9集
35	屋平	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第9集
36	大沢川	散布地	縄文	縄文土器・石斧	山田町　第9集
37	新開地Ⅱ	製鉄跡・散布地	縄文	鉄滓	山田町　第4集
38	川向Ⅲ	製鉄跡・散布地	縄文	堀場・造成平場・鉄滓・縄文土器	山田町　第4集
39	川向Ⅱ	製鉄跡・散布地	縄文	堀場・造成平場・鉄滓・縄文土器	山田町　第4集
40	雲南沢	製鉄跡・散布地	縄文	堀場・造成平場・鉄滓・縄文土器・石鏃	山田町　第4集
41	新開地Ⅰ	集落跡・製鉄跡	縄文	鉄滓・縄文土器・石器	山田町　第4集
42	大開	製鉄跡・散布地	縄文	造成平場・鉄滓・縄文土器	山田町　第4集
43	新開地	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第4集
44	紅山Ⅲ	集落跡	縄文・弥生	竪穴住居・縄文土器・石器・弥生土器・鉄滓	山田町　第3集
45	川向Ⅰ	製鉄跡・散布地	縄文	造成平場・鉄滓・縄文土器	山田町　第4集
46	待田Ⅱ	製鉄跡・散布地	縄文	造成平場・鉄滓・縄文土器	山田町　第4集
47	待田Ⅲ	製鉄跡・散布地	縄文	造成平場・鉄滓・縄文土器	山田町　第4集
48	待田Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第4集
49	紅山A	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第4集
50	浜川目沢面Ⅲ	集落跡	縄文	縄文土器・石器	山田町　第4集
51	下条	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第4集
52	浜川目沢面Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第4集

番号	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	備考・参考文献
53	浜川目沢前Ⅱ	集落跡	縄文	縄文土器	山田町　第4集
54	浜川目沢前Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	岩手県　第647集
55	笛石坂	城館跡？・散布地	縄文・中世？	古生跡・貝塚・屋切・石碑・縄文土器・鉄滓	山田町　第4集
56	多門	集落跡	縄文	縄文土器・石器	山田町　第4集
57	サイナイ沢	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第4集
58	天井間木戸Ⅸ	複合	縄文	縄文土器・鉄滓・羽口	山田町　第7集
59	間木戸Ⅲ	複合	縄文	縄文土器・鉄滓	山田町　第7集
60	間木戸Ⅰ	集落跡	縄文	竪穴住居(縄文・古代)・貯蔵穴・陥し穴・縄文土器・石器・製鉄炉・土師器・須恵器・鉄製品・鉄滓	岩手県　第647集
61	間木戸Ⅳ	複合	縄文・近世	縄文土器・一里塚	山田町　第7集
62	間木戸Ⅱ	集落跡	縄文・古代	竪穴住居・土坑・焼土・縄文土器・石器・土師器・須恵器・紡錘車・鉄製品	岩手県　第640集
63	間木戸Ⅴ	集落跡・製鉄跡	縄文・古代	竪穴住居・土坑・焼土・埋設土器・工房跡・製鉄炉・排滓場・縄文土器・石器・土師器・須恵器・紡錘車・鉄製品・鉄滓・羽口	岩手県　第640集
64	山の神Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第7集
65	沢田Ⅵ	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第7集
66	沢田Ⅰ	集落跡	縄文・弥生・奈良・平安	竪穴住居(縄文・古代)・集石・陥し穴・貯蔵穴・屋切・墓壙・縄文土器・石器・弥生土器・土師器・須恵器・鉄製品・鉄滓・羽口	岩手県　第342集
67	沢田Ⅱ	複合	縄文・奈良	竪穴住居(縄文・奈良)・製鉄炉・鍛冶炉・排滓場・土坑・墓壙・空壙・縄文土器・石器・土師器・須恵器・鉄製品・鉄滓・羽口	岩手県　第268集
68	沢田Ⅳ	複合	縄文・中世	土坑・副葬・墓坑・墓・空壙・縄文土器・鉄滓	
69	沢田Ⅲ	散布地	縄文	竪穴住居(縄文・古代)・貯蔵穴・製鉄炉・縄文土器・石器・土師器・鉄製品・鉄滓	岩手県　第647集 岩手県　第638集
70	柳沢Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器・石器	山田町　第7集
71	柳沢Ⅲ	複合	縄文・古代	縄文土器・土師器	山田町　第7集
72	柳沢Ⅱ	複合	縄文・中世	土坑・墓壙・墓・縄文土器・石器・鉄滓	山田町　第7集
73	柳沢Ⅰ	複合	縄文	縄文土器・鉄滓	山田町　第7集
74	関の沢Ⅳ	古墳・集落跡・製鉄跡	縄文・末期古墳	竪穴住居・土坑・陥し穴・焼土・古墳・土壙墓・石製・貝製・縄文土器・石器・土師器・須恵器・刀剣類・馬具・鉄製品・鉄滓・羽口	岩手県　第287集
75	関谷Ⅳ	複合	縄文	縄文土器・鉄滓	山田町　第7集
76	関谷Ⅴ	複合	縄文	縄文土器・鉄滓	山田町　第7集
77	飯岡Ⅲ	散布地	縄文	…	山田町　第7集
78	湯浦Ⅰ	複合	縄文	縄文土器・弥生土器・鉄滓	山田町　第7集
79	湯浦Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第7集
80	後山Ⅲ	複合	縄文	縄文土器・石器・弥生土器・土師器・鉄滓	山田町　第7集
81	後山Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第7集
82	後山Ⅰ	集落跡・製鉄跡	縄文・平安	竪穴住居(縄文・弥生・平安)・土坑・縄文土器・石器・製鉄炉・鍛冶炉・炭窯・土師器・須恵器・鉄滓・羽口	山田町　第9集
83	湯浦Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第7集
84	湯浦Ⅴ	複合	縄文・中世	土坑・墓壙・縄文土器	山田町　第7集
85	上	集落跡	縄文	縄文土器・弥生土器	山田町　第7集
86	時吉Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第7集
87	時吉Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第7集
88	上村	複合	縄文	製鉄炉・縄文土器	山田町　第7集
89	草木	複合	縄文	縄文土器・鉄滓	山田町　第7集
90	功玉山Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器	山田町　第7集
91	根井沢Ⅲ	複合	縄文	縄文土器・土師器・鉄滓	山田町　第7集
92	根井沢Ⅱ	複合	縄文	縄文土器・鉄滓	山田町　第7集
93	根井沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第7集
94	ウドウツチ	複合	縄文	縄文土器・鉄滓	山田町　第7集
95	薄地沢Ⅱ	複合	縄文	縄文土器・鉄滓	山田町　第7集
96	山股	複合	縄文	縄文土器・鉄滓	山田町　第7集
97	新田Ⅱ	複合	縄文	縄文土器・土師器・鉄滓	山田町　第7集
98	新田Ⅰ	複合	縄文	縄文土器・土師器・中世陶器・鉄滓・鉄滓	山田町　第7集
99	豊面沢	複合	縄文	縄文土器・鉄滓	山田町　第7集
100	大石平	散布地	縄文	縄文土器・石斧	山田町　第7集
101	湯浦Ⅵ	散布地	縄文	縄文土器	山田町　第9集
102	街の浜館跡	集落跡・製鉄跡・城館跡	縄文・古代・近世以降	竪穴住居跡(縄文)・製鉄炉・土坑・炭窯・溝跡・平場・鍛冶炉・堅穴遺構(近世以降)・墓壙・柱穴状ピット・縄文土器(前期末葉～中期初頭、中期後葉・後期)・石器・石製品・土師器・羽口・鉄滓・陶磁器・金属製品・夏木南貿	岩手県　第639集
103	後山	製鉄跡・散布地	縄文・古代・中世	製鉄工房跡・製鉄炉・炭窯跡・焼滓場・縄文土器・石器・土坑・羽口・小刀	岩手県　第651集

Ⅲ　調査の経過と方法

1　野外調査について

本調査に先立ち、平成26年、岩手県教育委員会により試掘調査が実施され、委託者との協議を経て調査区が設定されている。

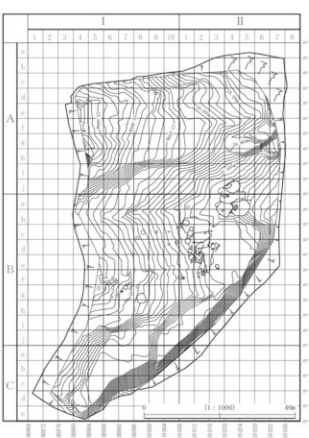
平成27年７月１日（水）より調査を開始した。調査員１名、野外作業員15名体制でスタートし、７月16日以降、調査員３名、野外作業員30名体制で行った。

重機（バックホー 0.45㎥、キャリアダンプ10ｔ各１台、ダンプトラック４ｔ２台）を用いた表土除去から行い、その後、人力による遺構検出作業を行った。調査当初から排土置場に苦慮し、調査区外へと排土を運搬していたため、表土除去に予想以上の時間がかかった。検出した遺構は、規模や性格により、適宜に４分法と２分法を選択し、精査を行った。各遺構については平面と断面、また必要に応じ遺物出土状況の実測および､写真撮影を行った。遺構図の実測には､調査期間の短縮を考慮に入れ、デジタルカメラ(OLYMPUS　ToughTG - 3)を用いた写真解析測量を活用した(撮影は調査員が行い、解析作業および図化作業を（株）リッケイに委託した)。他に調査範囲の地形測量などにはCUBIC社製遺構実測ソフト「遺構くん」と光波トランシットを用いている。遺物の取り上げについては４m四方を基準として取り上げグリッドを設定し、取り上げを行った。なお、グリッドについては第３図に示した通り、40m×40mを大グリッドとし、その中を10分割（４m×４m）して小グリッドとした。

写真撮影は主に、デジタルカメラ１台（キャノンEOS60D）と35㎜カメラ１台（モノクローム）を使用し、同アングルでデジタル写真・銀塩写真両方を撮影している。また10月15日にラジコンヘリ機を用いて、上空から遺跡全景の写真撮影を行った（株式会社　リッケイに委託)。

平成27年10月15日（金）現地公開を開催し、調査成果を町民、地元住民に説明した。約65名の参加があり、そのうちには大浦小学校児童35名、教員10名が含まれる。

平成27年10月６日（火）に委託者、県教育委員会、山田町教育委員会立ち会いの下、終了確認を受けた。以降、残務を片付けつつ、10月23日（金）に調査を終了し、撤収した。



第３図　グリッド位置図

2　室内整理について

平成27年10月１日から平成28年３月31日の期間に室内整理作業を行った。調査員１名、室内作業員４名体制である。

室内作業では遺物水洗から始め、注記、仕分け、遺物実測・拓本、図面トレース、図版作成、収納を作業員が分担した。調査員は、原稿執筆、遺物観察表作成、実測図や図版のチェックを行った。遺物の写真撮影は当センターの写場において写真技師が撮影を行った。撮影にはデジタルカメラ（キャノンEOS60D）を用いている。

遺構図版作成は、（株）リッケイに業務委託した。野外調査時に作成した図面を基に、調査員が指示し、遺構図版作成を行った。なお遺構図版の作成にはAdobe社「IllustratorCS６」を使用し、デジタルにて図版を作成した。

第２表　遺構名変更表

新遺構名	旧遺構名	時代
１号住居	S107	縄文時代前期
２号住居	S104	縄文時代前期
３号住居	S103	縄文時代前期
４号住居	S101	縄文時代
５号住居	S102	縄文時代
６号住居	S105	縄文時代中期
７号住居	S106	縄文時代
１号土坑	SK09	縄文時代
２号土坑	SK01	縄文時代
３号土坑	SK02	縄文時代
４号土坑	SK07	縄文時代
５号土坑	SK08	縄文時代
６号土坑	SK03	近世墓
７号土坑	SK05	近世墓
８号土坑	SK04	近世墓
９号土坑	SK06	近世墓
10号土坑	S103内土坑1	近世墓
11号土坑	S103内土坑2	近世墓
１号焼土	SF03	縄文時代
２号焼土	SF01	縄文時代

なお本報告書作成にあたり、各遺構名を野外調査時から変更した。本報告書に記された遺構名を優先する。遺構名の変更については第２表の通りである。（須原）

3　出土遺物について

遺構内外から縄文時代の遺物（縄文土器、土製品、石器、石製品）と近世以降の遺物（陶磁器、銭貨）が出土している。全て時代別、種類別に分類し、属性観察を行った。以下はその概略である。

（１）縄文土器・土製品

縄文土器は前期（前葉～後葉）と中期（初頭～中葉）に比定されるものが出土している。出土した土器については、相原1990や早瀬2008、盛岡市教育委員会2004などを参考とし、細分時期別（土器型式の分からない「前期初頭～前葉」を除き、大木１～５式、また大木７ａ～大木10式）に分類し、整理を行った。掲載した土器の時期・型式名は第５表にも記した。

また土製品は円盤形土製品が出土している。

（２）石　　器

川半貝塚からは中コンテナ約3.5箱分の石器が出土している。器種の内訳は石鏃・尖頭器・楔形石器・石錐・石匙・不定形石器・ユーズドフレイク・リタッチドフレイク・礫器・磨製石斧・敲磨器類・石皿・砥石・フレイクである。

石鏃

扁平で、二次加工により鋭角な先端部が作り出され、長さ５cm以下のもの。出土した石鏃は形態から以下の４つに分類でき、ほかに製作途中（失敗品）がある（第４図１段目左）。

Ⅰ類：平基無茎鏃　　Ⅱ類：凹基無茎鏃　　Ⅲ類：凸基有茎鏃　　Ⅳ類：円基無茎鏃

尖頭器

二次加工により両端を鋭利に作り出した剥片石器で、長さが10cm以上のもの（第４図２段目左）。

数が少ないので細分していない。

楔形石器

形態は方形基調で、上下方向、もしくは上下左右方向に打撃による階段状剥離が連続するもの（第４図１段目中央）。階段状剥離の状態から、２分類した

Ⅰ類：上下方向のみ。　　Ⅱ類：上下左右方向にみられるもの。

石錐

二次加工により錐状の端部が作出されるもの。形態から以下のように２分類した（第４図１段目右）。

Ⅰ類：棒状を呈するもの。

Ⅱ類：摘み部を有し、錐部が短いもの。

石匙

突出した摘み部を作出し、また二次加工により幅広の刃部が作出されたもの。刃部の向きで３分類した（第４図２段目左）。

Ⅰ類：刃部が縦方向に付くもの。

Ⅱ類：刃部が横方向に付くもの。

Ⅲ類：刃部が斜方向に付くもの。

不定形石器

定形化した形状をもたず、扁平で縁辺部半分以上に刃部作出と考えられる二次加工を施しているものを一括した。刃部角度や刃部の形状から３分類した（第４図２段目右）。

Ⅰ類：刃部の角度が60°未満のもの。所謂、「削器」を含む。

Ⅱ類：刃部の角度が60°以上のもの。所謂、「掻器」を含む。

Ⅲ類：刃部作出の二次加工が、粗いものまたは不連続であるもの。

ユーズドフレイク（以降、Uフレイクと表記）

フレイクの中で、縁辺に微細剥離が連続するものや二次加工が縁辺の一部にしか連続しないものを、不定形石器や後述するフレイクとも区別し、Uフレイクとした（第４図３段目左端）。

リタッチドフレイク（以降、Rフレイクと表記）

フレイクの中で、最終剥離面において刃部作出とは考えられない二次加工が施されているものを、後述するフレイクとは区別するためRフレイクとした（第４図３段目左）。

礫器

礫または大形の剥片を素材とし、周辺の一部に大きな剥離を連続的に加え、刃部としたもの（第４図３段目右）。数が少ないので細分していない。

磨製石斧

平面形が撥形、長方形を呈し、剥離や敲打によって整形された後、研磨を施して仕上げられた石斧（第４図３段目右端）。

敲磨器類

大きさは長軸あるいは長径が10cm以下で、磨痕、敲打痕、凹痕が確認できた礫石器。所謂「磨石」、「凹石」、「敲石」を一括した。使用痕の種類で３分類した（第４図４段目左）。

Ⅰ類：正裏面ないし、側面において磨痕のみが確認されるもの。磨面が複数になるものも含む。

Ⅱ類：正裏面に凹痕のみを有するもの。複数面に有するものも含む。

Ⅲ類：端部や側面に敲打痕のみを有するもの。複数の敲打痕をもつものも含む。

石皿

長軸、短軸ともに10cm以上の扁平で大型の礫石器（第４図４段目中央）。片面あるいは両面に磨痕、凹痕などの使用痕跡が確認できたもの。

砥石

研磨によると考えられる擦痕が見受けられる、あるいは研磨により、使用面は著しく変形（凹面になる）した礫石器（第４図４段目右端）。

フレイク

上記の分類項目全てからはずれた剥片石器。打面と背面の形状から以下のように分類した。

まず打面の調整具合で３分類した。

Ⅰ類：自然を打面とするもの。　　Ⅱ類：１度剥離作業を行った面を打面とするもの。

Ⅲ類：２回以上、剥離作業を行った面を打面とするもの。

また、背面にみられる自然面の残存状況により３分類した。

ａ類：背面全てが自然面（剥離なし）。　　ｂ類：背面の一部に自然面残るもの。

ｃ類：背面に自然面が見られないもの。

これらの組み合わせで９分類を構成する。また打面が欠損しているものなど、分類不能なものについては、以下のように４分類した。

Ⅳａ類:塊状でいずれかの面に自然面が残るもの。　　Ⅳｂ類:塊状で自然面が全く残らないもの。

Ⅳｃ類:薄片でいずれかの面に自然面が残るもの。　　Ⅳｂ類:薄片で自然面が全く残らないもの。

第Ⅱ章・第Ⅲ章の参考文献

相原淳一1990 「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年」
『考古学雑誌』第76巻第１号

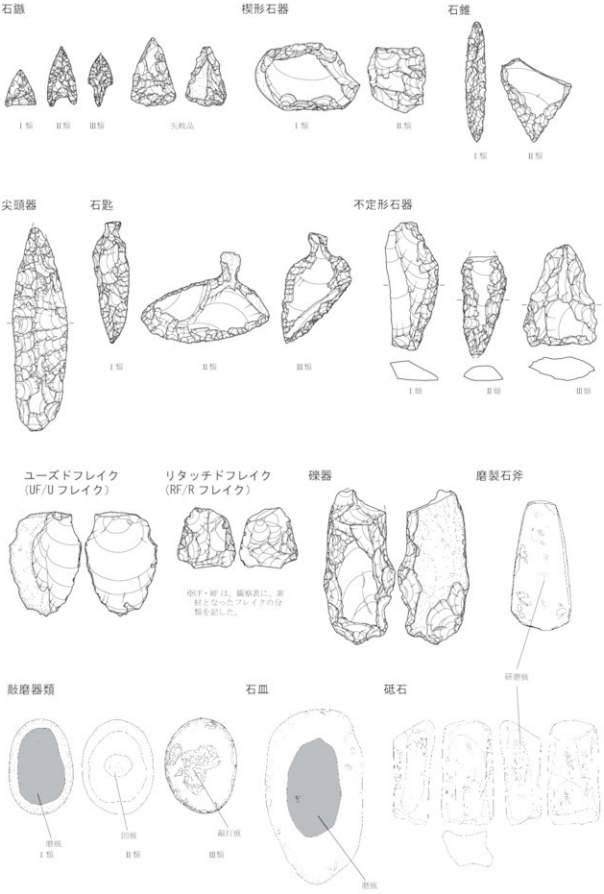
（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
1993『滴台Ⅱ遺跡・滴台Ⅲ遺跡発掘調査報告書』（第186集）
1996『山ノ内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（第249集）
1997『山ノ内Ⅲ遺跡発掘調査報告書』（第250集）
『沢田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（第268集）
『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』（第342集）
2014『平成25年度発掘調査報告書』（第630集）
2015『田の浜館跡発掘調査報告書』（第639集）
『間木戸Ⅱ遺跡・間木戸Ⅴ遺跡発掘調査報告書』（第640集）
『平成26年度発掘調査報告書』（第647集）
2016『焼山遺跡発掘調査報告書』（第651集）

鈴木道之助　1991『図録・石器入門事典〔縄文〕』（柏書房）

早瀬亮介　2008「前期大木式土器」『総覧　縄文土器』

盛岡市教育委員会　2004『縄文の彩華－中期の技と美－』図録（盛岡市遺跡の学び館）

山田町教育委員会
1999『山田町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ大沢地区』山田町埋蔵文化財調査報告書第４集
2002『山田町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ山田・織笠地区』山田町埋蔵文化財調査報告書第７集
『細浦Ⅵ・後山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』山田町埋蔵文化財調査報告書第８集
2003『山田町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅳ船越地区』山田町埋蔵文化財調査報告書第９集
2004『新藤貝塚発掘調査報告書』山田町埋蔵文化財調査報告書第12集


石鏃
Ⅰ類
Ⅱ類
Ⅲ類
失敗品
楔形石器
Ⅰ類
Ⅱ類
石錐
Ⅰ類
Ⅱ類
尖頭器
石匙
Ⅰ類
Ⅱ類
Ⅲ類
不定形石器
Ⅰ類
Ⅱ類
Ⅲ類
ユーズドフレイク
(UF/U フレイク)
リタッチドフレイク
(RF/R フレイク)
※UF・RF は、鏡原表に、素材となったフレイクの分類を記した。
礫器
磨製石斧
研磨痕
敲磨器類
磨痕
Ⅰ類
回痕
Ⅱ類
敲打痕
Ⅲ類
石皿
磨痕
砥石

第４図　石器の分類

Ⅳ　調査の概要と基本土層

1　調査の概要

調査区は南北約95m、東西約70mを測る不整な多角形を呈した範囲で、東から西に向けて比較的緩やかに傾斜する斜面地であり、標高は24～32mである。

調査区は大きな２条の沢跡で占められている。１条は調査区北側（第５図Ａグリッドライン）で、表土下１～５mの比較的深い沢跡である。この沢跡は土砂崩れなどで埋没したものと推定され、堆積した土中には50cm大の巨礫が多数混じっていた。この沢跡では埋土中、底面どちらからも遺構は検出されなかった。ただし沢跡の底面付近からは、主に縄文時代中期初頭の遺物が少量出土している。

もう１条は調査区中央（第５図Ｂグリッドライン）で、上記の沢跡よりも標高は高く、また浅い沢跡である。Ⅲ～Ⅳ層の残りが良く、西端の最も低い範囲（ⅠB6～8fグリッド周辺）では縄文時代前期初頭から前葉の包含層を形成している。

縄文時代の遺構は、主にＢグリッドラインの沢跡沿いと、２条の沢跡が交差し、三角州状を形成するⅡＢ４～５aグリッド周辺とに分布する。縄文時代前期初頭～前葉の竪穴住居跡（大型住居含む）３棟、縄文時代中期後葉（大木９式期）の竪穴住居跡４棟、前期・中期の土坑５基であり、また上述の通り調査区西端で前期初頭から前葉の遺物を中心とした包含層１か所を確認した。

出土遺物は、縄文土器が大コンテナ６箱（90373.5ｇ）、石器が大コンテナ4.5箱（1128点）である。出土遺物の時期・器種については、第Ⅲ章－３に記した通りである。また各遺構、および包含層の各層における出土遺物の内訳については第３表に示した。

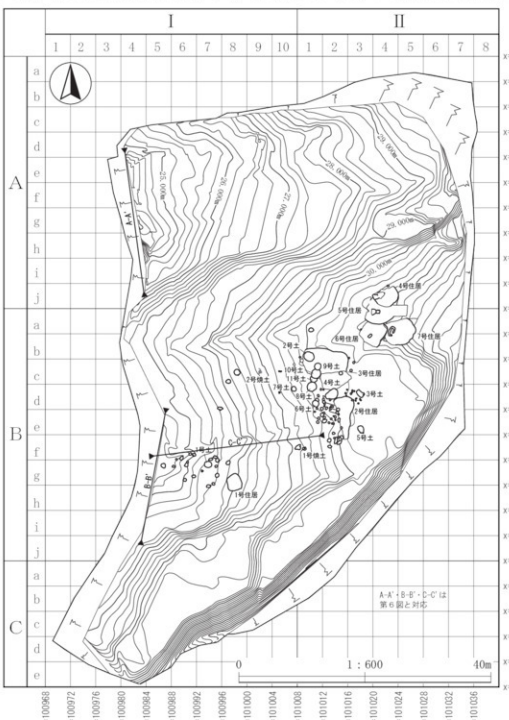
第３表の通り、一部を除き、各遺構から縄文土器・石器が出土している。ただし後述するが、どの

第３表　遺構内・遺構外出土遺物（縄文時代一覧）

	縄文土器(g)	石器(点)																	石器合計
		石鏃	尖頭器	石錐	石匙	楔形石器	不定形石器	礫器	磨製石斧	敲磨器類	石皿	砥石	Rフレイク	Uフレイク	フレイク	石製品	
1号住居																			
2号住居	3019.8	12	1		2	3	2			3	2		13	15	68	2	123
3号住居	369.1	4			1				1	3			5		24		38
4号住居	2158.2	1					1			2			1	1	3		9
5号住居	607.6	3		1			1		2	2		1	1		6		17
6号住居	80.3						1		1						1		3
7号住居																			
1号土坑	186.6									1									1
2号土坑	733.6	1											1		9				11
3号土坑																			
4号土坑	110.7													1	4				5
5号土坑																			
6号土坑	139.4																		
7号土坑	9.4																		
8号土坑	156.3																		
柱穴	91.4														2				2
遺構外（Ⅰ～Ⅱ層）	2568.7	2			1				1	4				1	8				17
遺構外（Ⅲ層）	37038.1	12		2	2	2	8	1	2	41	3		3	7	66	4			153
遺構外（Ⅲ～Ⅳ層）	3189.5			1		2	1			3			1		6				14
遺構外（Ⅳ層）	34330.9	74	1	3	17	6	17	7	2	66	13		34	52	416	2			710
遺構外（Ⅵ層上面）	1449.8	2			2		1			5					1				11
出土地点不明	812.1	1						1		2			1						5
合計	90373.5	112	2	7	25	13	32	9	9	132	18	1	60	77	614	8			

遺構も残存状態が悪く、遺物の出土量は比較的少ないと言える。特に縄文土器は遺構の残りが悪いものほど出土量が少ない。石器については、出土点数自体は決して少なくないが、器種により出土点数の偏りが大きいことや、石核など、見つからなかった器種がある。意図的に一部の器種がないのかもしれないが、調査区全体が土砂崩れ等により崩落していることも鑑みると、石器も一部は流失してしまっている可能性がある。

遺構外では、上述の包含層を中心に、特にⅢ層、Ⅳ層でまとまった出土遺物がある。ただしこれも後述するが、出土した縄文土器は小片が多く、その点だけみても、この包含層が所謂「捨て場」のよ



第５図　遺構配置図

うな性格のものではないことが分かる。なお「Ⅵ層上面」とは上述の遺構の検出面を指す。

他に近世墓６基が見つかっており、銭貨（寛永通宝）が共伴した。また遺構外からは陶磁器が出土している。

2　基　本　土　層

調査区西壁２か所とＢグリッドラインの沢跡に沿うように東西方向に１箇所、計３箇所で確認した（位置は第５図、断面は第６図に示した）。いずれも上記の沢跡の堆積土にも相当するが良好な堆積様相を示している。

Ⅰ層は盛土である。昭和期に水田・畑地を造成する際、盛られたもので、低くて50cm、高いところで300cmの堆積を確認した。特に調査区西壁の２箇所ではⅠ層の堆積が厚く、第６図中には図示していない。黄褐色を呈し、やや砂質である。

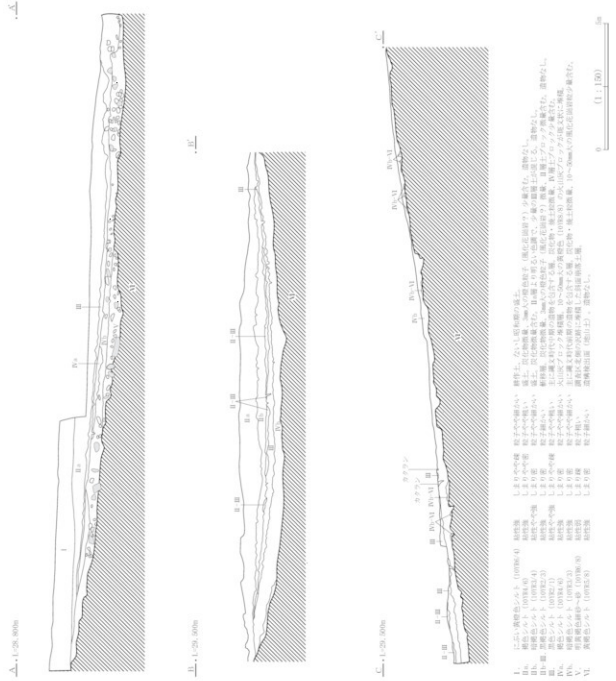
Ⅱa層も盛土である。褐色を呈するシルト層で、上下層（Ⅰ・Ⅱb層）との境界が明瞭である。30～60cm堆積する。おそらくⅠ層と同時期に盛土されたものと考える。また同じⅡ層に類似するものの、層中にⅢ層土がブロックで混入し、Ⅲ層との境界が不明瞭になる（さらに境界が不明瞭なものはⅡb-Ⅲ層の斬移層とした）土層が見受けられ、Ⅱa層の盛土層と同じの可能性もあるが、別層（Ⅱb層）とした。

Ⅲ層は黒色を呈するシルト層で、30cm前後堆積する。層中には炭化物や焼土粒が混じるほか、縄文時代中期の遺物が出土している。なおこの層中で採取した炭化物の年代測定（AMS）を試みたところ、3490±30yrBP（縄文時代後期中葉）との結果を得ている（第Ⅵ章－1）が、層中から出土した遺物に後期に比定される縄文土器はないので、年代が異なる。したがって堆積土は縄文時代後期以降に西側の高い地形から流入した可能性が高い。

Ⅳ層は暗褐色～褐色を呈するシルト層で、40m前後堆積する。層上位には黄褐色の火山灰がブロックで堆積しているのを確認した。この火山灰が堆積する範囲をⅣa層とし、その下をⅣb層とした。火山灰については産地同定分析を行っており、「中掫テフラ（To-Cu）」であるとの結果を得た（第Ⅵ章－2）。Ⅳb層は、炭化物や焼土粒が混じり、また縄文時代前期初頭前葉の遺物が出土している。この層中の炭化物も年代測定を試みており、6370±30yrBP（早期末葉）との結果を得ている（第Ⅵ章－1）。また層下部にはやや大きめの礫が多く混入しており、東側の高い地形から流れてきた自然礫と推測する。

Ⅴ層は調査区北側の基本土層のみで確認された。山砂と10～100cm大の礫で構成される層であり、東側の高い地形（山側）からの崩落土が堆積した層と推測する。調査区の北東端では４m近く、Ⅴ層が堆積しており、かなりの崩落・土砂流失であったことが予想される。

Ⅵ層は黄褐色を呈するシルト層で、やや砂質である。無遺物層であり、主にこの層上面にて遺構を検出した。Ⅵ層より下は基盤層（風化花崗岩により形成された層）で、遺構・遺物共になく、したがってこれ以上の掘り下げは行っていない。　（須原）



第６図　基本土層

Ⅴ　検出遺構・出土遺物

1　縄　文　時　代

（1）竪　穴　住　居　跡

1号住居跡（第7図、写真図版2）

［位置・検出状況］調査区中央、ⅠB8gグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。沢跡の南岸に相当する場所に立地し、包含層（Ⅳb層）を掘り下げる際、歪な方形基調の窪みを確認し、本遺構と判断した。したがって遺構の埋土は包含層と一緒に掘り下げており、土層等の確認はしていない。

［他の遺構との重複関係］なし。

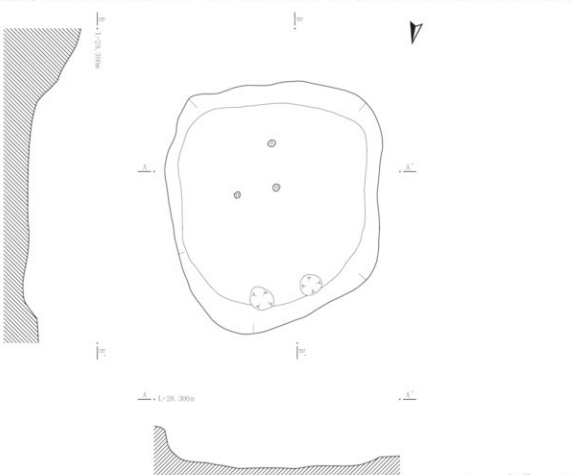
［平面形］歪な方形。　［規模］長軸272cm・短軸224cm・深さ14cm

［埋土］確認していないので不明である。

［床面・壁］Ⅵ層上面を床面と判断した。概ね平坦である。壁は全周するが、一部は沢跡の削平で、床面からの立ち上がりを除き消失している。大きく広がりながら立ち上がる。

［炉］なし。

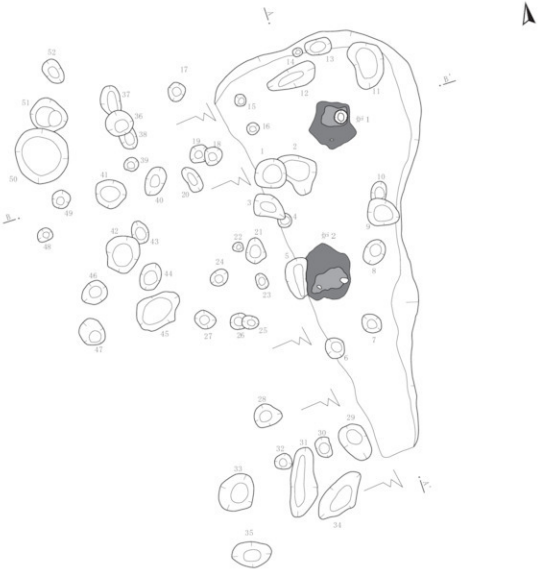
［付属施設］小柱穴3個を確認した。1個は床面の中央に、また別の2個はその周辺である。主柱穴



第7図　1号住居跡

とは考えられず、用途は不明である。
［出土遺物］なし。
［時期］時期判断の根拠となる出土遺物がないので、詳細は定かではないが、埋土下位から出土した炭化物の年代測定（AMS）を行っており、6490±30（早期末葉）との結果を得ている（第Ⅵ章－1）。周辺のⅣ層中からは前期前葉頃の土器が多く出土している点も踏まえ、早期末葉～前期前葉の範疇であると判断した。（須原）

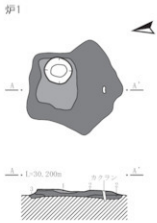
２号住居跡（第８～11図、写真図版２・３･12･21）
［位置・検出状況］調査区中央のやや東寄り、ⅡB2dグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。本遺構は西側の半分が斜面の崩落で消失している。
［他の遺構との重複関係］なし。
［平面形］不明。残存する範囲で長楕円形と推測する。
［規模］長軸（272）cm・短軸（224）cm・深さ14cm
［埋土］４層からなる。検出面（２層）で黄褐色火山灰がブロック状に堆積する。
［床面・壁］炉を検出したⅥ層面を床面と判断した。概ね平坦である。壁は東壁と北壁の一部が残存するが、地形の崩落に伴い、壁の上部は消失している。大きく広がりながら立ち上がる。
［炉］地床炉２個（炉１・２）を確認した。床面の中央、長軸方向に並んでいる。どちらも70～80cm規模で不整形である。焼成は強く、被熱により床下８cmまで明赤褐色に還元、特に炉中央は橙色に還元し、激しく硬化している。
［付属施設］床面上で柱穴16個を確認した。また床面が消失している遺構の東側からは36個の柱穴（状土坑）を検出しており、これらについては可能性も含めて、本遺構に付属する柱穴と判断した。合計52個である。床面の16個は炉を挟んで長軸方向に２列に並ぶようにも見えるが、対となる配列は見いだせず、規則的ではない。また東側の36個も同様に不規則な配置である。規模は20～50cmの不整な円形で深さも10～20cmとやや浅い。
［出土遺物］縄文土器は3019.8g分が出土している。すべて破片である。12点図示した。１・２は斜行縄文を施文、特に１は口縁部に押圧文が巡る。３は非結束羽状縄文である。この３点は他よりもやや古い可能性が高い。４・５は口縁部に横位の結節回転文を施す。６・７・９は斜行縄文を施文するが、６は口縁部と胴部で縄文原体を変えている。８は結束羽状縄文である。４～９は大木２a式の範疇と考える。11は多段の結節回転文で大木２b式か。10、12は中期（大木８a～8b式）で流れ込みによる混入と考える。
　出土した石器の内訳は第３表の通りで、そのうち石鏃５点（13～17）、石鏃失敗品２点（18・19）、石匙１点（20）、尖頭器１点（21）、不定形石器１点（22）、フレイク類４点（23～121）、石皿１点（27）を図示した。
［時期］出土した縄文土器から縄文時代前期前葉（大木２a式期）と判断した。また炉内から採取した炭化物の年代測定（AMS）を行っており、6320±30（前期前葉）との結果を得ている（第Ⅵ章－1）。（須原）



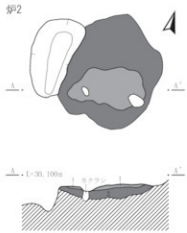
1. 灰黄褐色シルト（10YR4/2）　粘性強　しまりやや密　近世以降の耕作土か。近世陶磁土に類似。
2. 黄褐色火山灰（10YR7/8）　粘性弱　しまりやや密　径5～15mmのブロック状に堆積。
3. にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）　粘性やや強　しまり密　IV層土に類似。炭化物・焼土粒微量含む。
4. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性強　しまり密　炭化物微量、地山ブロック微量、礫少量含む。
5. 褐色シルト（10YR4/4）　粘性強　しまり密　地床土、地山ブロック多量含む。
6. にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）　粘性強　しまりやや密　柱穴、壁溝埋土。炭化物微量、地山ブロック少量含む。

0　1：60　1m

第8図　2号住居跡（1）

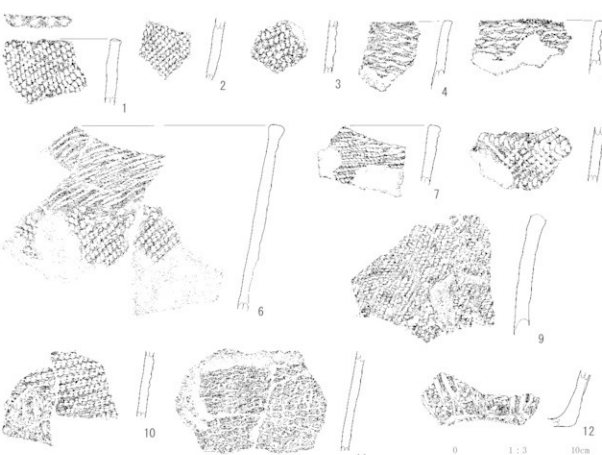


1. 明赤褐色焼土（5YR5/8）　粘性弱　しまり密　硬化した面、強い焼成を受け、被熱で橙色に湿元している。
2. 赤褐色焼土（5YR4/6）　粘性やや弱　しまり密　強い焼成を受け、焼成で赤色に湿元している。1層ほど硬化していない。
3. 褐灰色焼土（7.5YR4/1）　粘性強　しまりやや密　焼土ドで見つかった。焼土（5YR5/8）ブロック準模層。



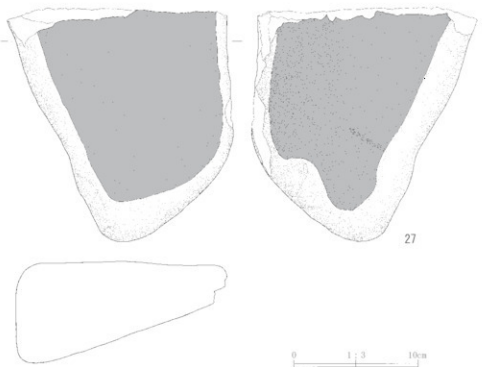
1. 橙色焼土（5YR7/8）　粘性弱　しまり密　硬化した面、強い焼成を受け、被熱で橙色に湿元している。
2. 赤褐色焼土（5YR4/8）　粘性強　しまり密　強い焼成を受け、焼成で赤色に湿元している。炭化物微量含む。

0　1：30　1m



第９図　２号住居跡（２）・出土遺物（１）

第10図　２号住居跡出土遺物（２）



第11図　２号住居跡出土遺物（３）

３号住居跡（第12 ～ 15図、写真図版４·12·22）

［位置・検出状況］調査区中央のやや北寄り、ⅡB1c ～ 2cグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。本遺構は西側の半分が斜面の崩落で消失し、また南東部も消失している。

［他の遺構との重複関係］２号土坑と重複し、本遺構の方が古い。ただし、２号土坑の底面は本遺構埋土中で止まっており、したがって２号土坑により本遺構が壊されることはない。また近世墓（９·10号土坑）とも重複しており、これらの遺構群により、床面が削平されている。

［平面形］不明。残存する範囲で長楕円形と推測する。

［規模］長軸（272）cm・短軸（224）cm・深さ14cm

［埋土］３層確認した。後世の土砂流入により、本遺構埋土のほとんどは消失しており、残存する埋土では２層が本遺構の主体であり、暗褐色シルトである。また２号住居跡とは異なり、埋土中への黄褐色火山灰の混入は見受けられなかった。

［床面・壁］炉を検出したⅥ層面を床面と判断した。概ね平坦である。壁は東壁と北壁の一部が残存するが、地形の崩落に伴い、壁の上部は消失している。大きく広がりながら立ち上がる。

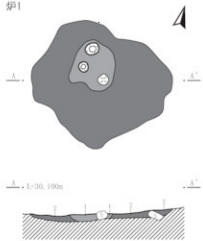
［炉］地床炉７個を確認した（炉１～７）。床面の中央、長軸方向に並んでいる。いずれも不整形で、規模も20cmから100cmと様々である。燃焼面の焼成は強く、被熱により床下５～８cmまで赤色に還元、特に炉１～４は炉中央の被熱が強く、橙色に還元し、激しく硬化している。

［付属施設］床面上で11個確認した。また南側のカクラン土下で10個、住居壁の周辺で２個確認しており、これらは床面の範囲外であるが、床面の周辺に分布することを考慮し、本遺構に付属する柱穴と判断した。したがって合計23個の柱穴を確認した。床面上の柱穴は炉の北側、長軸方向に並ぶようにも見えるが、規則的な配列ではない。またカクラン下の10個を含めても、不規則な配列である。規

L=30.500m
トレンチ
8号土坑
10号土坑
9号土坑
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
上面を
カクランに
より削平
L=30.500m
L=30.500m
1. 暗褐色シルト(10YR3/4)　粘性強　しまり密　近世墓埋土。炭化物・焼土粒微量。地山ブロック少量含む。
2. 暗褐色シルト(10YR3/4)　粘性強　しまり密　炭化物微量含む。
3. 暗褐色シルト(10YR3/4)　粘性強　しまり密　炭化物微量。地山ブロックやや多く含む。
0　1：60　1m

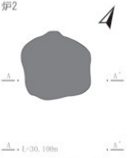
第12図　3号住居跡（1）

炉1



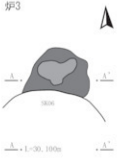
1.赤褐色強土（2.5YR4/8）　粘性弱　しまり疎　混入物無し。
2.暗赤褐色強土（2.5YR3/6）　粘性弱　しまり疎　焼化物粒微量含む。

炉2



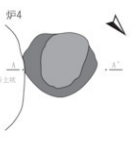
1.暗赤褐色強土（2.5YR3/6）　粘性弱　しまり疎　燃焼面、焼成弱い。

炉3



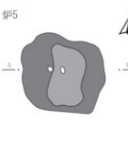
1.橙色強土（5YR6/8）　粘性弱　しまり密　燃焼面、焼成強く、激しく還元している。
2.赤褐色強土（2.5YR4/8）　粘性弱　しまり疎　燃焼面だが、1層より焼成弱い。

炉4



1.明赤褐色強土（2.5YR5/8）　粘性弱　しまり疎　燃焼面、焼成強く、激しく還元している。
2.赤褐色強土（2.5YR4/8）　粘性弱　しまり疎　燃焼面、1層より焼成弱い。

炉5



1.暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性弱　しまり疎　強土少量、焼化物粒微量混入。
2.明赤褐色強土（2.5YR5/8）　粘性弱　しまり疎　燃焼面、焼成強く、激しく還元している。
3.赤褐色強土（2.5YR4/8）　粘性弱　しまり疎　燃焼面、2層より焼成弱い。
4.暗赤褐色強土（5YR3/4）　粘性弱　しまり疎　燃焼面からの熱熱によりわずかに還元している。

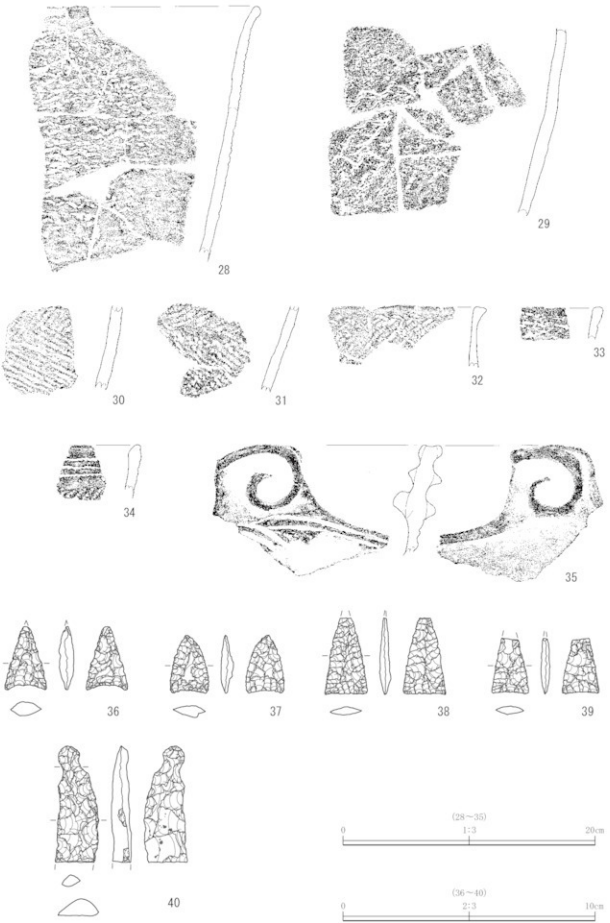
炉6

1.明赤褐色強土（2.5YR5/8）　粘性弱　しまり疎　燃焼面、焼成強く、激しく還元している。
2.暗赤褐色土（5YR3/6）　粘性弱　しまり疎　燃焼面だが、焼成は弱く、わずかに還元。

炉7

1.明赤褐色強土（2.5YR5/8）　粘性弱　しまり疎　燃焼面、焼成強く、激しく還元している。
2.赤褐色強土（2.5YR4/8）　粘性弱　しまり疎　燃焼面、1層より焼成弱い。焼化物微量含む。

第13図　3号住居跡（2）



第14図　３号住居跡出土遺物（１）

模は20～50cmで深さは10～20cmと浅い。

［出土遺物］縄文土器が3691.1ｇ分出土している。いずれも破片である。８点図示した。28・29は比較的大型の破片である。28は多段の結節回転文が横位に巡り、29はS字状連鎖沈文が横位に巡る。30・31は非結束羽状縄文、32は斜行縄文、33は結節回転文が巡る。29は大木２b式の特徴をもち、他は大木２a～２b式の範疇に収まるものか。胎土に繊維の混入がみられるが、微量であるのが特徴である。34は前期末葉、35は中期大木８a式と考える。遺構上面に覆われた斜面崩落土からの流入と考えている。

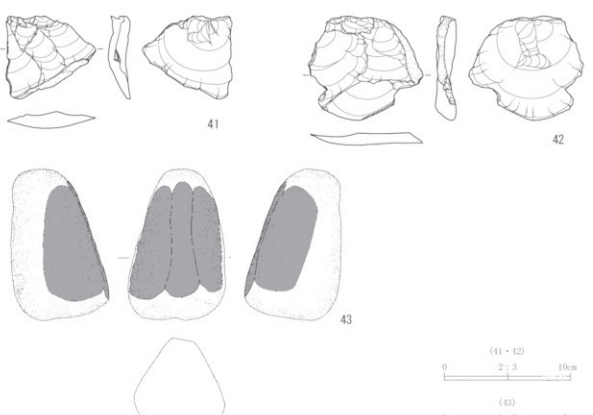
出土した石器の内訳は第３表の通りで、そのうち石鏃４点（36～39）、石匙１点（40）、フレイク類２点（41・42）、敲磨器類１点（43）を図示した。

［時期］埋土下位の出土遺物から前期前葉（大木２a～２b式期）と判断した。また炉内から採取した炭化物の年代測定（AMS）を行っており、6300±30（前期前葉）との結果を得ている。（第Ⅵ章－1）

（須原）

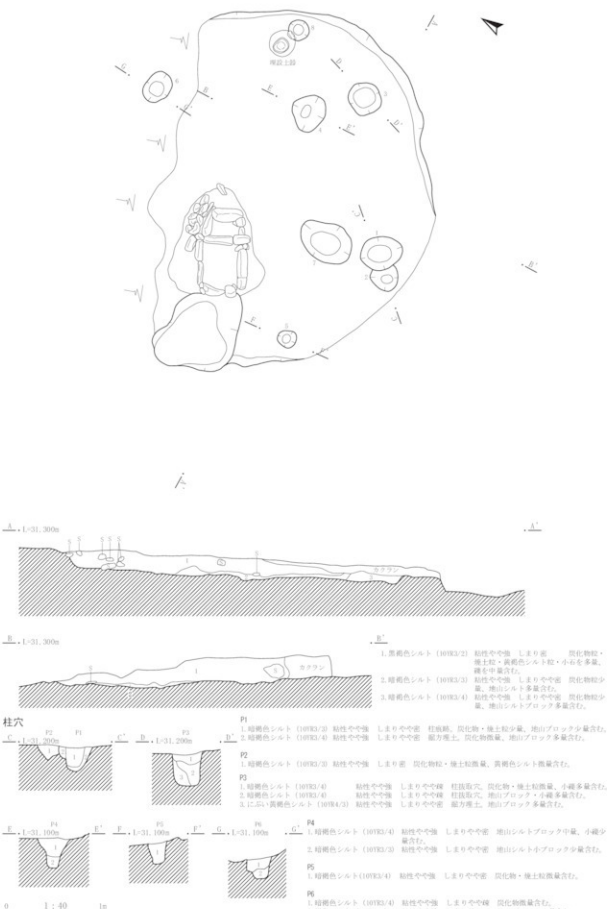
４号住居跡（第16～19図、写真図版５・６・12･13･22）

［位置･検出状況］調査区中央東側にある緩斜面上、ⅡＡ４ｊグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。調査区北側と南側にある２条の沢跡に挟まれた中洲状の立地にあり、本遺構の北側に面する立ち上がりは、この沢跡に起因する斜面の土砂崩落により壊されている。また、南側は平成26年に調査した際の試掘トレンチと重複しており、立ち上がりの一部はこれにより壊されている。本遺構西側の立ち上がりは、斜面の土砂崩落も考えられるが近現代の田畑地に関連する撹乱により、床面から僅かに残しその多くが壊されている。

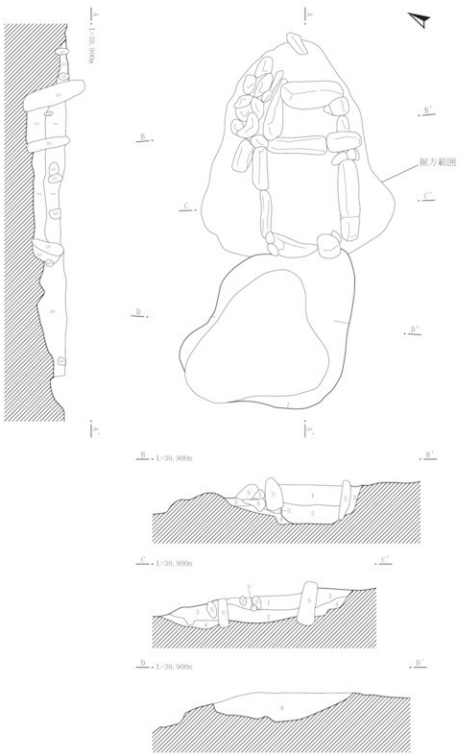


第15図　３号住居跡出土遺物（２）

［他の遺構との重複関係］５号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。
［平面形］円形と推定する。
［規模］長軸375cm、短軸（301）cm、深さ28cm
［埋土］３層からなる。１層は黒褐色シルトを主体とし、大小礫の混入が目立ち、全体的に万遍なく含まれる。堆積状況と混入物の様相から、斜面の崩落による土砂の流入によって埋まった可能性が考えられる。２・３層は暗褐色シルトを主体とし、地山シルトブロックを含む。堆積状況から自然堆積とみられる。
［床面］炉を検出したⅥ層面を床面とする。Ⅵ層土内に非常に多く含まれる礫が床面上で露出しており凹凸が目立つが、概ね平坦である。
［壁］斜面上方の東壁と南壁の一部、斜面下方の西壁の一部で立ち上がりを検出した。やや外へと広がるが、概ね直立気味に立ち上がる。
［炉］床面西側の壁際に複式炉１基を確認した。炉内に被熱痕は認められない。石囲部２個と前庭部で構成され、規模は全長で173cmを測る。前庭部を手前として石囲部は、奥側（東）は46×38cmの長方形を呈し、深さは床面から22cmである。手前側（西）は64×56cmの長方形を呈し、深さは床面から19cmである。石囲部の掘方は118×102cmの不整な楕円形を呈し、深さは床面から24cmである。前庭部は110×84cmの楕円形を呈し、深さは床面から15cmである。炉石には大小19個ほどの礫を使用し、主に扁平な礫を用いている。長短軸ともに大型の扁平礫を各１個使用する部分が多いが、中には奥側石囲部の南面炉石部分では小・中型の扁平礫を複数並べて一辺が構成されており、また手前側石囲部の西面炉石では中・大型の扁平礫２個で炉壁を構築し、両隅の角の隙間に小型の扁平礫を挟んで間を埋めている。炉の構築に関しては、炉石は全体的に概ね直立気味に据えられているが、若干斜めにすることで開口部が広く底面にかけて窄む形状をしている。掘方内の石囲部の配置は中央より南側に寄せてあり、東・南面の炉石はほぼ掘方壁面に沿う。逆に掘方北側には炉石と掘方壁面との間に広く隙間ができており、奥側石囲部の北面炉石付近には掘方埋土内に10 ～ 20cm大の礫が多数詰め込まれている。礫が詰め込まれているのはこの箇所だけで、全体にはみられない。理由は定かではないが、掘方範囲が広くなっているので、据えた炉石を固定ないし補強するため、広く開いた側（炉石の北側）には礫を詰め込んだことが推測される。
［付属施設］埋設土器を１個確認した。東壁付近の床面に位置し、径約27cm、深さ９cmの掘方に、深鉢（47）の胴部下半が正位の状態で埋められている。
　柱穴を８個確認した。配置から、Ｐ１・３・６が主柱穴と考えられる。（澤目）
［出土遺物］縄文土器が2158.2ｇ分出土している。遺構の大半が消失しているため、本遺構に伴う遺物と判断できたものは少ない。４点図示した。44は床面上から出土した深鉢で口縁部から胴部上半が残存する。文様は縄文のみである。45も床面出土の口縁部片で口縁部が無文、胴部に縄文が施文される。47は埋設土器で胴部下半が残存する。胴部上半以上は遺構の削平に伴い消失したと推測される。胴部には縄文のみ施文底面には敷物圧痕（ござ目編み）が見受けられる。46は胴部片で沈線に縄文が施文される。
　出土した石器の内訳は第３表の通りで、そのうち石鏃１点（48）、フレイク１点（49）、不定形石器１点（50）、敲磨器類１点（51）を図示した。
［時期］出土した土器は粗製が多く、時期判断は難しい。46の文様から中期後葉と推測、また本遺構には複式炉が付属することを考えれば大木９式期以降であると推測する。（須原）


A
A'
L=31.300m
カクラン
B
B'
1. 黒褐色シルト（10YR3/2）粘性やや強　しまり密　　炭化物粒・焼土粒・黄褐色シルト粒・小石を多量、礫を中量含む。
2. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや強　しまりやや密　炭化物粒少量、地山シルト多量含む。
3. 暗褐色シルト（10YR3/4）粘性やや強　しまりやや密　炭化物粒少量、地山シルトブロック多量含む。
柱穴
C
C'
L=31.200m
P2
P1
D
D'
L=31.200m
P3
E
E'
L=31.100m
P4
F
F'
P5
G
G'
L=31.100m
P6
P1
1. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや強　しまりやや密　柱痕跡、炭化物・焼土粒少量、地山ブロック少量含む。
2. 暗褐色シルト（10YR3/4）粘性やや強　しまりやや密　掘方埋土、炭化物微量、地山ブロック多量含む。
P2
1. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや強　しまり密　炭化物粒・焼土粒微量、黄褐色シルト微量含む。
P3
1. 暗褐色シルト（10YR3/4）　粘性やや強　しまりやや弱　柱抜取穴、炭化物・焼土粒微量、小礫多量含む。
2. 暗褐色シルト（10YR3/4）　粘性やや強　しまりやや弱　柱抜取穴、地山ブロック・小礫多量含む。
3. にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）粘性やや強　しまりやや密　掘方埋土、地山ブロック多量含む。
P4
1. 暗褐色シルト（10YR3/4）粘性やや強　しまりやや密　地山シルトブロック中量、小礫少量含む。
2. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや強　しまりやや密　地山シルトブロック少量含む。
P5
1. 暗褐色シルト（10YR3/4）　粘性やや強　しまりやや密　炭化物・焼土粒微量含む。
P6
1. 暗褐色シルト（10YR3/4）粘性やや強　しまりやや弱　炭化物微量含む。
2. 褐色シルト（10YR4/4）　粘性やや強　しまり弱　　地山ブロック少量含む。
0　1：40　1m

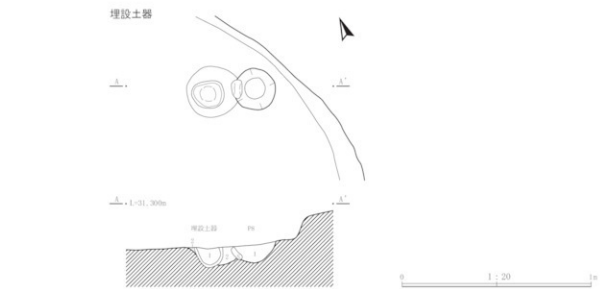
第16図　4号住居跡（1）



1.暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや強　しまりやや密　炭化物粒少量、焼土粒微量、礫中量含む。
2.黒色シルト（10YR2/1）粘性やや強　しまりやや密　炭化物粒・焼土粒微量に含む。
3.暗褐色シルト（10YR3/4）粘性やや強　しまり密　掘方埋土、炭化物粒・焼土粒・地山シルトブロックを少量含む。
4.褐色シルト（10YR4/4）粘性やや強　しまりやや密　掘方埋土、黒褐色シルトブロック少量含む。
5.暗褐色シルト（10YR3/4）粘性やや強　しまり密　掘方埋土、炭化物粒・焼土粒・地山シルトブロック少量含む。
6.暗褐色シルト（10YR3/4）粘性やや強　しまりやや密　前期部埋土、炭化物粒・焼土粒微量、地山シルトブロック中量含む。

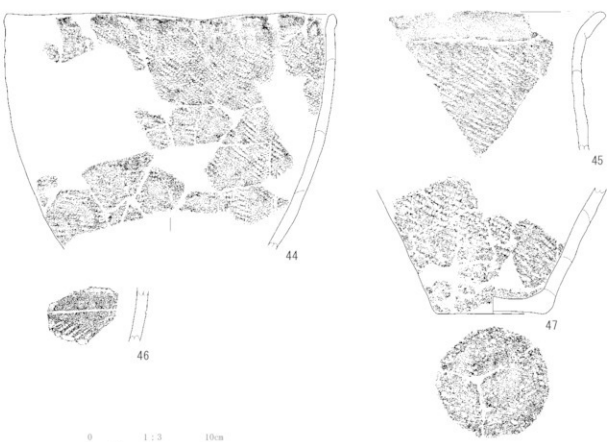
0　1：20　1m

第17図　4号住居跡（2）

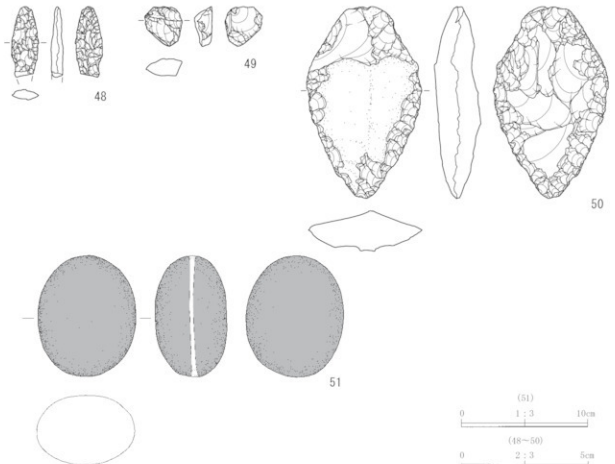


P8
1.暗褐色シルト(10YR3/3)　粘性やや強　しまりやや密　明黄褐色シルトブロック少量、小礫微量含む。

埋設土器
1.暗褐色シルト(10YR3/3)　粘性やや強　しまりやや密　土器内堆土、明黄褐色シルトブロック微量、小礫微量、オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質シルト少量含む。
2.暗褐色シルト(10YR3/4)　粘性やや強　しまりやや密　地山ブロック少量含む。



第18図　4号住居跡（3）・出土遺物（1）



第19図　４号住居跡出土遺物（２）

５号住居跡（第20～23図、写真図版６・７·13·14·22·23）

［位置・検出状況］調査区中央東側にある緩斜面上、調査区北側と南側にある２条の沢跡に挟まれた中洲状の立地にあり、ⅡＢ４aグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。本遺構の中央を貫くように平成26年度に行われた調査の試掘トレンチが位置し、東側の壁の立ち上がりはこれにより壊されている。なおトレンチの掘り込みが本遺構床面のほぼ直上までであったことから、床面は残存している。西側は、斜面の土砂崩落によって壁の立ち上がりは消失している。北側の大半は４号住居跡と重複し、これに壊されているため壁の立ち上がりは消失している。

［他の遺構との重複関係］４号・６号・７号住居跡と重複し、本遺構の方が６号・７号住居跡より新しく、４号住居跡より旧い。

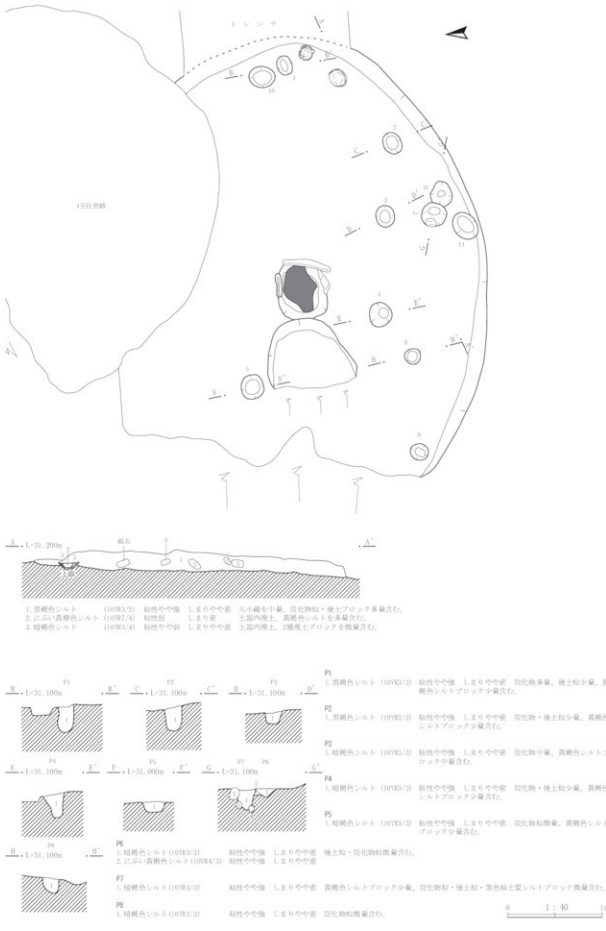
［平面形］円形と推定する。

［規模］長軸（492）cm、短軸（442）cm、深さ20cm

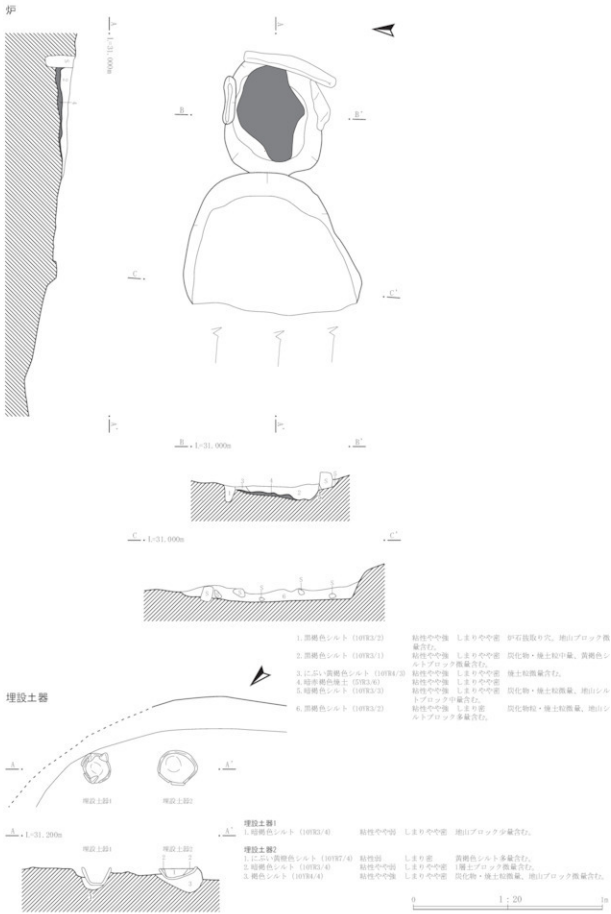
［埋土］単層で、黒褐色シルトを主体とする。大小礫の混入が目立ち、全体的に万遍なく含まれる。堆積状況と混入物の様相から、斜面の崩落による土砂の流入によって一度に埋まった可能性が考えられる。堆積状況から自然堆積とみられる。

［床面］炉を検出したⅥ層面を床面とする。Ⅵ層土内に非常に多く含まれる礫が床面上で露出しており凹凸が目立つが、概ね平坦である。

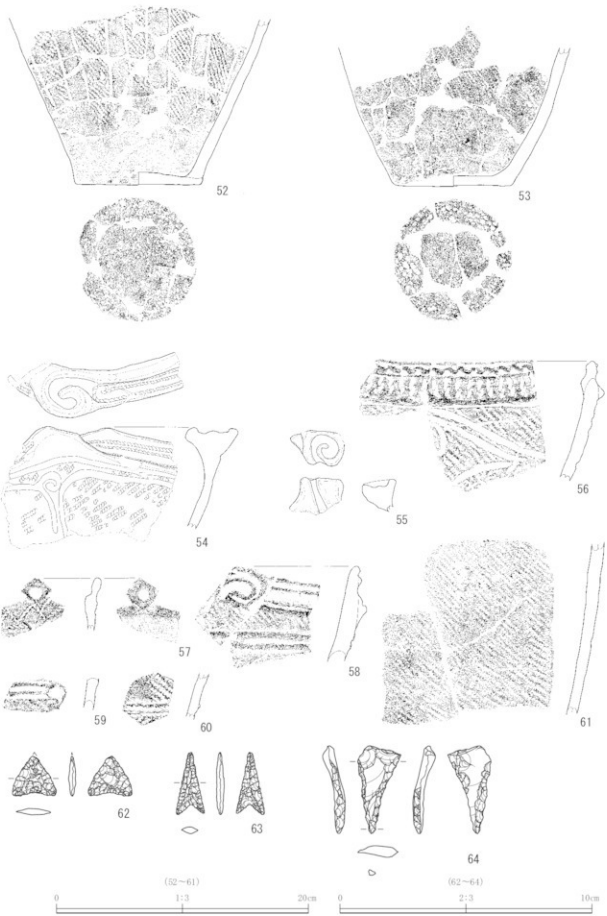
［壁］斜面上方の東・南壁の一部の立ち上がりを検出した。やや外へと広がるが、概ね直立気味に立ち上がる。北壁と西壁は消失している。


トレンチ
4号住居跡
A
A'
L=31.200m
礫石
1. 黒褐色シルト　(10YR3/2)　粘性やや強　しまりやや密　大小礫を中量、炭化物粒・焼土ブロック多量含む。
2. にぶい黄褐色シルト (10YR7/4)　粘性密　しまり密　土器内埋土、黄褐色シルトを多量含む。
3. 暗褐色シルト　(10YR3/4)　粘性やや弱　しまりやや密　土器内埋土、3層埋土ブロックを微量含む。
P1
1. 黒褐色シルト（10YR3/2）粘性やや強 しまりやや密 炭化物多量、焼土粒少量、黄褐色シルトブロック少量含む。
P2
1. 黒褐色シルト（10YR2/2）粘性やや強 しまりやや密 炭化物・焼土粒少量、黄褐色シルトブロック少量含む。
P3
1. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや強 しまりやや密 炭化物中量、黄褐色シルトブロック中量含む。
P4
1. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや強 しまりやや密 炭化物・焼土粒少量、黄褐色シルトブロック少量含む。
P5
1. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや強 しまりやや密 炭化物粒微量、黄褐色シルトブロック少量含む。
P6
1. 暗褐色シルト(10YR3/3)　粘性やや強 しまりやや密 焼土粒・炭化物粒微量含む。
2. にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)　粘性やや強 しまりやや密
P7
1. 暗褐色シルト(10YR3/3)　粘性やや強 しまりやや密 黄褐色シルトブロック少量、炭化物粒・焼土粒・黒色粘土質シルトブロック微量含む。
P8
1. 暗褐色シルト(10YR3/3)　粘性やや強 しまりやや密 炭化物粒微量含む。
0　1：40　1m

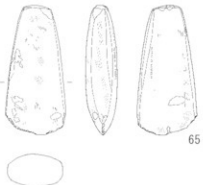
第20図　5号住居跡（1）

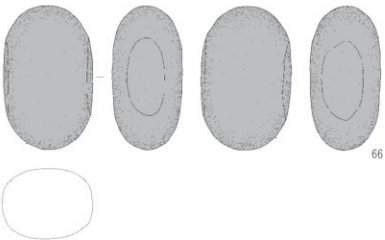

炉
A
A'
B
B'
C
C'
L=31.000m
埋設土器
埋設土器1
埋設土器2
L=31.200m
1. 黒褐色シルト（10YR3/2）　粘性やや強　しまりやや密　炉石抜取り穴。地山ブロック微量含む。
2. 黒褐色シルト（10YR3/1）　粘性やや強　しまりやや密　炭化物・焼土粒中量、黄褐色シルトブロック微量含む。
3. にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）　粘性やや強　しまりやや密　焼土粒微量含む。
4. 暗赤褐色焼土（5YR3/6）　粘性やや強　しまりやや密
5. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性やや強　しまりやや密　炭化物・焼土粒微量、地山シルトブロック中量含む。
6. 黒褐色シルト（10YR3/2）　粘性やや強　しまり密　炭化物粒・焼土粒微量、地山シルトブロック多量含む。
埋設土器1
1. 暗褐色シルト（10YR3/4）　粘性やや弱　しまりやや密　地山ブロック少量含む。
埋設土器2
1. にぶい黄褐色シルト（10YR7/4）　粘性弱　しまり密　黄褐色シルト多量含む。
2. 暗褐色シルト（10YR3/4）　粘性やや弱　しまりやや密　1層土ブロック微量含む。
3. 褐色シルト（10YR4/4）　粘性やや強　しまりやや密　炭化物・焼土粒微量、地山ブロック微量含む。
0
1：20
1m

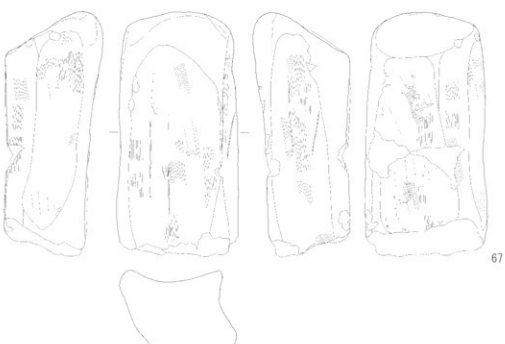
第21図　5号住居跡（2）

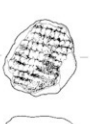


第22図　５号住居跡出土遺物（１）









(67)
0　1：4　10cm

(68)
0　1：2　5cm

(65・66)
0　1：3　10cm

第23図　５号住居跡出土遺物（２）

[炉] 床面中央からやや西側寄りで複式炉１基を確認した。石囲部１個と前庭部で構成され、規模は全長で137cmを測る。石囲部は、58×56cmの方形を呈し、深さは床面から11cmである。前庭部は95×74cmの台形状を呈し、深さは床面から７cmである。炉内に燃焼面が確認できた。燃焼面の被熱はやや弱く、炉面下２～３cmが赤色に還元している。炉石は扁平な礫が一辺に１個使用されており、東面と南面の二辺で合わせて２個確認した。北面炉石は抜き取られており、抜取穴がみられる。前庭部を手前とした西面には炉石・抜取穴ともにみられない。掘方の立ち上がりも緩やかであるため、一面は開放されていた可能性も考えられる。炉の構築に関しては、炉の範囲よりわずかに大きく掘り込み、炉石を掘方壁面に密着するように沿わせて方形状に埋め込み、わずかに空いた隙間には埋土を充填し、炉石を固定している。

[付属施設] 埋設土器を２個確認した。東壁際の床面に位置し、隣接している。より東寄りのものを埋設土器１とし、径約20cm、深さ10cmの掘方に土器が埋設されており、深鉢の胴部下半～底部のみ残存している。また、南寄りのものを埋設土器２とし、径約25cm、深さ13cmの掘方に土器が埋設されており、深鉢の胴部下半～底部のみ残存している。土器内部には、にぶい黄橙色シルトが充填されており、本遺構埋没以前に人為的に埋められた埋土とみられる。

柱穴を11個確認した。配置から、Ｐ１・２・５・７・８が主柱穴になると考えられる。　（澤目）

[出土遺物]縄文土器が607.6ｇ分出土している。５号住居跡同様、遺構の大半が消失していることから、出土遺物量も少ない。９点図示した。52･53は埋設土器である。どちらも深鉢で胴部下半のみ残存する。遺構が削平を受けていることから推測すると、どちらも本来は胴部上半があった可能性が高い。52は沈線による縦位の区画文と考えられ、区画内には磨消技法により縄文が施文される。53は縄文が施文され、わずかに沈線が見受けられるので、52と同様の文様であった可能性が高い。どちらも大木９式と推測する。54は浅鉢の口縁部片で上面を向いた隆帯による渦巻文と縄文原体押圧文が施文され、胴部には縄文施文後、沈線文が施文される。大木８a式古段階の特徴を有する。55・56も大木８a式の範疇に収まる。58は大木８b式の深鉢口縁部片で、隆帯による渦巻文が施文される。

出土した石器の内訳は第３表の通りで、そのうち、石鏃２点（62・63）、石錐1点（64）、磨製石斧1点（65）、敲磨器類１点（66）、砥石１点（67）を図示した。砥石（67）は床面直上から出土している。大型で角の丸い立方形を呈し、四面に研磨痕が確認でき、使用頻度の高い面は窪んでいる。

土製品では円盤形土製品１点（68）が出土している。深鉢の胴部片を転用しており、側面は打ち欠かれているものの研磨痕が明確ではない。

[時期]出土した土器の時期幅は広いが埋設土器の時期を基にして、中期後葉（大木９式期）と判断した。（須原）

６号住居跡（第24・25図、写真図版７・８）

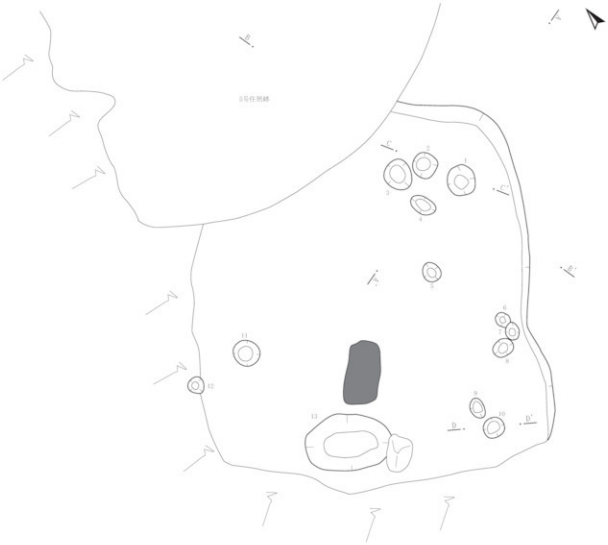
[位置・検出状況] 調査区中央東側にある緩斜面上、調査区北側と南側にある２条の沢跡に挟まれた中洲状の立地にあり、ⅡB 3a・3b～ⅡB 4a・4bグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。南～西側は、斜面の土砂崩落によって壁の立ち上がりは消失している。北側の大半は５号住居跡と重複し、これに壊されているため壁の立ち上がりは消失している。

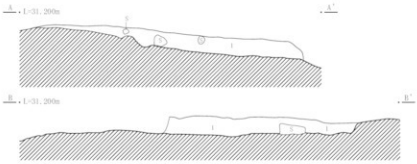
[他の遺構との重複関係] ５号・７号住居跡と重複し、本遺構の方が７号住居跡より新しく、５号住居跡より旧い。

[平面形] 円形と推定する。

[規模] 長軸（460）cm、短軸（430）cm、深さ18cm

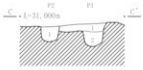
[埋土] 単層で、黒褐色シルトを主体とする。大小礫の混入が目立ち、全体的に万遍なく含まれる。





1. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性やや強　しまりやや密　炭化物粒・焼土粒を中量含む。大小礫を中量含む。

柱穴



P1

1. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性やや強　しまりやや密　炭化物粒・焼土粒・黄褐色シルトを少量含む。
2. 暗褐色シルト（10YR3/4）　粘性やや強　しまりやや密　黄褐色シルト少量、焼土粒微量含む。

P2

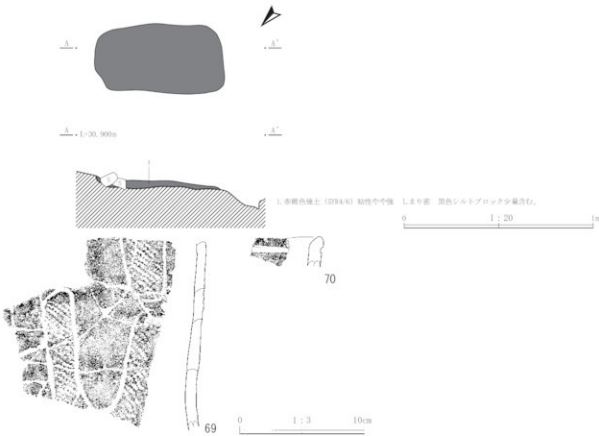
1. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性やや強　しまりやや密　黄褐色シルト粒・炭化物粒微量含む。

P10

1. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性やや強　しまりやや密　黄褐色シルトブロック中量、炭化物粒・焼土粒微量含む。

0　1：40　1m

第24図　6号住居跡（1）



第25図　６号住居跡（２）・出土遺物

堆積状況と混入物の様相から、斜面の崩落による土砂の流入によって一度に埋まった可能性が考えらえる。斜面上方に位置する東壁上端の一部は、土砂流入の際に削られたと見られ、この周辺の埋土には地山シルトブロックの混入が多い。堆積状況から自然堆積とみられる。

［床面］炉を検出したⅥ層面を床面とする。Ⅵ層土内に非常に多く含まれる礫が床面上で露出しており凹凸が目立つが、概ね平坦である。

［壁］斜面上方の東壁と、南壁の一部の立ち上がりを検出した。若干外へと広がるが、概ね直立気味に立ち上がる。北壁と西壁は消失している。東壁上端の一部は土砂流入の際に削られており、やや広がりながら立ち上がる。

［炉］床面西側から燃焼面を1箇所確認し、地床炉と判断した。規模は67×36cmの楕円形を呈し、被熱は弱いが４cmほど赤色に還元している。

［付属施設］柱穴を13個確認した。配列は不規則で、主柱配列の想定は難しい。　（澤目）

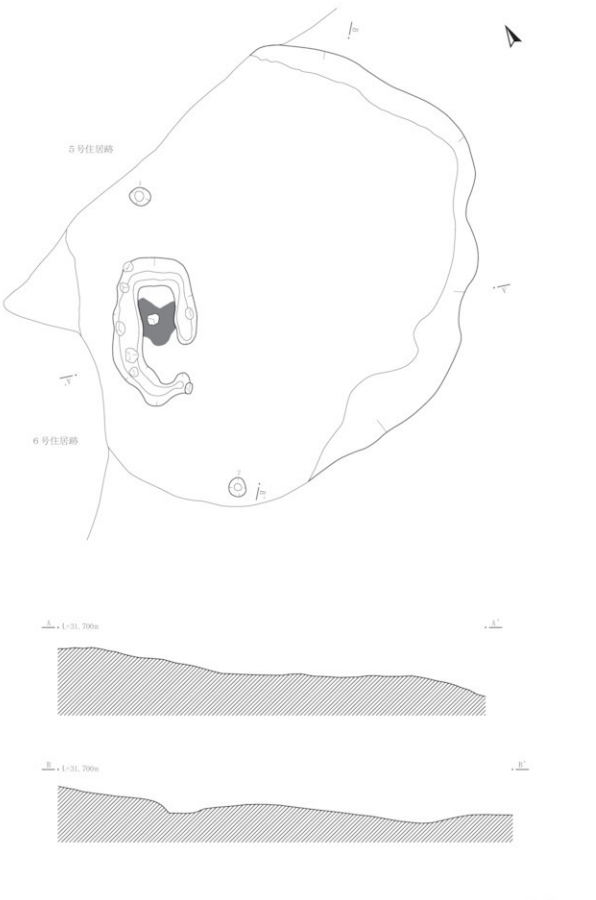
［出土遺物］縄文土器が80.3ｇ分出土している。出土量は４・５号住居跡と比べても極端に少ない。２点図示した。69は深鉢の胴部片で沈線による楕円形区画文が施文され、区画内に充填技法で縄文が施文される。大木９式と判断した。70は小片であるが深鉢の口縁部片で沈線が施文される。

石器は第３表の通り出土しているが、図示していない。

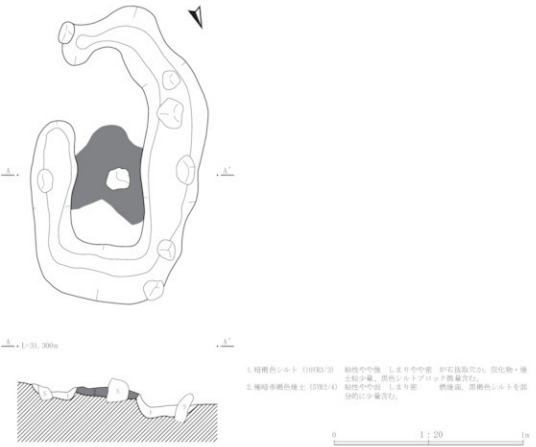
［時期］出土遺物から中期後葉（大木９式期）と判断した。　（須原）

７号住居跡（第26・27図、写真図版８・14）

［位置・検出状況］調査区中央東側にある緩斜面上、調査区北側と南側にある２条の沢跡に挟まれた



第26図　7号住居跡（1）



第27図　７号住居跡（２）

中洲状の立地にあり、ⅡＢ４a・４b～ⅡＢ５a・５bグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。北側は平成26年の調査の際の試掘トレンチ、北西～西側は５号・６号住居跡により壊されている。残存状況は極めて悪く、斜面の土砂崩落の影響を強く受けているため、壁の立ち上がりや遺構内の埋土は消失している。本遺構は、緩斜面上に概ね平坦な面が構築された地形であることに加え、この面から被熱痕と柱穴を検出したことから竪穴住居跡と推定した。

［他の遺構との重複関係］５号・６号住居跡と重複し、本遺構の方が旧い。

［平面形］不整な楕円形と推定する。

［規模］長軸（460）cm、短軸（458）cm、深さ（14）cm

［埋土］不明である。本遺構の燃焼面上には、６号住居跡に流入する土砂崩落による埋土が堆積することから、本遺構内にも類似する埋土が堆積していた可能性が考えられる。

［床面］炉を検出したⅥ層面を床面とする。Ⅵ層土内に非常に多く含まれる礫が床面上で露出しており凹凸が目立つが、概ね平坦である。

［壁］床面から僅かに勾配のつく面を壁とした。緩やかに大きく広がりながら立ち上がる。

［炉］床面西側から燃焼面を１箇所確認しており、炉の可能性がある。43×34cmの不整形を呈し、被熱はやや強く、５cmほど赤色に還元している。燃焼面の両脇は、別の埋土で壊された様な断面形をしており、周囲には燃焼面を囲む様に溝状の窪みがみられる。本来はこの場所に炉石が据えられおり、複式炉ないし石囲炉が設けられていた可能性が考えられる。

［付属施設］柱穴を２個確認した。Ｐ１・２は主柱穴の可能性が考えられるが、全体の配置が不明瞭であるため想定は難しい。　（澤目）

［出土遺物］周辺から土器片が出土しているが、本遺構に伴うと判断できるものは見受けられない。
［時期］出土遺物がなく、時期判断は難しいが、重複する６号住居跡の時期から中期後葉（大木９式期）と判断した。（須原）

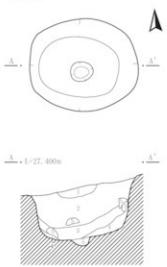
（２）土　　坑

１号土坑（第28図、写真図版９）
［位置・検出状況］調査区東端中央、ⅠB7gグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。
［他の遺構との重複関係］なし。
［平面形］不整な楕円形　［規模］長軸115cm、短軸97cm、深さ54cm
［底面・壁］Ⅵ層面を底面とした。わずかに西へと傾斜するが、概ね平坦である。壁は全周する。ほぼ直立である。
［埋土］４層からなる。黒褐色～暗褐色シルトが主体となり、炭化物や地山ブロックが混入する。堆積様相は所謂レンズ堆積であり、自然堆積と考える。
［付属施設］副穴１個がある。底面のほぼ中央に位置し、25×20cmの楕円形で、深さは８cmを測る。断面形は歪である。埋土は３層土に類似するので、遺構が埋没する際、副穴も埋没したことが推測される。
［出土遺物］土器が186.6ｇ分出土している。ただし小片であり、流れ込みによる可能性が高く、遺構に伴うものとは考えにくい。
［性格］平面形・断面形から貯蔵穴と推測する。
［時期］時期の判断ができる出土遺物がないが、２層から採集した炭化物の年代測定（AMS）で、5950±30yrBP（前期初頭）という結果を得ており（第Ⅵ章－１）、この結果を基に前期初頭と判断した。

２号土坑（第28図、写真図版９）
［位置・検出状況］調査区中央、ⅡB1bグリッドに位置する。Ⅵ層上面、３号住居跡検出面上で検出した。
［他の遺構との重複関係］３号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。
［平面形］楕円形　［規模］長軸158cm、短軸142cm、深さ33cm
［底面・壁］底面はほぼ平坦で、壁は若干外へと広がるが、概ね直立気味に立ち上がる。断面形状は逆台形を呈する。
［埋土］３層からなる。褐色シルトを主体とする。堆積状況から自然堆積とみられる。
［出土遺物］縄文土器が733.6ｇ分出土している。２点図示した。71は小片だが深鉢の口縁部片で縄文施文後、隆帯を付す。大木８ｂ－１式と推測する。72も口縁部片で71と同様の隆帯がつき、また縄文施文後、沈線が巡る。大木８a式の範疇である。石器も出土しており、敲磨器類２点（73･74）図示した。74は両面の中央に浅い凹痕が見受けられる。
［性格］本遺構は近辺の住居に絡む貯蔵穴の可能性が考えられる。ただし２～７号住居跡とは時期が異なる。
［時期］縄文時代中期中葉～後葉（大木8a ～ 8b式期）に比定される。

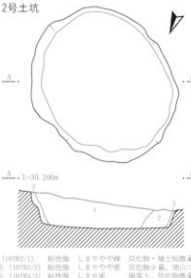
３号土坑（第28図、写真図版９）
［位置・検出状況］調査区中央から東寄りのⅡB ３dグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。
［他の遺構との重複関係］なし。

1号土坑



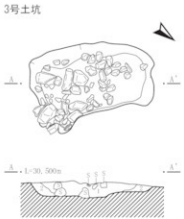
1.褐色シルト（10YR4/4）　粘性強　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック中量含む。
2.黒褐色シルト（10YR3/2）粘性強　しまり密　　炭化物・焼土粒微量、礫少量含む。
3.暗褐色シルト（10YR3/3）粘性強　しまりやや緩　炭化物微量、地山ブロック少量含む。
4.褐色シルト（10YR4/4）　粘性強　しまりやや密　焼落土、地山ブロックやや多く含む。
5.暗褐色シルト（10YR3/4）粘性強　しまりやや密　廃穴埋土、炭化物微量含む。

2号土坑



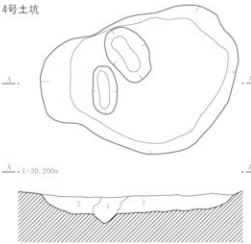
1.黒色シルト（10YR2/1）　粘性強　しまりやや緩　炭化物・焼土粒微量、礫少量含む。
2.黒褐色シルト（10YR3/2）粘性強　しまりやや密　炭化物少量、地山ブロック微量、礫少量含む。
3.暗褐色シルト（10YR3/3）粘性強　しまり密　　焼落土、炭化物微量、地山ブロック中量含む。

3号土坑



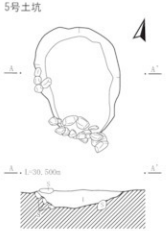
1.暗褐色シルト（10YR3/3）粘性強　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック微量含む。
2.黒褐色シルト（10YR3/2）粘性強　しまりやや密　炭化物微量、黒褐色シルトブロック少量含む。

4号土坑



1.黒褐色シルト（10YR3/2）粘性強　しまりやや緩　近世墓の埋土に類似する。地山
　ブロック微量含む。
2.暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや弱　しまりやや密　炭化物微量、礫中量含む。

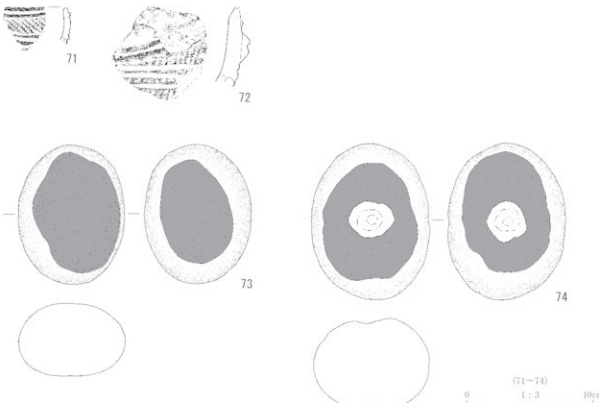
5号土坑



1.暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや強　しまり密　炭化物微量、地山ブロック少量含む。

0　1：40　1m

第28図　土坑（縄文時代）



第29図　土坑出土遺物

［平面形］不整な隅丸方形　［規模］長軸134cm、単軸73cm、深さ最大16cm
［底面・壁］Ⅵ層上面を床面とした。概ね平坦で西側が、わずかに高い。壁は東角周辺を除き、全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。
［埋土］２層からなる。暗褐色シルト（１層）主体で、炭化物が混入するほか、10cm大の礫が多量に混じる。
［出土遺物］なし。
［性格］不明。
［時期］出土遺物がないので、時期判断の根拠が乏しいが、周辺遺構の時期から縄文時代と判断した。
（須原）

４号土坑（第28図、写真図版９）
［位置・検出状況］調査区中央、南寄りのⅡＢ２dグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。
［他の遺構との重複関係］２号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。
［平面形］不整な楕円形　［規模］長軸212cm、短軸157cm、深さ18cm
［底面・壁］Ⅵ層面を底面とした。ほぼ平坦である。壁は全周する。大きく広がりながら立ち上がる。
［埋土］単層である（１層は近世以降に堆積した）。暗褐色シルトを主体で炭化物が混入する。礫が多量に混入し、その堆積状況から自然堆積と考える。
［出土遺物］土器が110.7ｇ分出土している。ただし全て小片で、流れ込みによる混入の可能性が高く、遺構に伴うものとは考えにくい。
［性格］不明。
［時期］縄文時代

５号土坑（第28図、写真図版５）

［位置・検出状況］調査区中央に位置する。Ⅵ層上面で検出した。

［他の遺構との重複関係］なし。

［平面形］不整な楕円形　［規模］長軸120cm、短軸88cm、深さ17cm

［底面・壁］Ⅵ層面を底面とした。礫層の露出が見受けられ、底面中央はわずかにくぼんでいる。南壁は南壁の一部を除き全周する。大きく広がりながら立ち上がる。

［埋土］単層である。暗褐色シルトを主体で炭化物が混入する。礫が多量に混入し、その堆積状況から自然堆積と考える。

［出土遺物］なし。

［性格］不明。

［時期］縄文時代　（須原）

（３）焼　土　遺　構

1号焼土遺構（第30図、写真図版10）

［位置・検出状況］調査区中央から南寄りのⅡＢ１fグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。

［他の遺構との重複関係］柱穴と重複し、本遺構の方が古い。

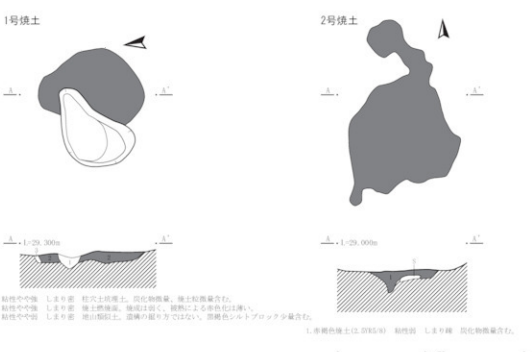
［平面形］不整な瓢箪形　［規模］長軸59cm、短軸（40）cm

［焼成］掘り方などは確認できないので、検出面で直に焼成を加えている。強い被熱により検出面から約６cm下まで赤褐色に還元している。

［出土遺物］なし。

［性格］不明。

［時期］縄文時代



第30図　焼土遺構

２号焼土遺構（第30図、写真図版10）

［位置・検出状況］調査区中央のＩＢ９ｃグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。

［他の遺構との重複関係］なし。

［平面形］歪な方形で北側が細く延びる　［規模］長軸89cm、短軸65cm

［焼成］掘り方などは確認できないので、検出面で直に焼成を加えている。焼成自体は弱く、中心付近は被熱により検出面から約12cm下まで還元するものの、外側は５cm程度が還元するのみである。北側に細く延びる範囲も、付属施設などがあったものではなく、被熱が及んだだけと考えている。

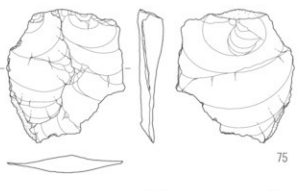
［出土遺物］なし。

［性格］不明。

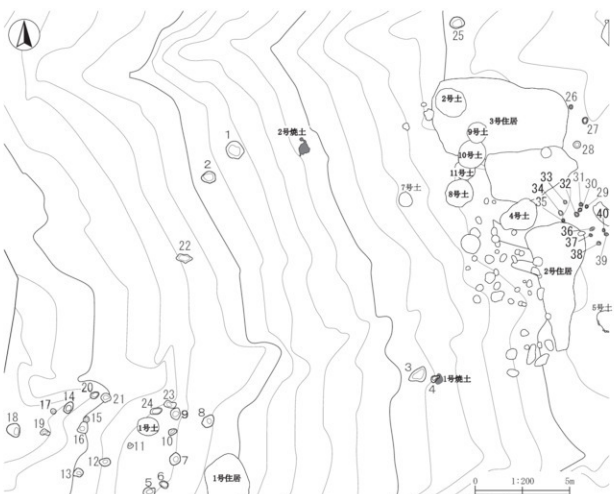
［時期］縄文時代

（４）柱穴状土坑

［位置・検出状況］ⅡＢ２ｄ～２ｆグリッド、ＩＢ５ｆ～８ｆグリッドに集中する。Ⅵ層上面で検出した。



柱穴状土坑出土遺物



第31図　柱穴状土坑分布図・出土遺物

第４表　柱穴状土坑一覧

柱穴名	検出位置（グリッド）	規模（cm）	底面標高（m）	深さ（cm）	備考
1	ⅠＢ８ｃ	21×17	28.042	35.8	
2	ⅠＢ８ｃ	15×13	27.874	42.6	
3	ⅡＢ１ｆ	21×15	28.725	37.5	
4	ⅡＢ１ｆ	13×10	29.020	18.0	
5	ⅠＢ７ｈ	12×8	27.082	51.8	
6	ⅠＢ７ｇ	9×7	27.294	30.6	
7	ⅠＢ７ｇ	12×10	27.224	37.6	
8	ⅠＢ８ｇ	15×11	27.317	48.3	
9	ⅠＢ７ｆ	12×10	27.018	58.2	
10	ⅠＢ７ｇ	9×6	27.169	43.1	
11	ⅠＢ７ｇ	8×7	26.843	65.7	
12	ⅠＢ６ｇ	13×9	26.628	57.2	
13	ⅠＢ６ｇ	12×10	26.578	52.2	
14	ⅠＢ６ｆ	13×9	26.330	47.0	
15	ⅠＢ６ｇ	5×5	26.572	42.8	
16	ⅠＢ６ｇ	12×10	26.486	51.4	
17	ⅠＢ６ｆ	8×7	26.242	35.8	
18	ⅠＢ５ｇ	16×14	25.795	80.5	
19	ⅠＢ６ｇ	12×8	26.220	38.0	
20	ⅠＢ６ｆ	10×8	26.592	20.8	
21	ⅠＢ６ｆ	10×10	26.687	31.3	
22	ⅠＢ７ｄ	17×9	27.550	15.0	
23	ⅠＢ７ｆ	13×7	27.108	29.2	
24	ⅠＢ７ｆ	12×6	26.812	58.8	
25	ⅡＢ１ａ	16×12	29.902	19.8	
26	ⅡＢ３ｂ	6×6	未測定	－	
27	ⅡＢ３ｃ	10×9	未測定	－	
28	ⅡＢ３ｃ	10×10	未測定	－	
29	ⅡＢ３ｄ	6×6	未測定	－	
30	ⅡＢ３ｄ	6×6	未測定	－	
31	ⅡＢ３ｄ	6×6	未測定	－	
32	ⅡＢ３ｄ	8×6	未測定	－	
33	ⅡＢ２ｄ	6×6	未測定	－	
34	ⅡＢ２ｄ	9×7	未測定	－	
35	ⅡＢ２ｄ	5×5	未測定	－	
36	ⅡＢ３ｄ	7×5	未測定	－	
37	ⅡＢ３ｄ	6×6	未測定	－	
38	ⅡＢ３ｄ	6×6	未測定	－	
39	ⅡＢ３ｄ	7×6	未測定	－	
40	ⅡＢ４ｄ	6×6	未測定	－	

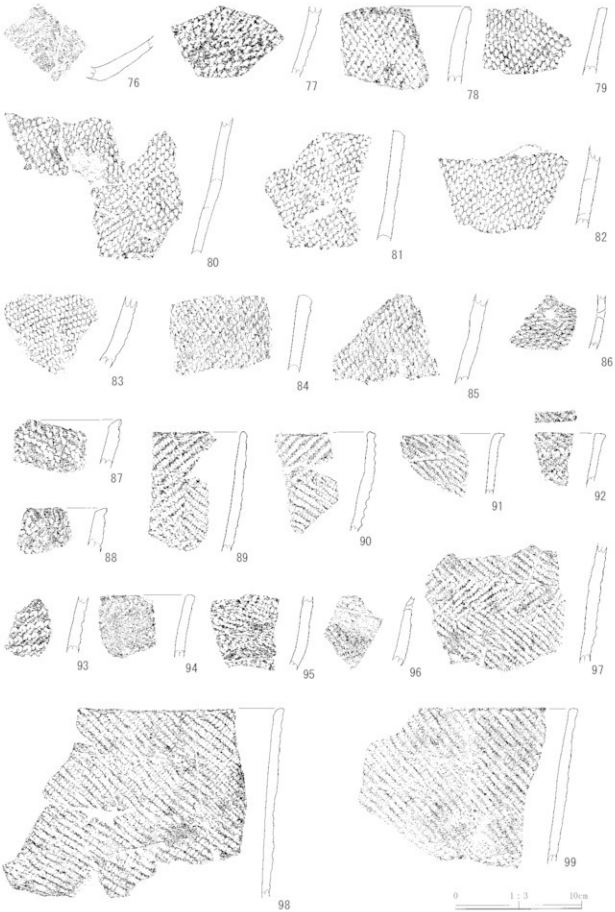
［平面形］円～楕円形　［規模］直径10～30cmの範囲に収まる。深さについては第４表参照。
［出土遺物］縄文土器小片などが出土しているが、厳密に遺構に伴うと考えられるものは少ない。Pit10の埋土から出土したフレイク類１点（75）を図示した。
［性格］ⅡＢ２ｄ～２ｆグリッドに集中するものは２号住居跡の周辺に分布しており、２号住居跡に伴うものである可能性が高い。ⅠＢ５ｆ～８ｆグリッドに集中するものは不明である。
［時期］検出面などから前期初頭から前葉の範囲に収まると考える。

（５）遺構外出土遺物

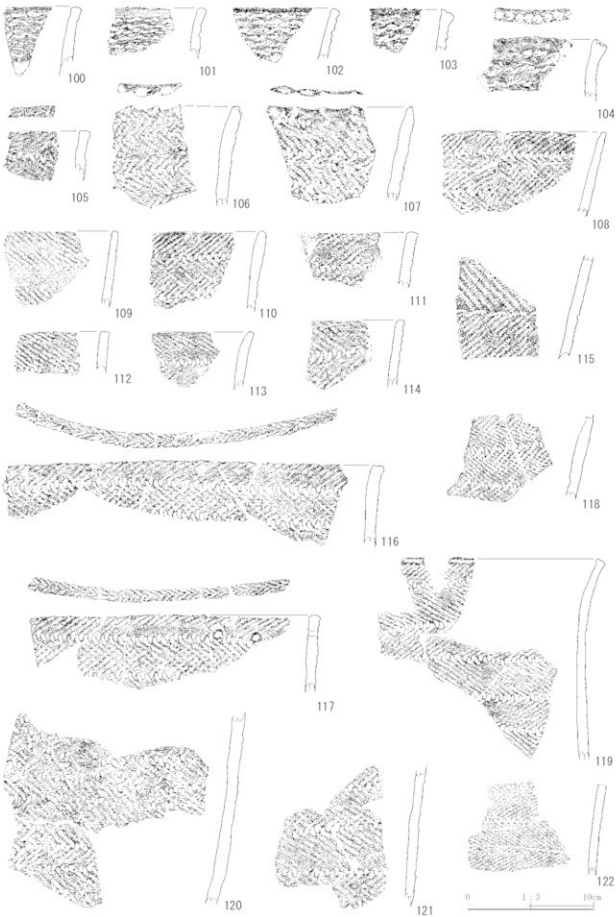
遺構周辺から出土するほか、調査区西端のⅢ・Ⅳ層で遺物が出土している。特にⅠＢ５ｅ～ⅠＢ６ｆグリッド周辺の範囲とⅠＡ５ｅ～６ｆグリッド周辺の範囲で遺物が集中する。両範囲とも、調査区の北側と南側の２条の沢跡の範囲に収まっており、地形は緩やかな平坦面である。従って東側の斜面地（調査区外を含む）から流れてきた遺物群が、平坦な地形のそれぞれの範囲に溜まり、薄い遺物包含層を形成したものと推測する。また両範囲から出土する遺物群には時期の差異があり、ⅠＢ５ｅ～ⅠＢ６ｆグリッド周辺の範囲では主に前期初頭から前期前葉の遺物群が、ⅠＡ５ｅ～６ｆグリッド周辺の範囲では中期初頭以降の遺物群が出土している。

縄文土器は201点図示した。上述の両範囲から出土した縄文土器のほか、検出遺構周辺から出土した遺物も掲載している。

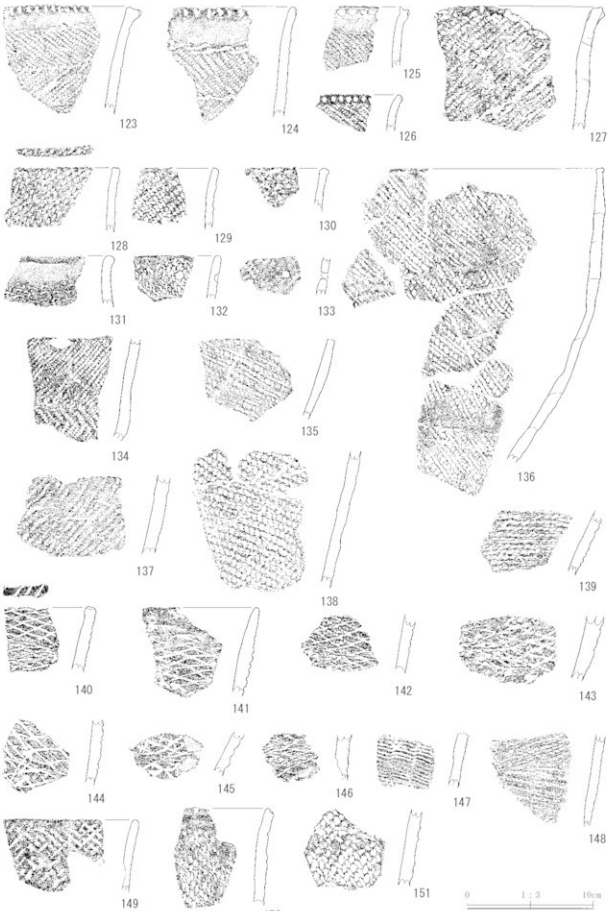
76～167は前期に比定される。76は尖底の底部片で、縄文が施文される。胎土には繊維の多量混入が見受けられる。前期初頭か、それよりも古いと推測する。77～86は組縄縄文（びっちり縄文）が施文される土器で、器厚は厚め、多量の繊維混入が見受けられる。前期初頭から前葉。78は口縁部片で口唇部には刻目が巡る。87・88は口縁部片であるが口唇部直下に爪形文が施文される。前期初頭ころか。93は口縁部に多段の環付末端回転文が施文される。大木１式の特徴である。89～92・94～97は非結束羽状縄文が横位に施文される一群である。胎土に繊維が多量混入しており、大木１～２a式の範疇であろうと推測する。98・99は斜行縄文が施文される。繊維混入の具合などから89～97同様の時期と考える。100～104は大木２a式の特徴である口縁部に横位の結節回転文が施文される土器である。104には口唇部に円形刺突文が巡る。105～114は結束羽状縄文が施文される土器で、106・107



第32図　遺構外出土遺物（1）

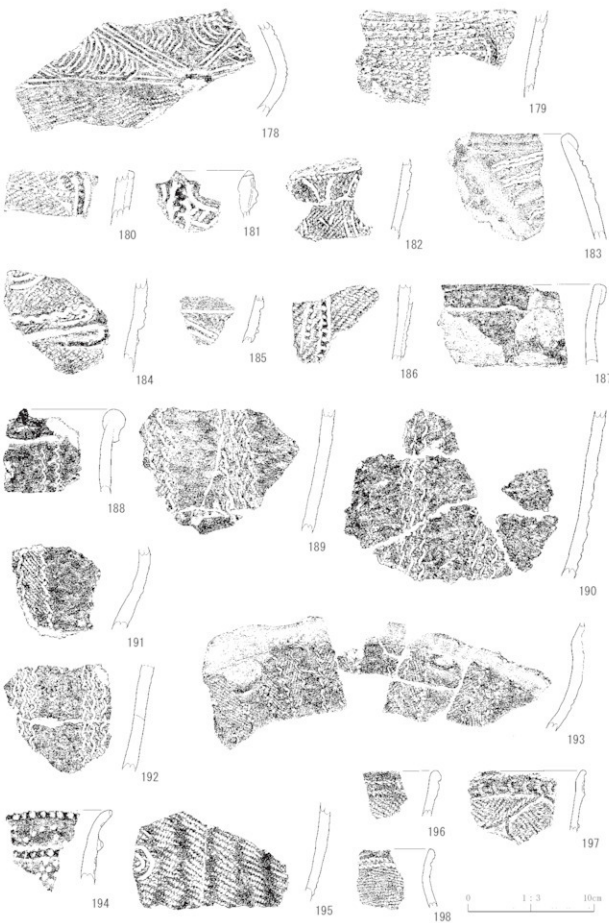


第33図　遺構外出土遺物（2）

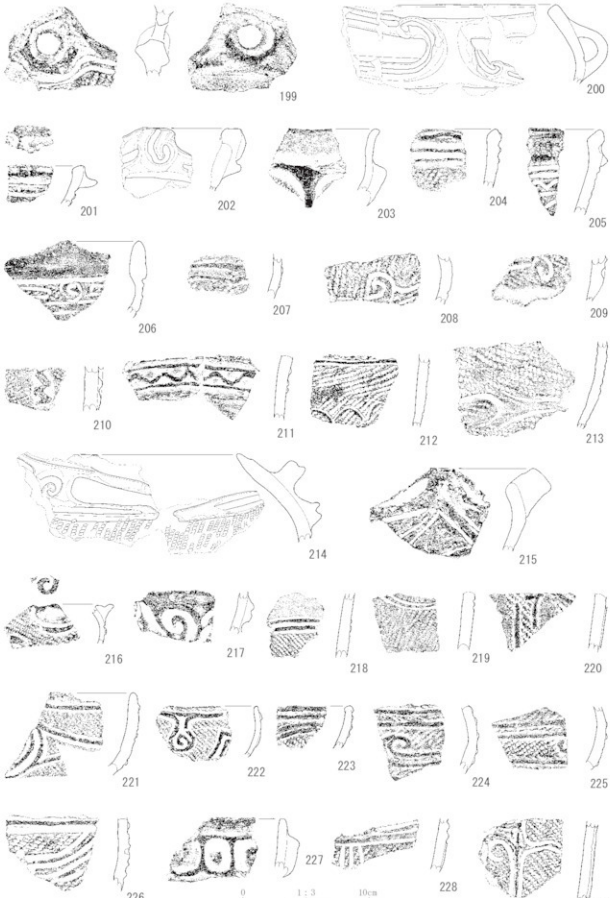


第34図　遺構外出土遺物（3）

第35図　遺構外出土遺物（4）

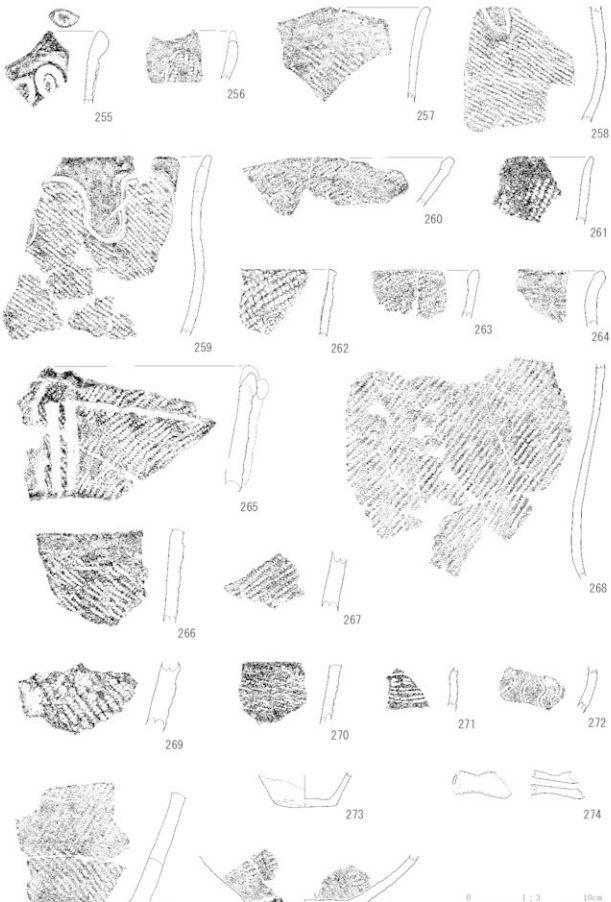


第36図　遺構外出土遺物（5）

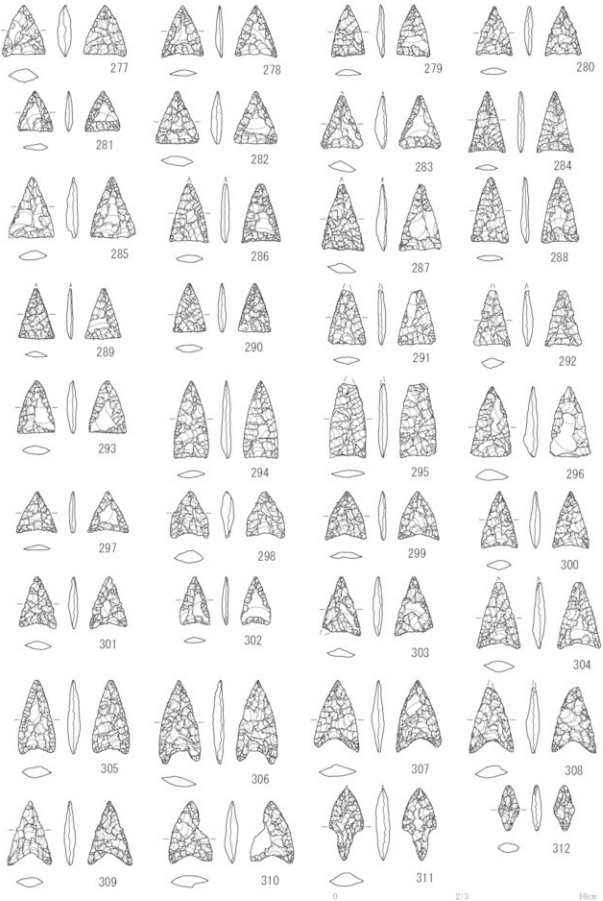


第37図　遺構外出土遺物（6）

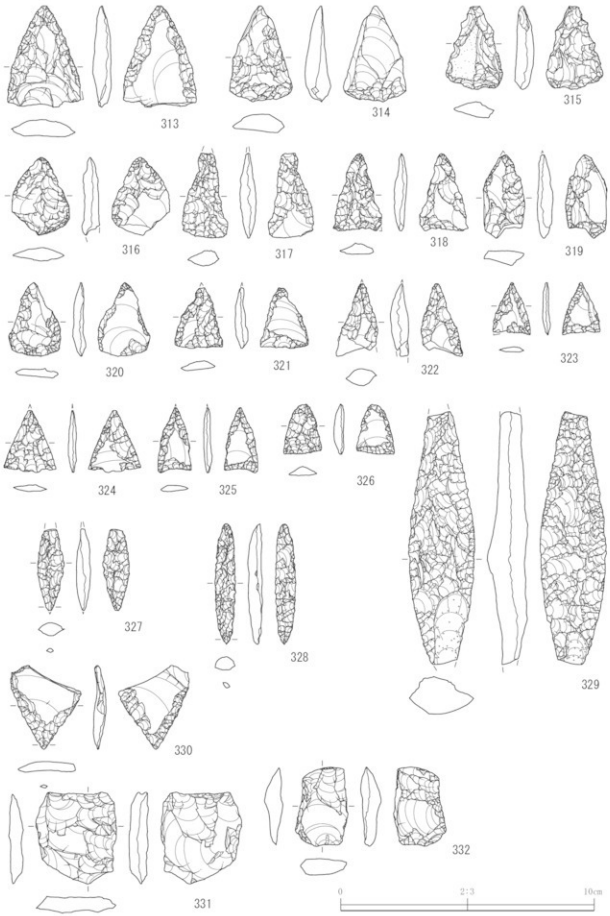
第38図　遺構外出土遺物（7）



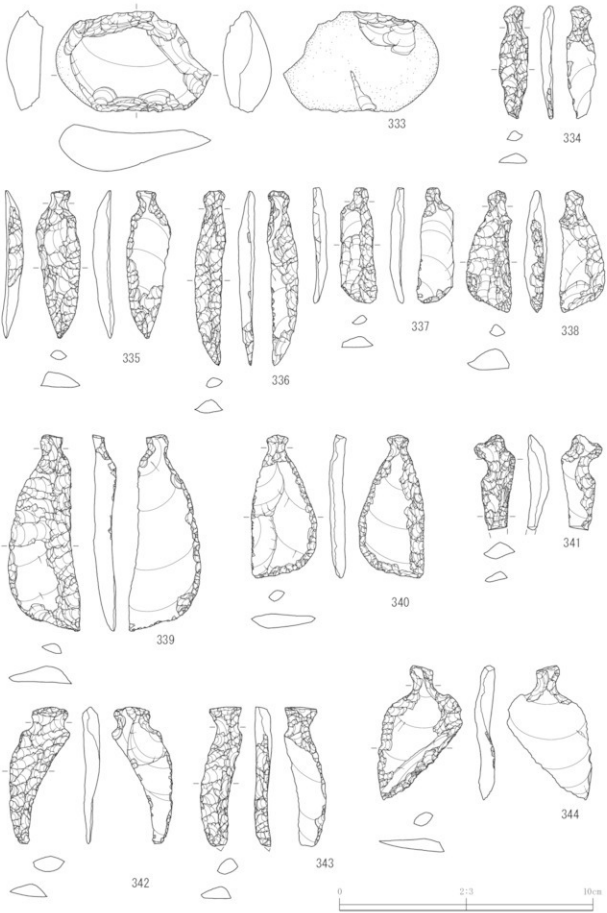
第39図　遺構外出土遺物（8）



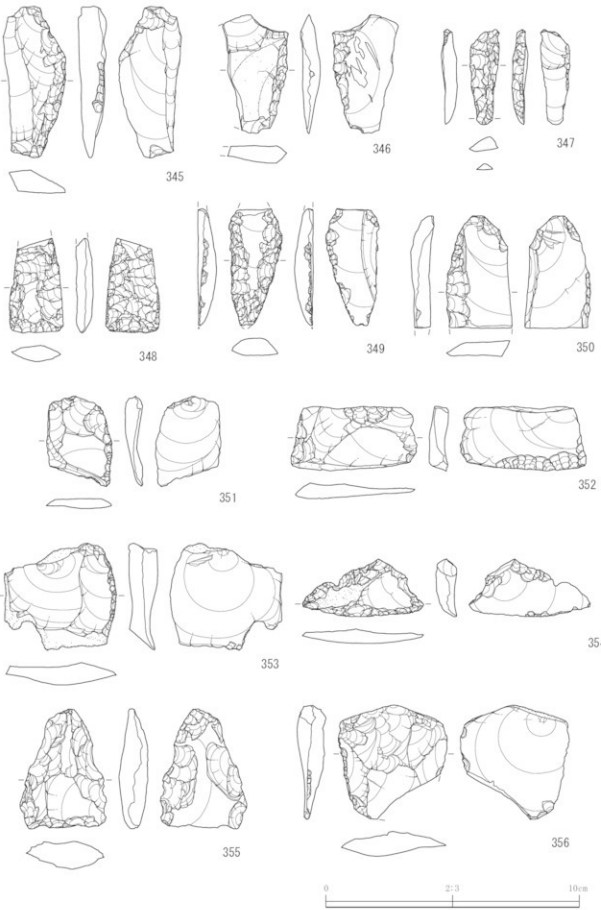
第40図　遺構外出土遺物（9）



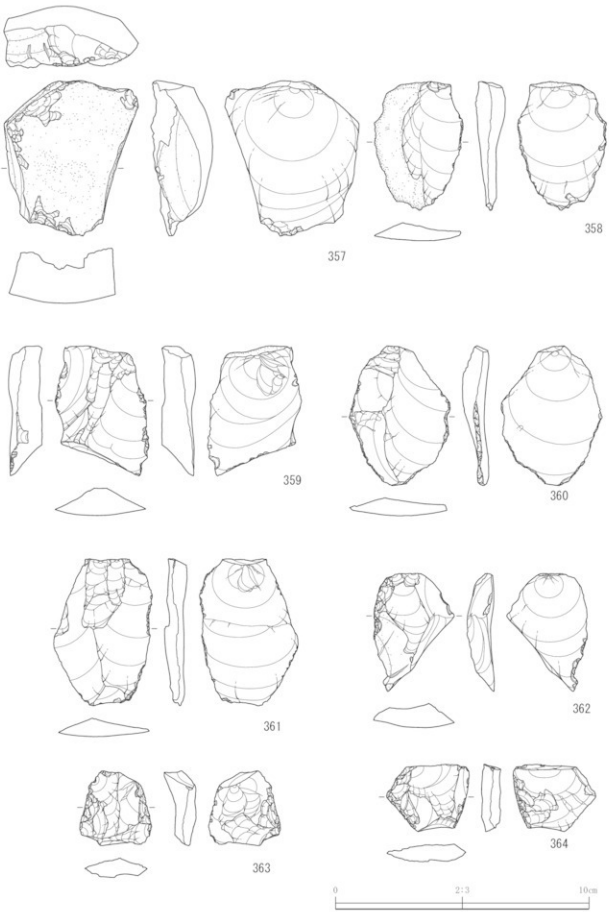
第41図　遺構外出土遺物（10）



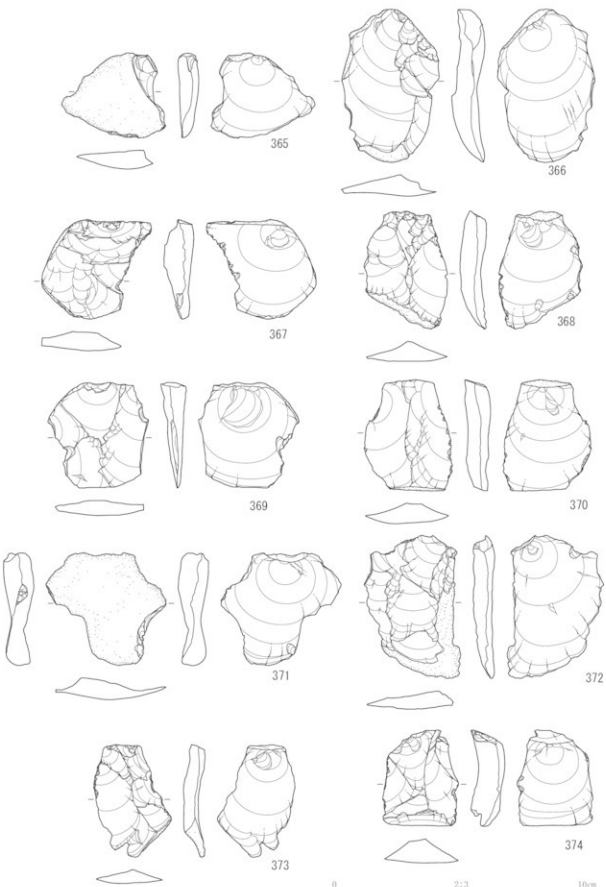
第42図　遺構外出土遺物（11）



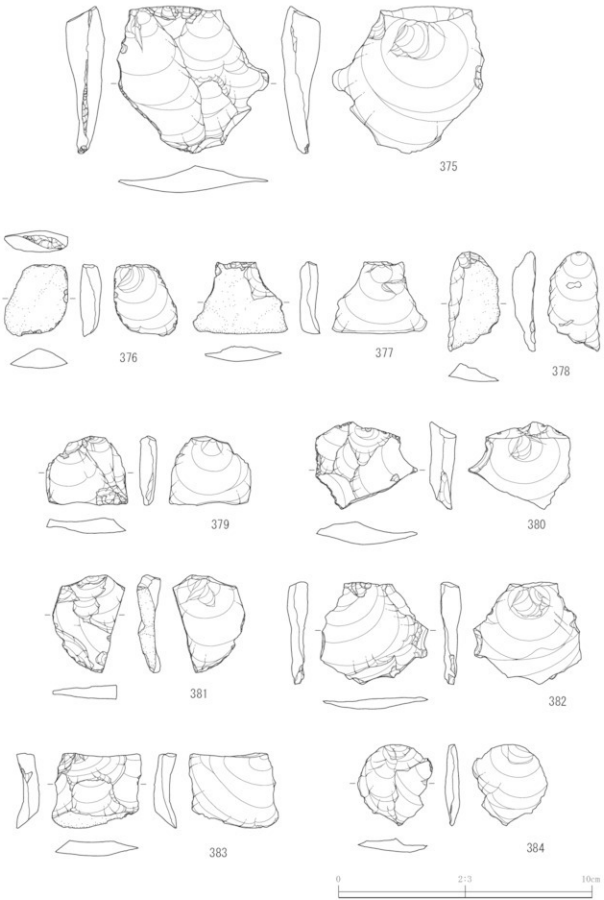
第43図　遺構外出土遺物（12）



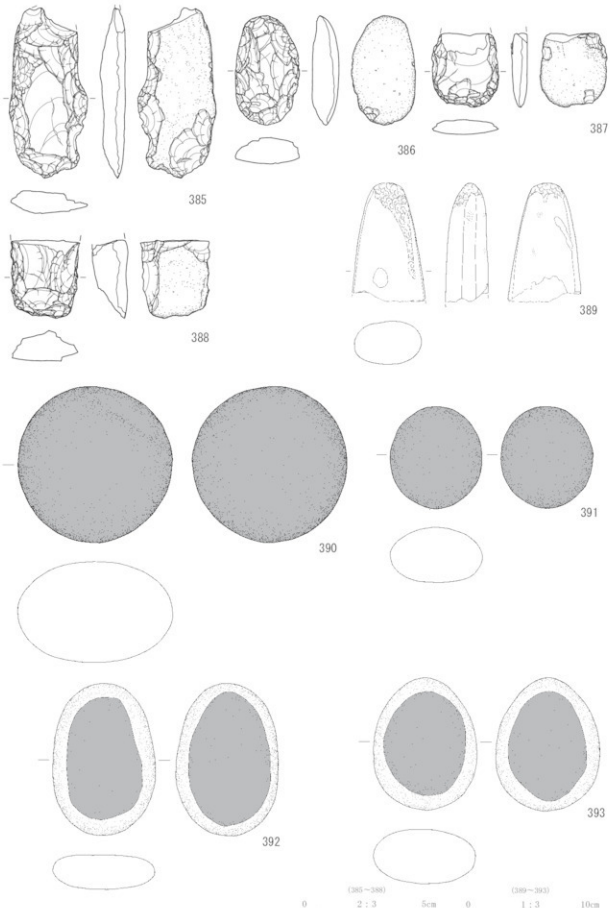
第44図　遺構外出土遺物（13）



第45図　遺構外出土遺物（14）

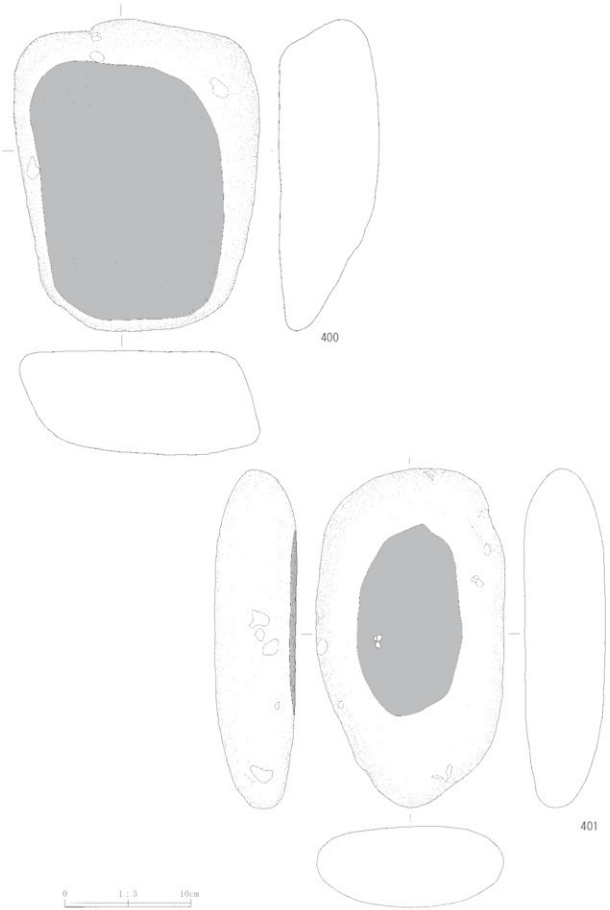


第46図　遺構外出土遺物（15）

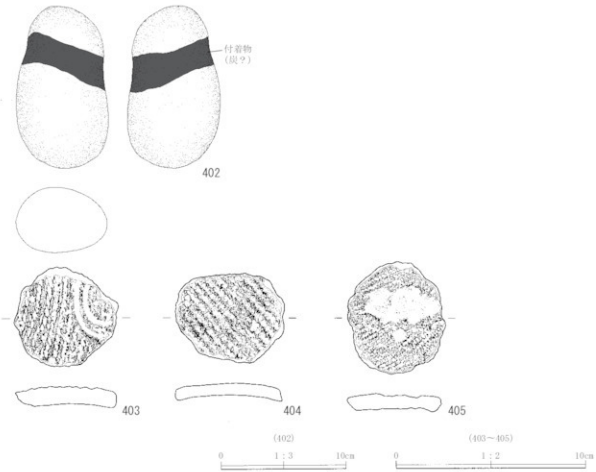


第47図　遺構外出土遺物（16）

第48図　遺構外出土遺物（17）



第49図　遺構外出土遺物（18）



第50図　遺構外出土遺物（19）

には口唇部に押圧文が巡り、波状口縁を呈している。いずれも胎土に混入される繊維は多量である。大木２a式の範疇である。116 ～ 121も横位、多段の結束羽状縄文が施文される土器であるが、105 ～ 114の一群と比べると、土器表面の焼成が良く、硬質であり、また繊維の混入も前者に比べると少ない傾向が見て取れた。前者とは時期差があるかもしれない。ただし積極的に大木２ｂ式の範疇と言える根拠はない。123 ～ 139は大木２a式の範疇ではないかと推測する土器である。123・124は結束羽状縄文が施文される土器であるが、前述の結束羽状縄文が施文される土器群と比べ、縄文原体の施文が明瞭でまた口唇部には刺突文や刻目が巡る。125 ～ 133は斜行縄文が施文される土器で、口唇部に押圧文（125・127）や刻目（126）、また縄文原体押圧文（128）が巡るものが見受けられる。132は複節縄文が施文される。136は付加条縄文が施文される。139は単軸絡条体１類が横位に施文される。比較的新しい時期のものかもしれないが、繊維の混入から大木２a式頃と判断した。140 ～ 146・148は口縁部に単軸絡条体５類が施文され、147は単軸絡条体２類が施文される土器である。149・151は組紐が施文される。152 ～ 155は大木２b式の特徴である口縁部にS字状連鎖沈文が施文される土器である。156 ～ 158は大木２b式の範疇か。いずれも繊維の混入が微量である。157は細い工具による沈線で格子状文を描く。158は結束羽状縄文と非結束羽状縄文を組み合わせて施文される。繊維の混入具合から大木２b式の範疇と判断したが、定かではない。159・160は口唇部に刻目、口縁部に組紐が施文される。焼成も良く、硬質である。白座式の可能性が高い。161・162は焼成具合は159・160に類似するが、文様が異なっており、白座式とは考えられないが、同時期の可能性がある。163は沈線による円

文が描かれており、大木３式と考える。164～167は大木５式の範疇と推測する。165は口縁部に幅広の隆帯で波状文を描いている。

168～276は中期に比定される。168～193は大木７a式の範疇に収まる土器で、この一群は主にⅠＡ５e～６fグリッド周辺の範囲から出土している。168～178は短い沈線を巡らせ文様を描き、また三角形刻文（172・177）や半裁竹管状工具による沈線文（170・175）、押引文（179）が施文される。また胴部片では結節部分が残存する縄文が施文される（188～193）。196～198は大木８a式古段階に比定され、隆帯や縄文の他、縄文原体押圧文が施文される。199～220は大木８a式新段階の範疇と推定する。ただし、小片も多く、大木８b式に下る可能性もある。199は口縁部片で山形突起に円孔が付く。200は口縁部に縦位の大型把手が付き把手には沈線が施される。206～209は沈線による弧状文が描かれ、210や211は波状を呈した隆帯が付く。221～226は大木８b－１式の深鉢口縁部片で隆帯による渦巻文が描かれる。227は隆帯がやや厚く、渦巻文ではなく、区画であることから、大木８a式の可能性もある。228・229は胴部片で縄文施文後、沈線を施す。230～244は大木８b－２～３式と推測され、隆帯による渦巻文が描かれる。232は口縁部片で口唇部直下に刺突文が巡る。245は沈線で楕円状の文様が描かれている。大木９式古段階に近いかもしれない。246は弧状の沈線が見受けられるが、渦巻文であろうと推測する。247～251は隆帯が施文される胴部片であるが、隆帯から大木８ｂ－２～３式と判断した。255～257は大木９式に比定される。小片であるが、沈線による区画文が見受けられる。258・259は大木10式と考えられる。260からは縄文のみが施文される一群で、中期初頭から後葉の範囲に含まれるものと推測する。274はⅡＢ１ｄグリッドⅣ層上面から出土した注口土器の注口部片である。小片であるが、後期以降に比定される可能性がある。

石器は201点図示した。277～326は石鏃である。出土した剥片石器の中では最も多い。その中でもⅠ類（平基無茎鏃）（277～303）が多く、次いでⅡ類（凹基無茎鏃）（304～310）が多い。311・312はⅢ類であるが、有茎鏃はこの２点のみである。313～326は石鏃失敗品で、二次加工が全体に及んでいない。329は尖頭器で両端が欠損する。327・328・330は石錐で棒状と端部にのみ錐部を作出する形態のものがある。331～333は楔形石器である。333は自然面の残るフレイクを素材とするⅠ類で、上下方向のみ打撃の痕跡が見受けられる。形態的には楔形石器とは言い難いが、剥離の状態からこの範疇に含めた。334～344は石匙である。Ⅰ類（縦型）が多く、また刃部の作出も片面加工、両面加工、両方が見受けられる。345～355は不定形石器である。刃部角度が鋭利なⅠ類（345など）、が多く、刃部角度が鈍角なⅡ類は少ない。また刃部二次加工が不揃いなⅢ類（355など）はさらに少ない。

356～384はフレイク類である。356～362はUフレイクであり、縁辺の一部に微細剥離が連続するものが多い。363・364はRフレイクである。どちらも最終剥離面の縁辺片側に連続する二次加工が施されているが、刃部を作出したものには見受けられず、Rフレイクとした。365～384はフレイクである。なお、今回の調査では石核は出土していない。

礫石器では、385～388は礫器である。図示できたものはどれも自然面が残る大型のフレイクを素材としている。不定形石器とするには大きく、また縁辺の二次加工も粗いので礫器とした。389は磨製石斧で刃部が欠損する。390～399は敲磨器類で、主に磨痕のみのⅠ類が多い。長辺方向の一辺のみ特殊磨石のように偏平に変形したもの（395～398）が多いのも特徴である。400・401は石皿で、どちらも大型で偏平な礫を素材とし、偏平な片面のみ使用されている。

その他では402を掲載した。402は楕円形の礫で片側一周に何かの痕跡（炭化物？）が残る。石製品とした。

また土製品としては円盤形土製品が出土しており、３点（403～405）図示した。どれも深鉢の胴

第５表　遺物観察表（縄文時代）

縄文土器

掲載番号	図版番号	写図番号	出土位置層位	器種	残存部位	外面文様	内面調整（文様）	外面色調 内面色調	焼成	胎土混入物	土器型式（時期）	煤ｺｹﾞ	備考
1	9	12	2号住居堆土下位	深鉢	口縁部片	唇：工具による押圧　口～胴：縄文(LR横)	ナデ	にぶい褐 にぶい褐	不良	繊維(微)・長・砂	大木2a	無し	
2	9	12	2号住居Pit11埋土中	深鉢	胴部片	胴：底前段多条(L)？	ナデ	にぶい黄橙 明黄褐	不良	繊維(微)・白	大木2a	無し	
3	9	12	2号住居堆土下位	深鉢	胴部片	胴：非結束羽状縄文(LRL・RLR横)	ナデ	灰黄褐 にぶい黄橙	不良	繊維(多)・長	大木2a	無し	
4	9	12	2号住居堆土上位	深鉢	口縁部片	口：結節回転文(L横)	ナデ	黒褐 黒褐	不良	繊維(多)・長・砂	大木2a	無し	
5	9	12	2号住居堆土下位	深鉢	口縁部片	口：結節回転文(R横)	ナデ	灰黄褐 にぶい黄橙	やや良好	繊維(微)・長・白	大木2a	無し	
6	9	12	2号住居堆土下位	深鉢	口縁部片	口：縄文(RL縦)　胴：縄文(LRL横)	ナデ	にぶい黄橙 明黄褐	やや不良	繊維(微)・長・砂	大木2a？	無し	
7	9	12	2号住居堆土上位	深鉢	口縁部片	口：縄文(RL縦)	ナデ	にぶい黄橙 明黄褐	やや不良	雲・砂	大木2a？	無し	
8	9	12	2号住居堆土下位	深鉢	胴部片	胴：結束羽状縄文(LR・RL)	ナデ	にぶい黄橙 明黄褐	不良	繊維(多)・長	大木2a	無し	
9	9	12	2号住居堆土下位	深鉢	胴部片	胴：縄文(LRL縦)	ナデ	黒褐 にぶい黄橙	やや良好	繊維(多)・長・砂	大木2a	無し	
10	9	12	2号住居堆土下位	深鉢	胴部片	胴：縄文(RL縦)	ナデ	にぶい黄橙 にぶい褐	やや不良	砂	中期	無し	
11	9	12	2号住居堆土下位	深鉢	胴部片	胴：多段結節回転縄文(RL横)	ナデ	明赤褐 黒褐	不良	砂・長・白	大木2b	無し	
12	9	12	2号住居検出面	深鉢	胴部～底部破片	胴下：縄文(RR縦)→沈線・隆帯	ナデ	にぶい黄橙 灰黄褐	不良	砂	大木8a～8b	無し	
28	14	12	3号住居2層	深鉢	口～胴部片	多段結節回転縄文(R？)	ケズリ→ナデ	にぶい黄褐 にぶい黄橙	不良	繊維(微)・雲・砂	大木2a～2b	無し	
29	14	12	3号住居埋土中	深鉢	胴部片	胴：多段S字状連鎖沈文	ナデ？	橙 にぶい橙	不良	砂	大木2b	無し	
30	14	12	3号住居埋土中	深鉢	胴部片	胴：非結束羽状縄文(LR・RL横)	指頭整形→ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや不良	繊維(多)・砂・白	大木2a	無し	
31	14	12	3号住居1層	深鉢	胴部片	胴：非結束羽状縄文(LR・RL横)	ナデ	明赤褐 にぶい黄橙	やや良好	繊維(微)・砂・長	大木2a	無し	
32	14	12	3号住居埋土中	深鉢	口縁部片	口～胴：縄文(0段多条LR・横　結節部分残る)	ナデ	橙 黒褐	不良	繊維(微)・砂	大木2a	無し	
33	14	12	3号住居埋土中	深鉢	口縁部片	口：結節回転縄文(L・横)	ナデ	にぶい褐 にぶい黄橙	不良	繊維(微)・砂	大木2a？	無し	
34	14	12	3号住居埋土中	深鉢	口縁部片	口：3段の縄文原体押圧(LR横)　胴：縄文(LR横)	ナデ	橙 明褐	良好	砂・雲	大木8a(古)	無し	
35	14	12	3号住居埋土中	深鉢	口縁部片	唇：大型突起(隆帯による渦巻文)　口：沈線文	ナデ→ミガキ	橙 にぶい黄橙	やや不良	砂・白	大木8a(新)	無し	
44	18	13	4号住居床面上	深鉢	口～胴1/2	口～胴：縄文(LR縦)	ケズリ→ナデ	にぶい黄橙 明黄褐	良好	砂	中期後葉	外面口縁部に煤	
45	18	12	4号住居床面上	深鉢	口縁部片	口：折り返し口縁(無文)　胴：縄文(縦)	ナデ	にぶい黄橙 橙	良好	砂・長	中期後葉	無し	
46	18	12	4号住居1層	深鉢	胴部片	胴：沈線・縄文(LR横)	ナデ	黒褐 黒褐	不良	砂・長	大木9（？）	無し	
47	18	13	4号住居堆積土器	深鉢	胴下～底	胴：縄文(LR縦)	ナデ	明赤褐 にぶい橙	やや不良	砂・長	中期後葉	内面胴下に煤	
52	22	13	5号住居堆積上層1	深鉢	胴下～底	胴：縄文(LR斜)→沈線による区画文	ナデ	橙 明赤褐	不良	砂	大木9	内面胴下にコゲ	
53	22	13	5号住居堆積上層2	深鉢	胴下～底	胴：縄文(RL斜・縦)・沈線(区画文？)　底：敷物圧痕	ナデ	橙 明褐	やや不良	砂	大木9	内面胴下にコゲ	
54	22	13	5号住居Pit7埋土中	浅鉢	口～胴部片	口：突起(上面縦の渦巻文)・縄文原体押圧による区画文　胴：縄文(LR)→沈線文	ナデ	にぶい黄橙 灰黄褐	やや不良	砂・白	大木8a(古)	無し	
55	22	13	5号住居埋土中	不明	口縁部(突起)	隆帯による突起(上面縦の渦巻文)	不明	明褐	やや不良	砂	大木8a(新)	無し	
56	22	13	5号住居埋土中	浅鉢	口縁部片	口：波状隆帯・縦位の縄文原体押圧(RL)→隆帯　胴：縄文(LR横)→沈線による渦巻文	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや不良	砂・白	大木8a(新)	外面口縁部に煤	
57	22	13	5号住居埋土中	深鉢	口縁部片	唇：菱形の突起(内外面に円形の凹文)　口：縄文原体の押圧文(LR)	ナデ	黒褐 黒褐	不良	雲・白	大木7b～8a	無し	
58	22	13	5号住居埋土中	深鉢	口縁部片	口：沈線仲)隆帯による区画文・渦巻文　口～胴：縄文(LR斜)→沈線	ナデ	浅黄橙 にぶい黄橙	やや不良	長・白	大木8a(新)	無し	
59	22	13	5号住居埋土中	深鉢	胴部片	胴：隆帯、縄文(不明)	ナデ	にぶい黄橙 明黄褐	不良	白	大木8a(新)	無し	
60	22	13	5号住居埋土中	深鉢	口縁部片(口唇部欠損)	口：隆帯→縄文原体押圧　胴：縄文(LR縦)	ナデ	にぶい黄橙 灰黄褐	不良	雲・砂	前期末葉～中期初頭	内面にコゲ	
61	22	13	5号住居埋土中	深鉢	胴部片	胴：縄文(LR縦)	ナデ	にぶい褐 灰褐	不良	雲・砂	中期後葉	外面にコゲ	

掲載番号	図版番号	写図番号	出土位置層位	器種	残存部位	外面文様	内面調整（文様）	外面色調 内面色調	焼成	胎土混入物	土器型式（時期）	煤ヨゴ	備考
69	25	14	6号住居1層	深鉢	胴部片	胴：縄文（LR縦位）→沈線による区画文	ナデ	にぶい黄橙 橙	不良	砂	大木9	無し	
70	25	14	6号住居1層	深鉢	口縁部片	口：沈線文	ナデ	橙 橙	不良	白	中期後葉	無し	
71	29	14	2号土坑埋土中	深鉢	口縁部片	口：隆帯による区画、縄文（RL横）→沈線（渦巻文？）	ナデ	橙 にぶい黄橙	やや不良	白	大木8b-1	無し	
72	29	14	2号土坑埋土中	深鉢	口縁部片（口唇部欠損）	口：沈線伴う隆帯（渦巻文？）、縄文（RL縦）　類：沈線	ナデ	橙 灰黄褐	やや不良	雲・白	大木8a（新）	無し	
76	32	14	Ⅰ B6g Ⅳ層	尖底	底部片	胴：縄文（RL？）	ナデ	橙 灰褐	やや不良	繊維（多）・砂	前期初頭	無し	
77	32	14	Ⅰ B5h 黒層	深鉢	胴部片	胴：びっちり縄文（LR横）	指頭整形→ナデ	橙 黒褐	不良	繊維（微）・長	前期初頭～前葉	無し	
78	32	14	Ⅰ B6g 黒層	深鉢	口縁部片	唇：刻目文　口：びっちり縄文	指頭整形→ナデ	にぶい黄橙 黄橙	不良	繊維（多）・長・白	前期初頭～前葉	無し	
79	32	14	Ⅰ B6f Ⅳ層	深鉢	胴部	胴：びっちり縄文	ナデ	橙 橙	不良	繊維（多）・白	前期初頭～前葉	無し	
80	32	14	Ⅰ B5f Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴：びっちり縄文	ナデ	橙 橙	やや不良	繊維（多）・長・白	前期初頭～前葉	無し	
81	32	14	Ⅰ B10f Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴：びっちり縄文	ナデ	橙 灰黄褐	不良	繊維（微）・白	前期初頭～前葉	無し	
82	32	14	Ⅰ B5f 黒層	深鉢	胴部片	胴：びっちり縄文	ナデ	にぶい黄褐 橙	やや不良	繊維（多）・長・白	前期初頭～前葉	無し	
83	32	14	Ⅰ B10e Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴：底前段多条（L）	ナデ	橙 灰褐	やや不良	繊維（微）・白	前期初頭～前葉	無し	
84	32	14	Ⅰ B6f Ⅳ層	深鉢	胴部	胴：びっちり縄文	ナデ	明黄褐 にぶい黄橙	不良	繊維（微）・長	前期初頭～前葉	無し	
85	32	14	Ⅰ B5g 黒層	深鉢	胴部片	胴：びっちり縄文？	指頭整形→ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	繊維（微）・雲・白	前期初頭～前葉	無し	
86	32	14	Ⅰ B6d Ⅳ層	深鉢	胴部	胴：びっちり縄文？	ナデ	黒褐 黒褐	やや不良	繊維（微）・長・白	前期初頭～前葉	無し	
87	32	14	Ⅰ B10f Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口：縄文（RL縦）→爪形文	ナデ	明黄褐 橙	やや不良	長・白	前期初頭～前葉	無し	
88	32	14	Ⅱ B1f Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口：縄文（RL横）→爪形文	ナデ	黒褐 にぶい黄橙	やや不良	繊維（多）・長	前期初頭～前葉	無し	
89	32	14	Ⅰ B5g Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口～胴：非結束羽状縄文（0段多条LR・RL横・縦）	ケズリ（ナデ？）	にぶい黄橙 黒褐	不良	繊維（微）・砂	前期初頭～前葉	無し	
90	32	14	Ⅰ B6f Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口～胴：非結束羽状縄文（LR・RL）	ケズリ（ナデ？）	にぶい黄橙 黒褐	不良	繊維（微）・白	前期初頭～前葉	無し	
91	32	14	Ⅰ B5e 黒層	深鉢	口縁部片	口～胴：非結束羽状縄文（0段多条RL・RL横）	ケズリ→ナデ	橙 にぶい黄橙	良好	繊維（多）・長・白	前期初頭～前葉	無し	
92	32	14	Ⅰ B5f Ⅳ層	深鉢	口縁部片	唇：縄文原体押圧（LR）　口～胴：非結束羽状縄文（LR・RL横）	ナデ	にぶい橙 にぶい橙	不良	繊維（多）・白	前期初頭～前葉	無し	
93	32	14	Ⅰ B6g Ⅳ層	深鉢	胴部	胴：櫛付末端回転文	指頭整形→ナデ	黄橙 にぶい黄褐	やや不良	繊維（微）・白	大木1	無し	
94	32	14	Ⅰ B10f Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口：非結束羽状縄文（LR・RL横）	ナデ	橙 にぶい黄橙	不良	繊維（微）・白	大木2a	無し	
95	32	14	Ⅰ B5g Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴：非結束羽状縄文（LR・RL）	ナデ	橙 にぶい褐	やや不良	繊維（多）・長・白	大木1	無し	
96	32	14	Ⅰ B7g Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴：非結束羽状縄文？（RL・不明）	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	繊維（多）・白	大木1？	無し	
97	32	14	Ⅰ B10g Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴：非結束羽状縄文（LR・RL横）RL横）	ナデ	にぶい黄橙 明黄褐	不良	繊維（多）・雲・白	大木1	無し	
98	32	14	Ⅰ B6g Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口～胴：非結束羽状縄文（RL・RL）	ケズリ→ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	繊維（多）・雲・砂	大木1	無し	99と同一個体
99	32	14	Ⅰ B6g Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口～胴：縄文（RL横）	ケズリ→ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	繊維（多）・雲・砂	大木1	無し	98と同一個体
100	34	15	Ⅰ B6g 黒層	深鉢	口縁部片	口：結節回転文（R横）	ナデ	灰褐 にぶい橙	やや不良	繊維（微）・長・白	大木2a	無し	
101	34	15	Ⅰ B5f 黒層	深鉢	口縁部片	口：結節回転文（LR横）	ナデ	灰黄褐 橙	不良	繊維（多）・長・白	大木2a	無し	
102	33	15	Ⅰ B5g Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口：結節回転文（LR横）	ナデ	にぶい黄褐 にぶい橙	不良	繊維（微）・雲・白	大木2a	無し	

掲載番号	図版番号	写図番号	出土位置層位	器種	残存部位	外面文様	内面調整（文様）	外面色調 内面色調	焼成	胎土面 入角	上器型式（時期）	煤ユゲ	備考
103	33	15	Ⅰ B5g Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口：結節回転文(RL横)	ケズリ→ナデ	褐灰 にぶい橙	やや良好	繊維(微)・雲・白	大木2a	無し	
104	33	15	Ⅰ A6g Ⅲ層	深鉢	口縁部片	頸：円形刺突文　口：結節回転文(R)	ナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	やや不良	繊維(微)・砂・白	大木2a	無し	
105	33	15	Ⅱ B1c Ⅳ層	深鉢	口縁部片	頸：縄文(RL)　口：結束羽状縄文(LR・RL)	ナデ	橙 にぶい黄橙	不良	繊維(多)・白	大木2a	無し	
106	33	15	Ⅰ B7g Ⅳ層	深鉢	口縁部片	頸：棒状工具の刺突　口～胴：結束羽状縄文(LR・RL横)	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	繊維(多)・長・白	大木2a	無し	
107	33	15	Ⅰ B7g Ⅳ層	深鉢	口縁部片	頸：幅広の押圧　口～胴：結束羽状縄文(RL・RL)	ケズリ→ナデ	橙 灰黄褐	不良	繊維(多)・雲・白	大木2a	無し	
108	33	15	Ⅰ B7g Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口～胴：結束羽状縄文(LR・RL)	ナデ	にぶい黄橙 黒褐	不良	繊維(多)・雲	大木2a	無し	
109	33	15	Ⅰ B6g Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口：結束羽状縄文(0段多条LR・RL横)	ナデ	にぶい黄褐 にぶい橙	不良	繊維(多)・長・白	大木2a	無し	
110	33	15	Ⅰ B6h Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口～胴：結束羽状縄文(LR・RL横)	ナデ	にぶい黄橙 明黄褐	不良	繊維(多)・雲・白	大木2a	無し	
111	33	15	Ⅰ B9f Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口～胴：結束羽状縄文(LR・RL横)	ケズリ→ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	繊維(多)・雲・白	大木2a	無し	
112	33	15	Ⅰ B5g Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口：結束羽状縄文(RL横)	ナデ	にぶい黄橙 黄橙	やや不良	繊維(多)・長・白	大木2a	無し	
113	33	15	Ⅰ B9f Ⅲ層～Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口：結束羽状縄文(LR・RL横)	ナデ	灰黄褐 灰黄褐	不良	繊維(微)・雲・白	大木2a	無し	
114	33	15	Ⅰ B10g Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口：結束羽状縄文(LR・RL横)	ナデ	橙 橙	良好	繊維(多)・砂	大木2a	無し	
115	33	15	Ⅰ B5g Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴：非結束羽状縄文(LR・RL)	ナデ	明黄褐 明黄褐	不良	白	大木2a?	無し	
116	33	15	Ⅰ B5g Ⅲ層	深鉢	口縁部片	頸：羽状縄文(0段多条LR)　口～胴：結束羽状縄文(0段多条LR・RL横)	ケズリ→ナデ	橙 橙	不良	繊維(多)・長・白	大木2a	無し	
117	33	15	Ⅰ B6e Ⅲ層	深鉢	口縁部片	頸：羽状縄文(0段多条LR　口～胴：結束羽状縄文(0段多条LR・RL横)	ケズリ→ナデ	橙 橙	不良	繊維(多)・白	大木2a	無し	補修孔2箇所
118	33	15	Ⅰ B5g Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴：結束羽状縄文(0段多条LR・RL)	ナデ	橙 にぶい黄橙	やや不良	繊維(微)・雲	大木2a	無し	
119	33	15	Ⅰ B7g Ⅳ層	深鉢	口～胴部片	口～胴：結束羽状縄文(0段多条LR・RL横)	ケズリ→ナデ	褐灰 にぶい黄橙	やや不良	繊維(多)・長・白	大木2a	無し	
120	33	15	Ⅰ B6g Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴：結束羽状縄文(LR・RL横)	ケズリ→ナデ	にぶい褐 にぶい黄橙	不良	繊維(多)・雲・砂	大木2a	無し	
121	33	15	Ⅰ B6g Ⅳ層	深鉢	胴部	胴：結束羽状縄文(0段LR・RL横)	ナデ	にぶい黄橙 明黄褐	不良	繊維(多)・雲・砂	大木2a	無し	
122	33	15	Ⅰ B6g Ⅳ層	深鉢	胴部	胴：結束羽状縄文(0段LR・RL横)	ナデ	明黄褐 黒褐	不良	繊維(多)・白	大木2a	無し	
123	34	15	Ⅰ B6f Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口：半裁竹管状工具による刺突　口～胴：結束羽状縄文(0LR・LR.)	指頭整形→ナデ	橙 橙	良好	繊維(微)・白	大木2a	無し	
124	34	15	Ⅰ B6g Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口：磨位の刻目文　胴：結束羽状縄文(0段多条LR・RL)	ナデ	にぶい褐 橙	やや不良	繊維(微)・雲・白	大木2a	無し	
125	34	15	Ⅰ B6g Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口：押圧　口～胴：縄文(RL横)	ナデ	にぶい黄橙 灰黄褐	不良	繊維(微)・雲・白	大木2a？	無し	
126	34	15	Ⅰ B5g Ⅳ層	深鉢	口縁部片	頸：刻目文　口～胴：縄文(RL横)	ナデ	にぶい褐 明黄褐	やや不良	繊維(微)・雲・白	大木2a	無し	
127	34	15	Ⅰ B5f Ⅲ層	深鉢	口縁部片	頸：押圧　口～胴：縄文(LR横)	ケズリ→ナデ	にぶい黄橙 明黄褐	不良	繊維(多)・長・白	大木2a？	無し	
128	34	16	Ⅰ B5f Ⅲ層	深鉢	口縁部片	頸：縄文原体押圧　口：縄文(LR横)	ケズリ→ナデ	黒褐 にぶい黄橙	不良	繊維(微)・雲・白	大木2a？	無し	
129	34	16	Ⅰ B6g Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口～胴：縄文(LR.横)	ナデ	橙 黒褐	不良	繊維(多)・長・砂	大木2a	内面胴部にヨゲ	
130	34	16	Ⅰ B5g Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口：結節回転文？	ナデ？	明黄褐 明黄褐	やや不良	繊維(微)・砂	大木2a	無し	
131	34	16	Ⅰ B9f Ⅲ層～Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口：結節回転文(r横)	ナデ	にぶい褐 にぶい褐	やや不良	繊維(微)・雲・白	大木2a	無し	
132	34	16	Ⅰ B5f Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口：縄文(RL横)	ナデ	明黄褐 黒褐	不良	繊維(微)・雲・白	大木2a～2b	内面	補修孔（途中）

掲載番号	図版番号	写図番号	出土位置層位	器種	残存部位	外面文様	内面調整（文様）	外面色調内面色調	焼成	胎土混入物	土器型式（時期）	煤コゲ	備考
133	34	16	I B7g Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(RL横)？	ナデ	明赤褐 灰黄褐	不良	繊維(微)・砂・白	大木1～2a	無し	補修孔1箇所
134	34	16	I B5g Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR横)	ナデ	にぶい橙 にぶい褐	やや不良	繊維(微)・白	大木2a	無し	
135	34	16	I B6f Ⅲ層	深鉢	胴部片	口～胴:付加条縄文(RL斜)	ナデ	にぶい黄橙 明黄橙	良好	繊維(微)・長・白	大木2a？	無し	136と同一個体か
136	34	16	I B6f Ⅲ層	深鉢	口～胴部片	口～胴:付加条縄文(RL斜)	指頭整形→ナデ	にぶい黄橙 明黄褐	良好	繊維(微)・長・白	大木2a？	無し	135と同一個体か
137	34	16	I B7g Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(RL縦)	ナデ	にぶい黄褐 橙	不良	繊維(多)・雲・白	大木1～2a	無し	
138	34	16	I B6f Ⅳ層	深鉢	胴部	胴:縄文(RLR)	ナデ	にぶい黄橙 橙	不良	繊維(微)・長・砂	大木1～2a	無し	
139	34	16	I B6f Ⅳ層	深鉢	胴部	胴:単軸絡条体1類(R)	ナデ	明黄褐 黒褐	不良	繊維(微)・白	大木2a～2b	内面胴部にコゲ	
140	34	16	I B5g Ⅳ層	深鉢	口縁部片	唇:刻目文　口:単軸絡条体5類(L) 胴:単軸絡条体1A類(L)	ナデ	にぶい黄褐 明赤褐	不良	繊維(微)・雲・白	大木2a	無し	
141	34	16	II A6i Ⅲ層～Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口:単軸絡条体5類(R)	ナデ	橙 黒褐	不良	繊維(微)・長・白	大木2a？	無し	
142	34	16	I B5e Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(L)・単軸絡条体1A類(L)	ナデ	にぶい褐 にぶい褐	不良	繊維(微)・雲・白	大木2a	無し	
143	34	16	II A6i Ⅲ層～Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(R)	ナデ	橙 黒褐	やや良好	繊維(微)・砂・長	大木2a？	無し	
144	34	16	T2南 黒色土層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(r)	ナデ	にぶい橙 にぶい橙	やや不良	繊維(微)・雲・白	大木2a	無し	
145	34	16	I B7g Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(R)	ナデ	橙 黒褐	不良	繊維(多)・砂	大木2a	無し	
146	34	16	I B5f Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(L)・単軸絡条体1A類(L)	ナデ	灰褐 橙	不良	繊維(多)・雲	大木2a	無し	
147	34	16	I B10g Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体第2類(L)	ナデ	橙 褐灰	やや良好	繊維(微)・砂	大木2a	無し	
148	34	16	I B7f Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(L)	ナデ	灰黄褐 にぶい黄橙	不良	繊維(微)・砂・白	大木2a	無し	
149	34	16	I B7g Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口～胴:組紐？	ナデ	橙 明黄褐	不良	繊維(多)・白	大木2a	無し	
150	34	16	I B7f Ⅲ層	深鉢	口縁部片	唇:刺突　口～胴:縄文(RLR横)	指頭整形→ナデ	にぶい黄褐 明黄褐	不良	繊維(微)・雲・白	大木2a	無し	
151	34	16	I B5g Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:組紐	ナデ？	浅黄橙 にぶい黄褐	やや不良	繊維(微)・砂	大木2a	無し	
152	35	16	I B5e Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:S字状連鎖沈文	ナデ	灰黄褐 にぶい黄橙	やや不良	白	大木2b	無し	
153	35	16	I B5f Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:S字状連鎖沈文	ナデ	にぶい黄橙 にぶい橙	やや不良	長・白	大木2b	無し	
154	35	16	I B5g Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴:S字状連鎖沈文(横)	ナデ	橙 灰黄褐	やや良好	長・白	大木2b	無し	
155	35	16	I A6g Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:S字状連鎖沈文(横)	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや不良	長・白	大木2b	無し	
156	35	16	I B6h Ⅳ層	深鉢	口縁部片	唇・押圧　口:結節回転文(LR)　胴:縄文(LR横)	ナデ	にぶい黄褐 橙	不良	雲・白	大木2b？	無し	
157	35	16	I B9f Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴:沈線による格子状文？	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄褐	不良	長・白	前期？	内面煤	
158	35	16	II B1f Ⅳ層	深鉢	胴1/3	胴上:結束羽状縄文(LR・RL)胴下:非結束羽状縄文(LR・RL)	ナデ	にぶい橙 にぶい黄橙	やや不良	繊維(微)・白	大木2b？	無し	
159	35	16	I B7g Ⅳ層	深鉢	口縁部片	唇:棒状工具による刻目　口:無文　胴:組紐	ナデ	にぶい黄褐 にぶい黄橙	やや不良	繊維(微量)・雲・白	白座？	無し	
160	35	16	I B5g Ⅳ層	深鉢	口縁部片	唇:棒状工具による刻目　口:無文　胴:組紐	ナデ	にぶい黄褐 にぶい黄橙	不良	砂	白座？	無し	
161	35	16	沢跡(南西端) Ⅲ層	深鉢	口縁部片	唇:棒状工具による刺突　口～胴:縄文(0段多条LR横)	ナデ	にぶい橙 明黄褐	不良	繊維(微)・白	白座？	無し	
162	35	16	I B7g Ⅳ層	深鉢	口縁部片	唇:棒状工具の押圧　口～胴:縄文(LRL)	ナデ	にぶい褐 橙	やや不良	繊維(微)・砂・白	白座	無し	
163	35	17	I A6g Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(l横　結節部残存)→沈線による円文	ナデ	橙 灰黄褐	やや不良	長・砂	大木3	無し	
164	35	17	I A5e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(L)	ナデ	にぶい褐 明褐	やや不良	雲・白	大木5	無し	

掲載番号	図版番号	写図番号	出土位置層位	器種	残存部位	外面文様	内面調整（文様）	外面色調内面色調	焼成	胎土混入物	土器型式（時期）	煤コゲ	備考
165	35	17	Ⅰ A9e Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR横)→貼付隆帯による波状文	ナデ	浅黄橙 橙	良好	長・白	大木5a	無し	
166	35	17	Ⅰ A4e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(l)	指頭整形→ナデ	灰褐 橙	やや不良	雲・砂	大木5a	無し	
167	35	17	Ⅰ B6g Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体5類(R)	指頭整形→ナデ	明黄褐 橙	良好	雲・砂	大木5	無し	
168	35	17	Ⅰ A4e Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:折り返し口縁(無文)　胴:沈線による区画、沈線による矢羽根状文	ナデ	灰褐 黒褐	不良	雲・砂	大木7a(古)	無し	
169	35	17	Ⅰ B6d Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:刻み付き隆帯＋円文、沈線、刻目文	口:隆帯による渦巻文 ナデ	黒褐 黒褐	不良	砂	大木7a(古)	無し	
170	35	17	Ⅰ A4e Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:縄文(LR縦)→半裁竹管状工具による沈線文	ナデ	黒褐 にぶい黄橙	不良	雲・白	大木7a(古)	無し	
171	35	17	Ⅰ A3e Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:隆帯→縄文原体押圧(LR)	ナデ	褐灰 橙	不良	雲・砂	大木7a(古)	無し	
172	35	17	Ⅰ A4e Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:短沈線・三角形刻文	ナデ	橙 橙	不良	砂	大木7a(古)	無し	
173	35	17	Ⅰ B5g Ⅲ層	深鉢	口縁部片(口唇部欠損)	口:半裁竹管状工具による沈線・刺突	ナデ？	黒褐 褐灰	不良	砂	大木7a(古)	無し	
174	35	17	Ⅰ A4e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:刺突、縄文を施文した隆帯	ケズリ→ナデ	にぶい黄褐 明黄褐	良好	雲・砂	大木7a(古)？	無し	
175	35	17	Ⅰ A4e Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:縄文(LR縦)・半裁竹管状工具による押引文・平行沈線文、交互刺突文、隆帯による波状文(縦)　胴:縄文(LR横)	ナデ	橙 にぶい黄橙	不良	長・砂	大木7a(古)	無し	
176	35	17	Ⅰ A5e Ⅲ層	深鉢	口縁部片(口端部欠損)	口:沈線による波状文　頸:三角形刻文を施した隆帯	ナデ	にぶい橙 橙	良好	砂	大木7a(古)	無し	
177	35	17	Ⅰ A5e Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:押し返し口縁、X字状突起、集合沈線→三角形刻文	ナデ	にぶい褐 黒褐	不良	雲・砂	大木7a(古)	無し	
178	36	17	Ⅰ A4e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴上:直線の沈線で三角形状に区画→弧状の沈線で充填　胴下:縄文(LR縦)	ナデ	明黄褐 橙	不良	雲・砂	大木7a(古)	内外面にコゲ	
179	36	17	Ⅰ A4e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦)→押引文	ナデ	にぶい橙 橙	やや不良	雲・砂	大木7a(古)	無し	
180	36	17	Ⅰ A4e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR横)→押引文→縄文を施文した隆帯	ナデ	にぶい褐 橙	不良	雲・砂	大木7a(古)	無し	
181	36	17	Ⅰ B6g Ⅲ層	深鉢	口縁部片	唇:突起　口:隆帯による波状文　短沈線	ミガキ	灰褐 褐	やや良好	雲・砂	大木7a～8a	無し	
182	36	17	Ⅰ B5e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦)→沈線・刺突	ナデ	褐灰 にぶい黄橙	不良	砂	大木7a～8a	無し	
183	36	17	Ⅰ A4e Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:折り返し口縁、半裁竹管状工具による沈線文、隆帯(貼り付けた痕跡のみ)	ナデ	にぶい黄橙 明黄褐	良好	長・砂	大木7a(古)？	無し	
184	36	17	Ⅰ A6e Ⅲ層～Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR横)→沈線による渦巻文・波状文、隆帯	ケズリ→ナデ	にぶい橙 褐灰	やや不良	雲・砂	大木7a～8a	無し	
185	36	17	Ⅱ B5a Ⅲ層	深鉢	口縁部片(口唇部欠損)	口:縄文(RL横)→沈線文	ナデ	浅黄橙 浅黄橙	良好	砂	大木7a(新)	無し	
186	36	17	Ⅰ A5e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(RL縦)→押圧を施した隆帯	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや不良	雲・白	大木7a～8a	無し	
187	36	17	Ⅰ A4e Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:折り返し口縁　胴:結節回転文(r縦)	ナデ	褐灰 明黄褐	良好	長・砂	大木7a(古)	無し	
188	36	17	Ⅰ A5e Ⅲ層	深鉢	口縁部片	唇:半球状の突起　口:折り返し口縁(無文)　胴:結節回転文(r縦)	ナデ	灰褐 にぶい褐	良好	砂	大木7a(古)	無し	
189	36	17	Ⅰ A4e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦　結節部残存)	ナデ	明褐 明褐	不良	雲・砂	大木7a(古)	無し	
190	36	17	Ⅰ A4e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:結節回転文(r縦)	ナデ	暗褐 にぶい褐	やや不良	砂	大木7a(古)	無し	
191	36	17	Ⅰ A5e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(RL縦　結節部残存)	ナデ	にぶい赤褐 黒褐	不良	砂	大木7a(古)	無し	
192	36	17	Ⅰ A4e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:結節回転文(r縦)	ナデ	にぶい橙 にぶい褐	やや不良	雲・砂	大木7a(古)	無し	
193	36	18	Ⅰ A5e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:結束羽状縄文2類(LR・RL縦　結節部残存)	ナデ	橙 明赤褐	やや不良	砂	大木7a(古)	無し	
194	36	18	Ⅰ B5g Ⅲ層	深鉢	口縁部片	唇:押圧　口:円形刺突文　頸:刻みを伴う隆帯　胴:円形刺突文	ナデ	にぶい褐 橙	不良	長	中期	外面口縁部にコゲ	
195	36	18	Ⅰ A5e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦)→沈線による渦巻文	ナデ	にぶい黄褐 灰黄褐	不良	雲・砂	大木8b－1、2	無し	
196	36	18	Ⅰ B10f Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口:縄文原体押圧(LR)胴:縄文(LR横)	ナデ	灰黄褐 にぶい黄橙	やや良好	雲・砂	前期末葉～中期初頭	無し	
197	36	18	Ⅱ B5g Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:縄文原体押圧(直線・曲線)貼付隆帯＋原体押圧文・縄文(LR縦)	ナデ	黒褐 黒褐	不良	雲・砂	大木8a(古)	無し	
198	36	18	Ⅰ B9f Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口:縄文原体押圧(LR)　胴:縄文(LR縦)	ケズリ→ナデ	褐 灰褐	不良	雲・白	大木7b～8a	無し	
199	37	18	Ⅰ A6g Ⅲ層	深鉢	口縁部片	唇:大型突起(山形)に円孔、隆帯による渦巻文　口:沈線	ナデ	にぶい褐 明赤褐	良好	雲・砂	大木8a(新)	無し	
200	37	18	Ⅰ A5d Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:無文　胴:沈線施した大型把手	ナデ	赤褐 赤褐	良好	雲・砂	大木8a新	無し	
201	37	18	Ⅰ A3e Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:上面観渦巻状の突起、沈線文	ナデ	浅黄橙 黄橙	不良	長・砂	大木8a(新)	無し	
202	37	18	Ⅰ A3e Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:隆帯による渦巻文	ナデ？	にぶい褐 にぶい褐	やや不良	砂・白	大木8a(新)	無し	
203	37	18	Ⅱ B1d Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口:無文　胴:隆帯による区画・区画内縄文(不明)	ナデ	にぶい褐 灰黄褐	やや良好	砂・白	大木8a(新)	無し	
204	37	18	Ⅰ A3e Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:隆帯による波状文、隆帯、縄文(RL横)	ナデ	にぶい褐 にぶい褐	不良	砂・白	大木8a(新)	無し	
205	37	18	Ⅰ A4e Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:縄文原体押圧文、隆帯　胴:沈線文	ナデ	にぶい橙 橙	不良	長・白	大木8a(新)	無し	

掲載番号	図版番号	写図番号	出土位置層位	器種	残存部位	外面文様	内面調整(文様)	外面色調内面色調	焼成	胎土混入物	土器型式(時期)	煤コゲ	備考
206	37	18	Ⅰ A5e Ⅲ層	深鉢	口縁部片	唇:山形突起　口:無文　胴:沈線文	ナデ	橙 にぶい黄褐	良好	雲・砂	大木8a？	無し	
207	37	18	Ⅰ B6e Ⅲ層	深鉢	胴部	胴:隆帯	ナデ	にぶい褐 黄橙	不良	砂	大木8a	無し	
208	37	18	T2南 黒色土層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦)→沈線による渦巻文	ナデ	にぶい赤褐 にぶい赤褐	やや良好	雲・砂	大木8a(新)	無し	
209	37	18	Ⅰ B5e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR斜)→沈線による渦巻文	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや良好	砂	大木8a(新)	無し	
210	37	18	Ⅰ A5e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(RL縦)→縄文施文した隆帯(波状)	ナデ	にぶい黄褐 灰黄褐	やや不良	砂	大木8a(新)？	無し	
211	37	18	Ⅰ A6d Ⅲ層	浅鉢	胴部片	胴:隆帯による波状文	ナデ	浅黄橙 橙	やや不良	砂	大木8a(新)	無し	
212	37	18	Ⅰ A5e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦)→半裁竹管状工具による沈線文	ナデ	にぶい黄橙 灰褐	不良	雲・砂	大木8a(新)	無し	
213	37	18	Ⅱ B3d Ⅵ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(RLR縦)→沈線による渦巻文	ナデ	明赤褐 橙	やや良好	砂・雲	大木8a(新)	無し	
214	37	18	Ⅰ A5e Ⅲ層	浅鉢	胴部片	胴上:隆帯による区画→沈線による渦巻文　胴下:縄文(RL横)	ナデ	にぶい赤褐 にぶい黄褐	不良	砂	大木8a(新)	無し	
215	37	18	Ⅰ A3e Ⅲ層	浅鉢	口縁部片	口:突起、区画　胴:沈線	ナデ	浅黄橙 浅黄橙	不良	長・砂	大木8a(新)	無し	
216	37	18	Ⅰ A5e Ⅲ層	深鉢	口縁部片(口端部欠損)	口:上面観渦巻状の突起、縄文(RL横)→隆帯	ナデ	にぶい黄橙 灰黄褐	不良	砂	大木8a～8b－1	無し	
217	37	18	Ⅰ A5d Ⅲ層	浅鉢	胴部片	胴:隆帯による渦巻文	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	長・白	大木8a～8b－1	無し	
218	37	18	Ⅰ B9f Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(RL横)→沈線、隆帯	ミガキ	にぶい橙 にぶい褐	やや不良	雲・白	大木8a～8b－1	無し	
219	37	18	Ⅰ B6e Ⅲ層	深鉢	胴部	胴:縄文(LR横)→沈線	ナデ	黄橙 明黄褐	不良	砂	大木8a～8b－1	無し	
220	37	18	Ⅰ A6g Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦)→隆帯	ナデ	灰黄褐 灰黄褐	やや不良	長・砂	大木8a～8b－1	無し	
221	37	18	Ⅰ A5d Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:縄文(RL横)→隆帯による渦巻文	ナデ	にぶい橙 橙	やや良好	砂	大木8b－1	無し	
222	37	18	Ⅰ A3e Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:隆帯による区画、縄文(RL縦)→隆帯による渦巻文	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	砂	大木8b－1	無し	
223	37	18	Ⅰ B6e Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:縄文(RL横)→隆帯	ナデ	にぶい褐 にぶい褐	やや不良	砂	大木8b－1	無し	
224	37	18	Ⅰ A5d Ⅲ層	深鉢	口縁部片(口端部欠損)	口:隆帯による区画、縄文(LR横)→隆帯による渦巻文	ナデ	橙 明黄褐	良好	長・砂	大木8b－1	無し	
225	37	18	Ⅰ A5d Ⅲ層	深鉢	口縁部片(口端部欠損)	口:隆帯による区画、縄文(LR横)→隆帯による渦巻文？	ナデ	橙 橙	良好	砂	大木8b－1	無し	
226	37	18	Ⅰ A5d Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(RL横)→隆帯、沈線による渦巻文、円形刺突文	ナデ	明赤褐 明赤褐	良好	砂	大木8b－1	無し	
227	37	18	Ⅰ A5d Ⅲ層	浅鉢	口縁部片	口:隆帯による区画文	ナデ	橙 褐灰	不良	長・砂	大木8b－1	無し	
228	37	18	Ⅰ A5e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(RLR縦)→沈線	ナデ→ミガキ	にぶい黄褐 褐	不良	砂・白	大木8b－1	無し	
229	37	18	Ⅰ A6d Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦)→沈線・沈線による渦巻文	ナデ	明黄褐 にぶい黄橙	不良	雲・砂	大木8b	無し	
230	38	19	Ⅰ A5d Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:無文　胴:縄文(LR斜)→隆帯による渦巻文	ナデ	灰黄褐 褐	不良	長・砂	大木8b－2、3	無し	
231	38	19	Ⅰ A5d Ⅲ層	浅鉢	口縁部片	口:無文　胴:縄文(LR縦)→隆帯による区画文(磨消)、隆帯	ナデ	明赤褐 にぶい黄橙	やや不良	砂	大木8b－2、3	無し	
232	38	19	Ⅰ A5d Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:沈線、刺突文、隆帯による区画→縄文(RLR斜)→隆帯による渦巻文)	ナデ	明黄褐 黒褐	不良	砂	大木8b－2、3	外面口縁部にコゲ	
233	38	19	Ⅰ B9f Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(RL斜)→沈線、隆帯	ナデ	にぶい黄橙 明黄褐	やや不良	砂	大木8b－2、3	無し	
234	38	19	Ⅰ A5d Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:無文　胴:縄文(LR横)→隆帯による渦巻文	ナデ	褐灰 褐灰	不良	長・砂	大木8b－2、3	無し	
235	38	19	Ⅰ A5d Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦)→隆帯・沈線による渦巻文	ナデ	にぶい褐 にぶい褐	やや不良	砂・白	大木8b－2、3	無し	
236	38	19	北包5 Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦)→沈線・隆帯(渦巻文？)	ナデ	明赤褐 明赤褐	良好	砂	大木8b－2、3	無し	
237	38	19	Ⅰ A4e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(RLR斜)→隆帯・沈線による曲線(渦巻文)	ナデ	にぶい黄橙 灰褐	やや不良	白	大木8b－2、3	無し	
238	38	19	Ⅰ A5d Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR横)→隆帯・沈線による渦巻文	ナデ	にぶい褐 にぶい黄褐	不良	砂	大木8b－2、3	無し	
239	38	19	Ⅰ A5e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(RLR縦)→隆帯による渦巻文	ナデ	明赤褐 橙	不良	長・砂	大木8b－2、3	無し	
240	38	19	Ⅰ A3e Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(RL斜)→隆帯	ナデ	灰褐 明赤褐	不良	砂	大木8b－2、3	無し	
241	38	19	Ⅰ A6d Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:単軸絡条体1類(R縦)→隆帯による区画・沈線による渦巻文	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや不良	長・白	大木8b－2、3	無し	
242	38	19	Ⅰ A5d Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦)→隆帯による渦巻文	ナデ	灰褐 灰黄褐	不良	砂	大木8b－2、3	無し	
243	38	19	Ⅰ A6d Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(RLR横)→隆帯による渦巻文	ナデ	灰褐 にぶい褐	不良	長・砂	大木8b－2、3	無し	
244	38	19	Ⅰ A3e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LRL横)→隆帯	ナデ	灰白 灰黄褐	不良	白	大木8b？	無し	
245	38	19	Ⅰ A5e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(RL縦)→沈線による区画文	ナデ	にぶい赤褐 黒褐	不良	砂	大木8b－2、3	無し	
246	38	19	Ⅰ A5e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(RK縦)→沈線による渦巻文	ナデ	にぶい褐 黒褐	やや不良	白・砂	大木8b－2、3	無し	
247	38	19	Ⅰ B6g Ⅳ層	深鉢	胴部	胴:縄文(RL縦)→沈線、隆帯	ナデ	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良	長・砂	大木8b－2、3	無し	

掲載番号	図版番号	写図番号	出土位置層位	器種	残存部位	外面文様	内面調整（文様）	外面色調 内面色調	焼成	胎土混入物	土器型式（時期）	煤コゲ	備考
248	38	19	I A6d Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦)→隆帯・沈線	ナデ	灰褐 黒褐	不良	長・白	大木8b－2、3	無し	
249	38	19	6号土坑 埋土中	深鉢	胴部片	胴:縄文(RLR縦)→沈線、隆帯	ナデ	にぶい褐 黒褐	不良	砂	大木8b-2、3	無し	流れ込み
250	38	19	I A6e Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦)→隆帯	ナデ	にぶい褐 にぶい褐	やや 不良	砂	大木8b－2、3	無し	
251	38	19	I A5d Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(RLR縦)→隆帯	ナデ	にぶい黄橙 にぶい褐	やや 良好	雲・白	大木8b－2、3	無し	
252	38	19	I A5d Ⅲ層	浅鉢	口縁部片	口:隆帯による区画文→沈線による渦巻文	ナデ	にぶい赤褐 褐灰	不良	雲・砂	大木8b－2、3	無し	
253	38	19	I A5d Ⅲ層	浅鉢	口縁部片（口端部欠損）	口:隆帯	ナデ	明赤褐 明赤褐	良好	雲・砂	大木8b－2、3	無し	
254	38	19	I A5d Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR横)→隆帯	ナデ	明赤褐 赤褐	不良	砂	大木8b－2、3	外面胴部にコゲ	
255	39	19	I A5e Ⅲ層	深鉢	口縁部片	唇:耳状突起　口:縄文(LR縦)→隆帯による区画文・渦巻文	ナデ	褐灰 にぶい赤褐	やや 不良	長・白	大木8b～9	無し	
256	39	19	I B8f Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口～胴:縄文(RL斜)→沈線(磨消)	ナデ	黒褐 黒褐	やや 不良	雲・白	大木9	外面口縁部にコゲ	
257	39	19	I B5f Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口～胴:縄文(LR斜)→沈線(区画文)	ナデ	橙 にぶい黄橙	不良	長・砂	大木9	無し	
258	39	19	I A5e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦)→沈線による磨消	ケズリ→ナデ	にぶい赤褐 褐灰	やや 不良	砂・白	大木9	外面胴部	
259	39	19	I A4e Ⅲ層	深鉢	口～胴部片	口～胴:縄文(RL縦)→沈線による曲線的な区画文	ナデ	明赤褐 褐	やや 不良	砂・白	大木10	外面口～胴	磨消技法残る
260	39	19	I B5g Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口縁部片	口:縄文(LR横)	ナデ	明赤褐 明赤褐	良好	砂・白	中期	無し	
261	39	19	I B5g Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:無文　胴:縄文(RL横)	ナデ	橙 橙	やや 不良	長	中期	無し	
262	39	19	I B5g Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口～胴:縄文(LRL横)	ナデ	橙 灰黄褐	やや 不良	雲・砂	中期	内面にコゲ	
263	39	19	I B5g Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:縄文(LR横)	ナデ	明赤褐 橙	やや 良好	雲・白	中期	無し	
264	39	19	I A4e Ⅲ層	深鉢	口縁部片	口:縄文(RL？)	ナデ	橙 にぶい褐	やや 良好	砂・白	中期？	無し	
265	39	20	I A5e Ⅲ層	深鉢	口縁部片	唇:2単位の山形突起、口:折り返し口縁→縄文(LR横)　口～胴:半円状の突起＋隆帯(縄文施文)、縄文(LR横)	ナデ	橙 橙	良好	砂	中期	無し	
266	39	20	I A5e Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(LR縦)	ナデ	にぶい褐 橙	やや 不良	長・砂	中期	無し	
267	39	20	I B5f Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(RL縦)	ナデ	にぶい黄橙 にぶい黄褐	不良	雲・白	中期	無し	
268	39	20	I B5e Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	胴1/3	胴:縄文(RLR縦)	ナデ	橙 にぶい褐	不良	砂	中期	無し	
269	39	20	I B5g Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:縄文(RL横)	ナデ	橙 にぶい黄褐	不良	砂	中期？	無し	
270	39	20	I A4e Ⅲ層	深鉢	口縁部片（口端部欠損）	口:結節回転文(L)	ナデ	にぶい褐 灰褐	不良	雲・白	中期？	無し	
271	39	20	I B5f Ⅳ層	深鉢	胴部片	胴:半裁竹管状工具による押引文	ナデ	橙 黒	不良	白	中期	無し	
272	39	20	I B5f Ⅲ層	深鉢	胴部片	胴:半裁竹管状工具による沈線文	ナデ	橙 黒褐	不良	雲・白	中期	内面	
273	39	20	I B5g Ⅲ層	ミニチュア？	底部片	胴:無文	ナデ？	にぶい黄褐 橙	やや 不良	砂	中期	無し	
274	39	20	Ⅱ B1d Ⅳ層	注口土器？	注口部？	無文	－	にぶい黄橙 －	良好	砂	後期？	無し	
275	39	20	I A4e Ⅲ層	深鉢	胴下～底部片	胴:縄文(RL横・縦)	ナデ	浅黄橙 浅黄橙	不良	白	中期	無し	
276	39	20	I B5g Ⅲ層	浅鉢	底部片	胴下:縄文(LR縦)	ナデ	明赤褐 明赤褐	やや 良好	雲・砂	中期中葉～後葉	無し	

土製品

掲載番号	図版番号	写図番号	出土位置層位	器種	残存部位	形状	色調	横径（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	文様	時期	備考
68	23	22	5号住居 1層	円盤形土製品	完形	円形	にぶい褐	3.5	0.9	16.4	縄文（LR）	中期後葉	
403	51	20	I B5g Ⅲ層	円盤形土製品	完形	円形	明褐	5.4	0.9	27.8	単軸絡条体１類（r）、沈線	中期後葉	
404	51	20	I B5g Ⅲ層	円盤形土製品	完形	円形	明黄褐	5.7	0.7	13.9	縄文（RL）	中期後葉	
405	51	20	Ⅱ B1e Ⅳ層	円盤形土製品	完形	楕円形	にぶい褐	5.0	0.7	22.9	縄文（LR）	前期前葉	繊維混入

石器・石製品

掲載番号	図版番号	写図番号	器種	出土位置・層位	分類	残存部位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	備考
13	10	21	石鏃	2号住居埋土下位	Ⅰ	完形	15.4	17.3	4.8	1.24	頁岩(北上山地)	
14	10	21	石鏃	2号住居埋土下位	Ⅰ	18	(19.4)	16.1	(4.7)	(0.97)	頁岩(北上山地)	
15	10	21	石鏃	2号住居埋土下位	Ⅰ	完形	21.9	17.9	4.9	1.77	頁岩(北上山地)	
16	10	21	石鏃	2号住居埋土下位	Ⅰ	完形	23.1	17.6	4.4	1.38	頁岩(北上山地)	
17	10	21	石鏃	2号住居埋土下位	Ⅱ	完形	26.9	10.0	3.0	0.87	頁岩(北上山地)	
18	10	21	石鏃	2号住居埋土下位	失敗品	－	25.2	16.4	4.3	1.28	頁岩(北上山地)	
19	10	21	石鏃	2号住居埋土下位	失敗品	－	17.9	17.4	4.5	1.42	頁岩(北上山地)	
20	10	21	石匙	2号住居埋土下位	Ⅱ	完形	41.2	61.5	8.1	14.03	頁岩(北上山地)	
21	10	21	尖頭器	2号住居埋土下位	－	完形	104.0	28.2	10.9	31.76	頁岩(北上山地)	
22	10	21	スクレイパー	2号住居 Pit4 埋土中	Ⅰ	－	84.8	23.8	11.1	14.10	頁岩(北上山地)	
23	10	21	Rフレイク	2号住居埋土下位	Ⅳb	－	19.6	22.1	6.0	2.85	頁岩(北上山地)	
24	10	21	Rフレイク	2号住居床面直上	Ⅳb	－	36.0	28.0	7.7	7.33	頁岩(北上山地)	
25	10	21	Rフレイク	2号住居埋土下位	Ⅱc	－	34.6	39.0	8.8	7.94	頁岩(北上山地)	
26	10	21	フレイク	2号住居埋土下位	Ⅰc	－	33.5	50.7	9.8	12.13	頁岩(北上山地)	
27	11	21	石皿	2号住居埋土下位	－	1/2残	(185.5)	(176.0)	78.0	3230.00	閃緑岩(北上山地)	両面使用、片減り激しいので、平底石か。
36	14	22	石鏃	3号住居埋土中	Ⅱ	先端欠損	(23.1)	16.3	5.7	(1.65)	頁岩(北上山地)	
37	14	22	石鏃	3号住居埋土中	失敗品	－	21.8	15.1	4.7	1.21	頁岩(北上山地)	
38	14	22	石鏃	3号住居埋土中	Ⅰ	先端欠損	(29.9)	16.6	4.1	(1.51)	頁岩(北上山地)	
39	14	22	石鏃	3号住居埋土中	Ⅰ	先端欠損	(21.1)	14.5	3.3	(0.95)	頁岩(北上山地)	
40	14	22	石匙	3号住居炉6上	Ⅲ	摘部～体部	(45.8)	16.1	7.2	(5.53)	頁岩(北上山地)	
41	15	22	フレイク	3号住居埋土中	Ⅰb	－	32.2	34.9	7.0	7.04	頁岩(北上山地)	
42	15	22	フレイク	3号住居埋土中	Ⅰb	－	40.8	44.5	8.0	11.41	頁岩(北上山地)	
43	15	22	敲磨器類	3号住居埋土中	Ⅰ	完形	119.1	75.8	71.5	911.81	閃緑岩(北上山地)	
48	19	22	石鏃	4号住居埋土中	Ⅲ	茎部欠損	(27.0)	10.4	4.7	(1.50)	頁岩(北上山地)	
49	19	22	Rフレイク	4号住居裡設土器内	Ⅳb	－	15.2	14.4	6.8	1.68	石英(北上山地)	
50	19	22	スクレイパー	4号住居埋土	Ⅱ	－	75.4	45.3	16.6	49.10	頁岩(北上山地)	
51	19	22	敲磨器類	4号住居埋土中	Ⅰ	完形	96.1	77.7	57.4	622.30	花崗岩(北上山地)	
62	22	22	石鏃	5号住居埋土中	Ⅱ	完形	14.4	17.2	2.5	0.56	赤色頁岩(北上山地)	
63	22	22	石鏃	5号住居埋土中	Ⅱ	完形	20.6	10.9	2.9	0.51	頁岩(北上山地)	
64	22	22	石錐	5号住居埋土中	Ⅱ	完形	34.5	16.1	4.8	1.97	頁岩(北上山地)	
65	23	22	磨製石斧	5号住居埋土中	－	ほぼ完形	102.6	47.3	25.2	183.25	砂岩(北上山地)	
66	23	22	敲磨器類	5号住居埋土中	Ⅰ	完形	114.4	70.7	54.7	717.39	花崗岩(北上山地)	

掲載番号	図版番号	写図番号	器種	出土位置・層位	分類	残存部位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	備考
67	23	23	砥石	5号住居床面直上	－	端部欠損？	(191.5)	89.5	68.0	(4043.76)	凝灰岩(北上山地)	4面使用
73	29	22	敲磨器類	2号土坑埋土中	Ⅰ	完形	109.9	84.6	56.7	795.87	花崗岩(北上山地)	
74	29	22	敲磨器類	2号土坑埋土中	Ⅰ＋Ⅱ	完形	125.3	93.8	71.5	1330.03	閃緑岩(北上山地)	
75	31	23	フレイク	Pit10埋土中	Ⅰb	－	51.3	45.9	9.8	15.10	頁岩(北上山地)	
277	41	23	石鏃	Ⅰ B8e Ⅳ層	Ⅰ	完形	19.2	16.8	5.2	1.35	頁岩(北上山地)	
278	41	23	石鏃	Ⅰ B6f Ⅳ層	Ⅰ	完形	19.2	16.1	2.6	0.72	頁岩(北上山地)	
279	41	23	石鏃	Ⅰ B6g Ⅳ層	Ⅰ	完形	19.9	12.8	3.0	0.61	頁岩(北上山地)	
280	40	23	石鏃	Ⅰ A7e Ⅲ層	Ⅰ	完形	18.4	14.2	2.9	0.58	頁岩(北上山地)	
281	40	23	石鏃	Ⅱ B4c Ⅰ～Ⅱ層	Ⅰ	完形	15.4	13.7	2.8	0.48	頁岩(北上山地)	
282	40	23	石鏃	Ⅱ B1e Ⅳ層	Ⅰ	完形	20.6	16.8	3.9	1.07	頁岩(北上山地)	
283	40	23	石鏃	Ⅰ B8f Ⅳ層	Ⅰ	完形	20.1	16.3	4.5	1.02	頁岩(北上山地)	
284	40	23	石鏃	Ⅰ B10a Ⅲ～Ⅳ層	Ⅰ	完形	22.9	14.3	2.4	0.65	頁岩(北上山地)	
285	40	23	石鏃	Ⅰ B5f Ⅲ層	Ⅰ	－	24.1	17.6	4.5	1.36	頁岩(北上山地)	
286	40	23	石鏃	Ⅰ B5g Ⅳ層	Ⅰ	先端欠損	(22.4)	15.1	3.1	(0.96)	頁岩(北上山地)	
288	40	23	石鏃	Ⅰ B7f Ⅳ層	Ⅰ	完形	25.1	14.6	2.9	0.96	凝灰岩(北上山地)	
289	40	23	石鏃	Ⅰ B7f Ⅳ層	Ⅰ	完形	19.8	14.1	2.2	0.46	頁岩(北上山地)	
290	40	23	石鏃	Ⅰ B8g Ⅳ層	Ⅰ	完形	19.1	12.7	3.0	0.57	頁岩(北上山地)	
291	40	23	石鏃	Ⅰ B8f Ⅳ層	Ⅰ	先端欠損	(21.2)	14.5	2.8	(0.76)	頁岩(北上山地)	
292	40	23	石鏃	Ⅰ B7g Ⅳ層	Ⅰ	先端欠損	(21.1)	14.2	3.9	(0.82)	頁岩(北上山地)	
293	40	23	石鏃	Ⅰ B9f Ⅳ層	Ⅰ	完形	20.4	14.5	3.5	0.89	頁岩(北上山地)	
294	40	23	石鏃	B7f Ⅳ層	Ⅰ	完形	30.1	13.6	3.8	1.38	頁岩(北上山地)	
295	40	23	石鏃	B7g Ⅳ層	Ⅰ	先端欠損	(28.4)	14.2	3.3	(1.44)	頁岩(北上山地)	
296	40	23	石鏃	Ⅰ B8f Ⅳ層	Ⅰ	完形	27.6	15.8	5.3	1.81	頁岩(北上山地)	
297	40	23	石鏃	Ⅰ B6e Ⅳ層	Ⅰ	完形	14.8	15.8	2.1	0.39	頁岩(北上山地)	
298	40	23	石鏃	Ⅰ B8f Ⅳ層	Ⅱ	完形	16.3	15.1	4.8	0.99	頁岩(北上山地)	
299	40	23	石鏃	Ⅰ B8e Ⅳ層	Ⅱ	完形	16.9	16.0	2.6	0.62	頁岩(北上山地)	
300	40	23	石鏃	Ⅰ B7g Ⅳ層	Ⅰ	完形	21.1	14.2	4.1	0.94	頁岩(北上山地)	
301	40	23	石鏃	Ⅰ B6g Ⅳ層	Ⅱ	完形	18.2	14.4	3.4	0.67	頁岩(北上山地)	
302	40	23	石鏃	Ⅰ B5h Ⅳ層	Ⅰ	完形	18.1	11.7	2.1	0.42	頁岩(北上山地)	
303	40	23	石鏃	Ⅰ B7g Ⅳ層	Ⅱ	基部欠損	(21.6)	(14.7)	3.5	(0.91)	頁岩(北上山地)	
304	40	23	石鏃	Ⅰ B5f Ⅲ層	Ⅰ	先端欠損	(24.1)	17.1	4.4	(1.41)	頁岩(北上山地)	
305	40	23	石鏃	Ⅰ B9e Ⅳ層	Ⅱ	完形	26.9	14.5	4.7	1.47	頁岩(北上山地)	
306	40	23	石鏃	Ⅰ B5g Ⅲ層	Ⅱ	完形	27.9	16.2	4.0	1.73	頁岩(北上山地)	
307	40	24	石鏃	Ⅰ A5e Ⅲ層	Ⅱ	完形	23.1	17.4	4.7	1.60	頁岩(北上山地)	

掲載番号	図版番号	写図番号	器種	出土位置・層位	分類	残存部位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	備考
308	40	24	石鏃	ⅠA4f Ⅳ層	Ⅱ	先端欠損	(21.6)	17.3	5.0	(1.43)	頁岩 (北上山地)	
309	40	24	石鏃	ⅠA10e Ⅴ層上面	Ⅱ	完形	20.4	17.4	4.3	1.12	頁岩 (北上山地)	
310	40	24	石鏃	出土地点不明	Ⅱ	基部欠損	21.4	17.1	(4.7)	(1.43)	頁岩 (北上山地)	
311	40	24	石鏃	ⅠB5g Ⅲ層	Ⅲ	完形	28.1	13.3	5.2	1.57	頁岩 (北上山地)	
312	40	24	石鏃	ⅠB7g Ⅳ層	Ⅲ	完形	17.9	8.1	3.7	0.50	頁岩 (北上山地)	
313	41	24	石鏃	ⅠB9g Ⅳ層	失敗品	－	(39.0)	28.8	(6.8)	(6.72)	頁岩 (北上山地)	
314	41	24	石鏃	ⅡB2d Ⅵ層上面	失敗品	先端欠損	(37.4)	24.8	(9.7)	(7.57)	頁岩 (北上山地)	
315	41	24	石鏃	ⅠB6f Ⅳ層	失敗品	－	32.8	22.3	6.7	4.81	頁岩 (北上山地)	
316	41	24	石鏃	ⅠB6f Ⅳ層	失敗品	－	(30.6)	22.6	6.8	(3.87)	頁岩 (北上山地)	
317	41	24	石鏃	ⅠB6f Ⅳ層	失敗品	－	(33.4)	17.7	6.1	(2.15)	**凝灰岩 (北上山地)**	
318	41	24	石鏃	ⅠB6f Ⅳ層	失敗品	－	29.6	18.4	4.6	2.01	頁岩 (北上山地)	
319	41	24	石鏃	ⅠB7f Ⅳ層	失敗品	－	(30.8)	(16.1)	5.9	(3.17)	頁岩 (北上山地)	
320	41	24	石鏃	ⅠB6g Ⅳ層	失敗品	－	(28.9)	20.4	4.2	(2.24)	頁岩 (北上山地)	
321	41	24	石鏃	ⅠB7c Ⅳ層	失敗品	先端欠損	(23.4)	18.8	4.6	(1.50)	頁岩 (北上山地)	
322	41	24	石鏃	ⅠB10f Ⅳ層	失敗品	－	(25.4)	(14.9)	6.9	(2.24)	頁岩 (北上山地)	
323	41	24	石鏃	ⅠB9e Ⅳ層	失敗品	完形	19.4	14.6	2.5	0.70	頁岩 (北上山地)	
324	41	24	石鏃	ⅠB6d Ⅳ層	失敗品	完形	24.1	20.4	2.9	1.15	頁岩 (北上山地)	
325	41	24	石鏃	ⅠB5g Ⅳ層	失敗品	完形	24.1	13.0	2.9	0.83	頁岩 (北上山地)	
326	41	24	石鏃	ⅠB8f Ⅳ層	失敗品	先端欠損	(19.2)	14.6	3.5	(0.99)	頁岩 (北上山地)	
327	41	24	石錐	ⅠB7f Ⅳ層	Ⅰ	完形	31.9	10.3	5.3	1.62	頁岩 (北上山地)	
328	41	24	石錐	ⅡB1f Ⅲ層～Ⅳ層	Ⅰ	完形	47.5	8.1	5.5	2.30	頁岩 (北上山地)	
329	41	24	尖頭器	ⅠB5g Ⅳ層	－	両端欠損	(99.2)	26.1	14.8	(32.24)	頁岩 (北上山地)	
330	41	24	石錐	ⅠB8e Ⅳ層	Ⅱ	摘部欠損	28.9	26.6	4.6	2.99	頁岩 (北上山地)	
331	41	24	楔形石器	ⅠB9f Ⅲ層～Ⅳ層	Ⅱ	－	35.4	31.6	7.6	9.41	頁岩 (北上山地)	
332	41	24	楔形石器	ⅠB7f Ⅳ層	Ⅱ	－	30.6	19.7	7.3	4.92	頁岩 (北上山地)	
333	42	24	楔形石器	ⅠB6g Ⅳ層	Ⅰ	－	39.4	60.4	18.8	46.03	頁岩 (北上山地)	
334	42	24	石匙	ⅠB7f Ⅳ層	Ⅰ	刃部縁辺欠損	(44.4)	11.2	4.5	(2.12)	頁岩 (北上山地)	
335	42	24	石匙	ⅡB2e Ⅳ層	Ⅰ	完形	58.2	16.6	6.5	6.19	頁岩 (北上山地)	
336	42	24	石匙	ⅠB6f Ⅳ層	Ⅰ	完形	69.1	10.9	6.5	4.57	頁岩 (北上山地)	
337	42	24	石匙	ⅠB7f Ⅳ層	Ⅰ	完形	45.3	14.0	5.0	3.28	頁岩 (北上山地)	
338	42	24	石匙	ⅠB5f Ⅲ層	Ⅰ	完形	47.1	17.4	8.4	6.49	頁岩 (北上山地)	
339	42	25	石匙	ⅠB6g Ⅳ層	Ⅰ	完形	75.2	26.8	8.4	14.09	頁岩 (北上山地)	
340	42	25	石匙	ⅡB2d 検出面	Ⅰ	完形	55.6	25.8	5.7	8.61	凝灰岩 (北上山地)	
341	42	25	石匙	ⅠB5g Ⅲ層	Ⅲ	摘部～体部	(37.1)	14.1	(7.4)	(3.11)	頁岩 (北上山地)	

掲載番号	図版番号	写図番号	器種	出土位置・層位	分類	残存部位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	備考
342	42	25	石匙	I B6e Ⅳ層	Ⅰ	完形	45.0	19.4	6.1	5.12	頁岩(北上山地)	
343	42	25	石匙	I B7g Ⅳ層	Ⅰ	完形	54.5	12.4	6.3	4.76	頁岩(北上山地)	
344	42	25	石匙	I B5g Ⅳ層	Ⅲ	完形	46.0	31.4	6.5	7.09	頁岩(北上山地)	
345	43	25	不定形石器	I B6g Ⅳ層	Ⅰ	－	60.0	24.1	11.1	13.78	頁岩(北上山地)	
346	43	25	不定形石器	Ⅱ B1a Ⅲ層	Ⅱ	－	46.7	25.0	6.8	8.62	頁岩(北上山地)	
347	43	25	不定形石器	I B8g Ⅳ層	Ⅱ	－	36.6	11.3	5.9	2.28	頁岩(北上山地)	
348	43	25	不定形石器	I B6g Ⅳ層	Ⅰ	－	36.8	21.1	6.5	5.61	頁岩(北上山地)	
349	43	25	不定形石器	I B5e Ⅲ層	Ⅱ	－	45.7	20.3	7.2	8.14	頁岩(北上山地)	
350	43	25	不定形石器	I B7f Ⅳ層	Ⅰ	－	44.3	25.3	7.5	9.92	頁岩(北上山地)	
351	43	25	不定形石器	I B8f Ⅳ層	Ⅰ	－	31.1	25.8	6.6	4.45	頁岩(北上山地)	
352	43	25	不定形石器	I B6f Ⅲ層	Ⅱ	－	25.1	48.8	7.1	9.95	頁岩(北上山地)	
353	43	25	不定形石器	I B6g Ⅳ層	Ⅰ	－	40.7	44.0	11.2	18.08	頁岩(北上山地)	
354	43	25	不定形石器	Ⅱ B1f Ⅳ層	Ⅱ	－	22.1	47.8	8.1	6.35	頁岩(北上山地)	
355	43	25	不定形石器	I B5f Ⅳ層	Ⅲ	－	46.6	33.9	11.2	14.80	頁岩(北上山地)	
356	43	26	Uフレイク	I B5f Ⅲ層	Ⅰc	－	43.4	43.2	10.7	16.26	頁岩(北上山地)	
357	44	25	Uフレイク	I B5g Ⅲ層	Ⅱb	－	61.4	50.5	23.4	76.15	頁岩(北上山地)	
358	44	25	Uフレイク	I B6d Ⅳ層	Ⅰb	－	50.5	35.0	11.7	13.03	頁岩(北上山地)	
359	44	25	Uフレイク	I B6f Ⅳ層	Ⅰc	－	46.1	36.1	12.6	21.64	頁岩(北上山地)	
360	44	25	Uフレイク	I B6g Ⅳ層	Ⅱb	－	55.0	39.1	9.5	15.60	頁岩(北上山地)	
361	44	26	Uフレイク	I B6g Ⅳ層	Ⅱb	－	57.9	37.8	7.5	15.43	頁岩(北上山地)	
362	44	26	Uフレイク	I B9g Ⅳ層	Ⅰb	－	45.1	31.8	9.6	11.52	頁岩(北上山地)	
363	44	26	Rフレイク	I B6f Ⅲ層	Ⅱc	－	29.5	28.4	10.5	6.47	頁岩(北上山地)	
364	44	26	Rフレイク	I B6e Ⅳ層	Ⅳc	－	25.8	31.6	7.5	7.36	頁岩(北上山地)	
365	45	26	フレイク	Ⅱ B3d Ⅳ層	Ⅰa	－	33.3	38.5	7.7	8.88	頁岩(北上山地)	
366	45	26	フレイク	I B7f Ⅳ層	Ⅰb	－	60.6	38.5	10.3	19.98	頁岩(北上山地)	
367	45	26	フレイク	Ⅱ B1f Ⅳ層	Ⅰb	－	39.2	34.6	11.2	13.31	頁岩(北上山地)	
368	45	26	フレイク	I B9d Ⅳ層	Ⅰb	－	45.0	32.5	9.3	12.26	頁岩(北上山地)	
369	45	26	フレイク	I B5d Ⅳ層	Ⅰc	－	41.6	39.5	9.6	11.65	頁岩(北上山地)	
370	45	26	フレイク	I B5g Ⅳ層	Ⅰc	－	43.8	34.4	9.8	13.31	頁岩(北上山地)	
371	45	26	フレイク	I B6g Ⅳ層	Ⅱa	－	44.1	44.6	11.4	14.78	頁岩(北上山地)	
372	45	26	フレイク	I B6g Ⅳ層	Ⅱb	－	55.5	36.0	8.2	14.68	頁岩(北上山地)	
373	45	26	フレイク	I B6f Ⅲ層	Ⅱc	－	44.0	28.6	6.2	7.03	頁岩(北上山地)	
374	45	26	フレイク	I B5f Ⅲ層	Ⅱc	－	38.0	29.1	11.3	13.02	頁岩(北上山地)	
375	46	27	フレイク	I B9c Ⅳ層	Ⅱc	－	57.8	59.3	15.2	32.95	頁岩(北上山地)	

掲載番号	図版番号	写図番号	器種	出土位置・層位	分類	残存部位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	備考
376	46	26	フレイク	ⅠA4e Ⅲ層	Ⅲa	－	27.1	23.9	8.2	5.87	頁岩(北上山地)	
377	46	26	フレイク	ⅡB1c Ⅵ層上面	Ⅲb	－	28.4	36.4	7.0	6.90	頁岩(北上山地)	
378	46	26	フレイク	ⅠB5g Ⅳ層	Ⅲb	－	36.5	20.0	8.8	4.26	凝灰岩(北上山地)	
379	46	27	フレイク	ⅠB10e Ⅳ層	Ⅲc	－	26.9	31.6	6.5	5.23	頁岩(北上山地)	
380	46	27	Uフレイク	ⅡB1f Ⅳ層	Ⅲc	－	33.5	39.9	9.8	10.14	頁岩(北上山地)	
381	46	27	フレイク	ⅠB5g Ⅳ層	Ⅲb	－	38.4	25.6	8.8	8.26	頁岩(北上山地)	
382	46	27	フレイク	ⅠB7g Ⅳ層	Ⅲc	－	40.4	42.0	7.9	8.15	頁岩(北上山地)	
383	46	27	フレイク	ⅠB10e Ⅳ層	Ⅳa	－	29.6	33.4	6.8	7.92	頁岩(北上山地)	
384	46	27	フレイク	ⅠB7f Ⅳ層	Ⅳb	－	32.2	27.9	5.3	4.09	頁岩(北上山地)	
385	47	27	礫器	ⅠB6f Ⅳ層	－	－	133.1	61.5	19.6	177.19	頁岩(北上山地)	
386	47	27	礫器	ⅠB7g Ⅳ層	－	－	86.5	50.8	20.9	119.97	細粒花崗閃緑岩(北上山地)	
387	47	27	礫器	ⅠA6g Ⅲ層	－	－	57.8	52.5	12.4	57.32	頁岩(北上山地)	
388	47	27	礫器	ⅠB7g Ⅳ層	－	－	61.1	54.4	28.2	104.65	頁岩(北上山地)	
389	47	27	磨製石斧	ⅠB6g Ⅳ層	－	基部～体部	(95.7)	(57.4)	33.6	(275.66)	花崗閃緑岩(北上山地)	
390	47	27	敲磨器類	ⅠB5e Ⅳ層	Ⅰ	完形	123.0	122.2	77.9	1708.59	花崗岩(北上山地)	
391	47	27	敲磨器類	ⅠB5f Ⅲ層	Ⅰ	完形	79.8	71.9	43.2	395.43	閃緑岩(北上山地)	
392	47	27	敲磨器類	ⅠA4e Ⅲ層	Ⅰ	完形	120.2	81.0	29.7	492.33	花崗閃緑岩(北上山地)	
393	47	27	敲磨器類	ⅠA4e Ⅲ層	Ⅰ	完形	103.5	80.9	42.3	568.93	閃緑岩(北上山地)	
394	48	28	敲磨器類	ⅠA3e Ⅲ層	Ⅰ	完形	156.0	58.2	50.4	801.73	閃緑岩(北上山地)	
395	48	28	敲磨器類	ⅠB10c Ⅵ層上面	Ⅰ	完形	152.5	74.2	81.2	1240.56	花崗岩(北上山地)	
396	48	28	敲磨器類	ⅠB5f Ⅲ層	Ⅰ	完形	137.5	57.5	62.7	780.70	閃緑岩(北上山地)	
397	48	28	敲磨器類	ⅠB5f Ⅲ層	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	完形	146.2	60.1	12.2	1069.03	閃緑岩(北上山地)	
398	48	28	敲磨器類	ⅠB7c Ⅵ層上面	Ⅰ	完形	139.2	40.7	80.1	718.44	花崗岩(北上山地)	
399	48	28	敲磨器類	ⅡB1e Ⅳ層	Ⅰ＋Ⅲ	完形	100.1	76.4	39.2	458.64	花崗岩(北上山地)	
400	49	28	石皿	ⅠB10f Ⅳ層	－	完形	247.0	196.0	79.5	6900.00	閃緑岩(北上山地)	
401	49	28	石皿	ⅡA6g Ⅲ層	－	完形	268.0	148.5	63.0	4130.00	ひん岩(北上山地)	片面のみ使用
402	50	28	石製品	ⅠB6g Ⅲ層	－	完形	127.7	72.7	52.7	713.86	アプライト(北上山地)	何かを巻いたような付着痕

部を転用し、鯛面は打ち欠かれているものの、積極的に鯛面を研磨した痕跡は見受けられない。403は縄文のほか弧状を描く沈線文が見受けられるので中期に比定される。

2　江　戸　時　代

（1）墓壙（近世墓）

6号土坑（第51図、写真図版11）

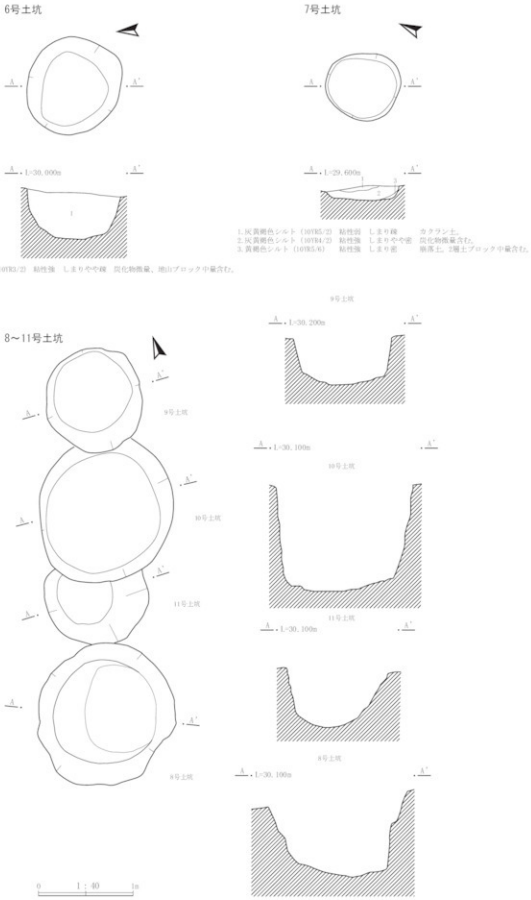
［位置・検出状況］調査区中央からやや南東寄りのⅡB 1dグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。
［他の遺構との重複関係］なし。
［平面形］不整な円形　［規模］長軸108cm、単軸98cm、深さ48cm
［底面・壁］Ⅵ層面が露出した面を底面とした。丸く湾曲している。壁は全周確認した。緩やかに広がりながら立ち上がる。
［埋土］単層である。Ⅲ層に類似するが、地山土がブロック状で混入しており、人為堆積とみられる。
［出土遺物］埋土上位から銭貨４枚が出土している。いずれも寛永通宝（古寛永）である
［性格］平面形や埋土の様相、また銭貨の出土から墓壙と考える。
［時期］出土した銭貨の年代から江戸時代と判断した。

7号土坑（第51図、写真図版11）

［位置・検出状況］調査区中央からやや南東寄りのⅠB10dグリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出した。地形が西側へと傾斜し、堆積土も流れているものと推測される。合わせて本遺構の上部も崩落している可能性が高い。
［他の遺構との重複関係］
［平面形］不整な円形　［規模］長軸77cm、単軸74cm、深さ16cm
［底面・壁］Ⅵ層面が露出した面を底面とした。概ね平坦である。壁は全周確認した。緩やかに広がりながら立ち上がる。
［埋土］２層からなる（１層はカクラン土）。遺構埋土の主体は２層で、実質的には単層に近い堆積状況であり、人為堆積と考える。
［出土遺物］なし。
［性格］遺構上部が消失しているため不明な点が多いが、平面形、埋土の堆積様相、周辺の遺構から墓壙の可能性が高いと考える。
［時期］周辺遺構の時期から江戸時代と判断した。

8号土坑（第51図、写真図版11）

［位置・検出状況］調査区中央からやや南東寄りのⅡB 1dグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。
［他の遺構との重複関係］なし。
［平面形］不整な楕円形　［規模］長軸155cm、単軸136cm、深さ80cm
［底面・壁］Ⅵ層面が露出した面を底面とした。やや歪だが、概ね平坦である。壁は全周確認した。緩やかに広がりながら立ち上がる。
［埋土］土層を確認する前に掘り下げてしまったため、埋土の様相は不明。調査時に確認した限りではⅢ層に類似する黒褐色シルト単層であり、地山土ブロックの混入から、人為堆積と考えていた。
［出土遺物］底面から銭貨４枚出土している。いずれも寛永通宝（古寛永）である。


6号土坑
A
A'
A
L=30.000m
A'
1
1.黒褐色シルト（10YR3/2）粘性強　しまりやや疎　炭化物微量、地山ブロック中量含む。
7号土坑
A
A'
A
L=29.600m
A'
3
2
1.灰黄褐色シルト（10YR5/2）粘性弱　しまり疎　カクラン土。
2.灰黄褐色シルト（10YR4/2）粘性強　しまりやや密　炭化物微量含む。
3.黄褐色シルト（10YR5/6）粘性強　しまり密　崩落土。2層土ブロック中量含む。
8～11号土坑
A
A'
9号土坑
A
A'
10号土坑
A
A'
11号土坑
A
A'
8号土坑
0
1：40
1m
9号土坑
A
L=30.200m
A'
A
L=30.100m
A'
10号土坑
11号土坑
A
L=30.100m
A'
8号土坑
A
L=30.100m
A'

第51図　近世墓

［性格］平面形、断面形、また銭貨の出土から墓壙と考える。
［時期］出土した銭貨の年代から江戸時代と判断した。

９号土坑（第51図、写真図版11）
［位置・検出状況］調査区中央からやや南東寄りのⅡＢ１ｃグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。地形が西側へと傾斜し、堆積土も流れているものと推測される。合わせて本遺構の上部も崩落している可能性が高い。
［他の遺構との重複関係］３号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。
［平面形］不整な楕円形　［規模］長軸110cm、単軸104cm、深さ50cm
［底面・壁］Ⅵ層面が露出した面を底面とした。内側がくぼむように湾曲する。壁は全周確認した。直立気味である。
［埋土］土層を確認する前に掘り下げてしまったため、埋土の様相は不明。調査時に確認した限りではⅢ層に類似する黒褐色シルト単層であり、地山土ブロックの混入から、人為堆積と考えていた
［出土遺物］埋土中から銭貨５枚が出土している（うち３枚は癒着した状態で出土）。いずれも寛永通宝（古寛永）である。
［性格］平面形、断面形、また銭貨の出土から墓壙と考える。
［時期］出土した銭貨の年代から江戸時代と判断した。

10号土坑（第51図、写真図版11）
［位置・検出状況］調査区中央からやや南東寄りのⅡＢ１ｃグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。
［他の遺構との重複関係］９号土坑・３号住居跡と重複する。本遺構は、９号土坑より旧く、３号住居跡より新しい。
［平面形］円形　［規模］長軸（150）cm、短軸146cm、深さ50cm
［底面・壁］Ⅵ層面が露出した面を底面とした。概ね平坦である。壁は北側を除き全周する。直立気味である。
［埋土］土層を確認する前に掘り下げてしまったため、埋土の様相は不明。調査時に確認した限りではⅢ層に類似する黒褐色シルト単層であり、地山土ブロックの混入から、人為堆積と考えていた
［出土遺物］なし。
［性格］平面形と断面形、重複する９号土坑の性格から墓壙と考える。
［時期］重複する９号土坑の時期を参考し、江戸時代と判断した。

11号土坑（第51図、写真図版11）
［位置・検出状況］調査区中央からやや南東寄りのⅡＢ１ｃグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。
［他の遺構との重複関係］８・10号土坑・３号住居跡と重複する。本遺構は、８・10号土坑より旧く、３号住居跡より新しい。
［平面形］不整な円形　［規模］長軸110cm、単軸（90）cm、深さ30cm
［底面・壁］Ⅵ層面が露出した面を底面とした。やや歪である。壁は東西壁と南壁の一部を確認した。緩やかに広がりながら立ち上がる。
［埋土］土層を確認する前に掘り下げてしまったため、埋土の様相は不明。調査時に確認した限りではⅢ層に類似する黒褐色シルト単層であり、地山土ブロックの混入から、人為堆積と考えていた。

6号土坑出土

406

407

408

409

8号土坑出土

410

411

412

413

9号土坑出土

414

415

416

第52図　近世墓出土銭貨

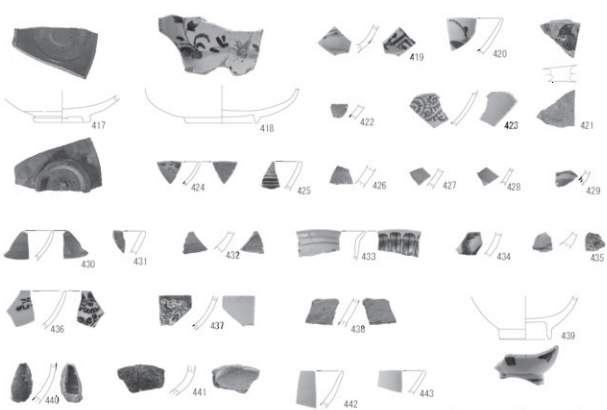
［出土遺物］なし。
［性格］平面形と断面形、重複する８号土坑の性格から墓壙と考える。
［時期］重複する８号土坑の時期を参考し、江戸時代と判断した。　（須原）

（２）遺構外出土遺物

遺構外から陶磁器片が49点出土した。調査区全体に散在しており、縄文時代の遺構などに流れ込むものもあるが、調査開始頃の試掘トレンチから出土するものも多く、概ね遺構検出面よりも上層から見つかっている。

27点図示した。肥前産、瀬戸・美濃産、大堀相馬産であり、その他に東北在地系の陶磁器である。肥前産は、陶器碗（417）、磁器皿（418･419）、磁器碗（420･423･429）、磁器鉢（433）と皿か碗（434）である。瀬戸･美濃産は陶器皿（421）、磁器皿（424）、陶器碗（425）で、器種不明（440･441）である。大堀相馬産は、小片が多く、器種が判別しづらい。磁器碗（427）、磁器皿（430）、磁器碗か皿（428）と器種不明の磁器（422・427）がある。東北在地系の陶磁器は２点（431・432）である。産地不明のものは磁器皿（435・436）や磁器碗（437・439・442・443）が多い。

製作年代は18 ～ 19世紀の範疇に収まる。６～ 11号土坑（近世墓）の年代とは合致しないので、遺構群との関連性はない遺物と言える。　（須原）



第53図　遺構外出土遺物（近世）

第６表　遺物観察表（近世）

銭貨

掲載番号	図版番号	写図番号	出土位置・層位	銭貨名	初鋳年（鋳造年）	材質	残存状態	直径（mm）	孔径（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	備考
406	52	29	６号土坑 埋土下位	寛永通宝（古寛永）	1639～1659	銅	完形	24.52	5.77	1.11	2.13	
407	52	29	６号土坑 埋土下位	寛永通宝（古寛永）	1639～1659	銅	完形	24.38	5.63	1.33	2.48	
408	52	29	６号土坑 埋土下位	寛永通宝（古寛永）	1639～1659	銅	完形	23.66	5.30	1.07	2.61	
409	52	29	６号土坑 埋土下位	寛永通宝（古寛永）	1639～1659	銅	完形	24.71	5.55	1.53	3.16	
410	52	29	８号土坑 底面	寛永通宝（古寛永）	1639～1659	銅	縁辺欠損	22.96	5.49	1.17	(2.06)	
411	52	29	８号土坑 底面	寛永通宝（古寛永）	1639～1659	銅	完形	24.63	4.94	1.48	2.49	
412	52	29	８号土坑 底面	寛永通宝（古寛永）	1639～1659	銅	表面剥離 縁辺欠損	24.20	5.55	1.39	(2.01)	
413	52	29	８号土坑 底面	寛永通宝（古寛永）	1639～1659	銅	完形	23.92	5.58	1.36	3.09	
414	52	29	９号土坑 埋土中	不明（寛永通宝か）	－	銅	完形	24.82	5.09	1.27	10.99（3枚分）	3枚が癒着している
415	52	29	９号土坑 埋土中	寛永通宝（古寛永）	1639～1659	銅	縁辺欠損	24.70	5.06	1.26	(3.25)	
416	52	29	９号土坑 埋土中	寛永通宝（古寛永）	1639～1659	銅	体部に小孔	24.12	5.56	1.09	(2.35)	

陶磁器

掲載番号	図版番号	写図番号	出土位置・層位	器種・種別	釉土色調	製作地	製作年代	備考
417	53	29	ⅠA5b Ⅰ～Ⅱ層	陶器 椀	白	肥前	18世紀	青白釉
418	53	29	ⅠB6b Ⅰ層	磁器 皿	白	肥前	18世紀	染付
419	53	29	ⅡA8i Ⅱ～Ⅲ層	磁器 皿	白	肥前	18世紀	染付
420	53	29	ⅠA6c Ⅰ層	磁器 椀	白	肥前	18世紀	染付
421	53	29	ⅡB3d Ⅱ～Ⅲ層	陶器 皿	白	瀬戸・美濃	18～19世紀	
422	53	29	ⅠB6b Ⅰ層	磁器 不明	白	大堀相馬	18世紀	灰釉？
423	53	29	ⅠA7b Ⅰ層	磁器 椀	白	肥前	18世紀	染付
424	53	29	ⅠA4f Ⅱ層～Ⅲ層	磁器 皿	白	瀬戸・美濃	18世紀	緑色の釉
425	53	29	ⅡA5i Ⅰ層	陶器 椀	白	瀬戸・美濃	18世紀	鉄釉
426	53	29	4号住居 埋土	磁器 椀	白	大堀相馬	18～19世紀	
427	53	29	ⅡB1b Ⅰ層	磁器 不明	白	大堀相馬	18～19世紀	
428	53	29	ⅠA5e Ⅱ～Ⅲ層	磁器 椀か皿	白	大堀相馬	18～19世紀	
429	53	29	ⅡA6h Ⅰ層	磁器 椀	白	肥前	18～19世紀	染付
430	53	29	ⅠB6b Ⅰ層	磁器 皿	白	大堀相馬	19世紀	
431	53	29	ⅠC4e Ⅰ層	磁器 椀	白	東北在地	19世紀	
432	53	29	ⅡA7i Ⅰ層	陶器 皿	白	東北在地	18～19世紀	
433	53	29	ⅡD3a Ⅰ層	磁器 鉢	白	肥前	19世紀	染付
434	53	29	ⅡB4a 撹乱土	磁器 皿・椀	白	肥前	19世紀	染付
435	53	29	ⅡB4a 撹乱土	磁器 皿	白			
436	53	29	2号住居 床面直上	磁器 皿	白	不明	19世紀	染付
437	53	29	ⅡB5a Ⅰ層	磁器 椀	白	不明	19世紀	染付
438	53	29	ⅡB2d Ⅱ～Ⅲ層	陶器 皿	白	不明	18～19世紀	
439	53	29	ⅡB1b Ⅰ層	磁器 椀or瓶	白	不明	近代	染付
440	53	29	ⅡB2c Ⅱ～Ⅲ層	陶器 不明	白	瀬戸・美濃	不明	鉄釉
441	53	29	ⅡB4c Ⅱ～Ⅲ層	陶器 不明	白	瀬戸・美濃	不明	鉄釉
442	53	29	ⅡB2c Ⅱ～Ⅲ層	磁器 椀	白	不明	近代	染付、443と同一個体
443	53	29	ⅡB2c Ⅱ～Ⅲ層	磁器 椀	白	不明	近代	染付、442と同一個体

Ⅵ 自然科学分析

1 川半貝塚における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

（1） 測定対象試料

川半貝塚は、岩手県下閉伊郡山田町船越第22地割ほか（北緯39° 26′ 58″、東経142° 00′ 26″）に所在し、海岸（山田湾）から約200mの東向き緩斜面地（標高24 ～ 30m）に立地する。測定対象試料は、竪穴住居跡等から出土した炭化物９点である（表１）。

（2） 測定の意義

試料が出土した遺構や層の時期を推定するために、他の出土遺物とともに年代測定結果を検討する。

（3） 化学処理工程

1 メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
2 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
3 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。
4 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
5 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
6 グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（4） 測定方法

加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$）、^{14}C濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（5） 算出方法

1 $\delta^{13}C$は、試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
2 ^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代は$\delta^{13}C$によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

3　pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。

4　暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下１桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

（6）測　定　結　果

測定結果を表１、２に示す。

試料9点の^{14}C年代は、6490±30yrBP（試料No.4）から1190±20yrBP（試料No. 5）の間にある。暦年較正年代（1σ）は、９点のうち縄文時代に属する８点を古いほうから見るとNo. 4、９が早期末葉頃、No. 7が前期初頭頃、No. 2、３が前期前葉頃、No. 6が中期中葉頃、No. 1が中期中葉から後葉頃、No. 8が後期中葉頃に相当する（小林編2008）。他の８点より大幅に新しいNo. 5は、1172～1070cal BP（778～880cal AD）の間に３つの範囲で示される。

試料の炭素含有率はすべて60％を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表１　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C (‰)	δ^{13}C 補正あり	
					(AMS)	Libby Age（yrBP）	pMC (%)
IAAA-151686	No.1	5号住居跡　段下げブロック③埋土中	炭化物	AAA	-26.19 ± 0.35	4,110 ± 30	59.99 ± 0.21
IAAA-151687	No.2	3号住居跡　焼土４内	炭化物	AAA	-26.90 ± 0.55	5,300 ± 30	51.72 ± 0.19
IAAA-151688	No.3	2号住居跡　焼土１内	炭化物	AAA	-26.22 ± 0.37	5,320 ± 30	51.54 ± 0.18
IAAA-151689	No.4	1号住居跡　東壁際　埋土下位	炭化物	AaA	-24.90 ± 0.43	6,490 ± 30	44.56 ± 0.17
IAAA-151690	No.5	2号土坑　埋土下位	炭化物	AAA	-24.85 ± 0.51	1,190 ± 20	86.25 ± 0.27
IAAA-151691	No.6	1号焼土　埋土下位	炭化物	AaA	-24.48 ± 0.60	4,380 ± 30	57.96 ± 0.21

IAAA-151692	No.7	1号土坑　2層	炭化物	AAA	**-25.34 ± 0.60**	**5,950 ± 30**	**47.66 ± 0.18**
IAAA-151693	No.8	基本土層　Ⅲ層	炭化物	AAA	**-28.58 ± 0.59**	**3,490 ± 30**	**64.78 ± 0.22**
IAAA-151694	No.9	基本土層　Ⅳb 層	炭化物	AAA	**-25.71 ± 0.47**	**6,370 ± 30**	**45.26 ± 0.17**

[#7631]

表2　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C未補正値、暦年較正用14C年代、較正年代）

測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-151686	4,130 ± 30	59.84 ± 0.21	4,105 ± 28	4797calBP - 4763calBP (17.6%) 4628calBP - 4530calBP (50.6%)	4813calBP - 4755calBP (23.3%) 4709calBP - 4666calBP (11.1%) 4659calBP - 4522calBP (61.0%)
IAAA-151687	5,330 ± 30	51.52 ± 0.18	5,295 ± 29	6176calBP - 6151calBP (14.6%) 6117calBP - 6077calBP (23.7%) 6068calBP - 6044calBP (13.4%) 6027calBP - 5999calBP (16.5%)	6184calBP - 5990calBP (95.4%)
IAAA-151688	5,340 ± 30	51.41 ± 0.18	5,324 ± 28	6182calBP - 6173calBP (5.1%) 6156calBP - 6110calBP (26.8%) 6080calBP - 6020calBP (36.3%)	6191calBP - 5998calBP (95.4%)
IAAA-151689	6,490 ± 30	44.57 ± 0.17	6,492 ± 30	7437calBP - 7414calBP (37.3%) 7389calBP - 7373calBP (10.8%) 7355calBP - 7333calBP (20.1%)	7461calBP - 7408calBP (47.8%) 7402calBP - 7324calBP (47.6%)
IAAA-151690	1,190 ± 20	86.27 ± 0.25	1,188 ± 24	1172calBP - 1158calBP (12.1%) 1149calBP - 1106calBP (34.7%) 1096calBP - 1070calBP (21.4%)	1181calBP - 1056calBP (94.1%) 1020calBP - 1012calBP (1.3%)
IAAA-151691	4,370 ± 30	58.02 ± 0.19	4,381 ± 28	4970calBP - 4876calBP (68.2%)	5039calBP - 4996calBP (14.5%) 4984calBP - 4863calBP (80.9%)
IAAA-151692	5,960 ± 30	47.63 ± 0.16	5,953 ± 29	6832calBP - 6818calBP (8.5%) 6798calBP - 6739calBP (59.7%)	6882calBP - 6868calBP (2.4%) 6863calBP - 6715calBP (90.1%) 6705calBP - 6691calBP (2.5%) 6682calBP - 6679calBP (0.4%)
IAAA-151693	3,550 ± 20	64.30 ± 0.20	3,488 ± 26	3827calBP - 3788calBP (27.9%) 3777calBP - 3716calBP (40.3%)	3837calBP - 3692calBP (94.9%) 3656calBP - 3654calBP (0.5%)
IAAA-151694	6,380 ± 30	45.19 ± 0.16	6,369 ± 29	7321calBP - 7262calBP (68.2%)	7415calBP - 7353calBP (18.0%) 7335calBP - 7253calBP (77.4%)

［参考値］

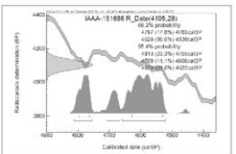
文献

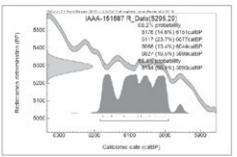
Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

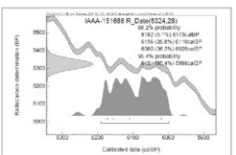
小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

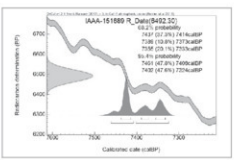
Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

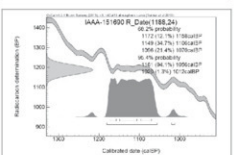
Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

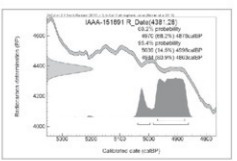


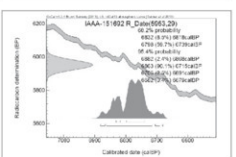


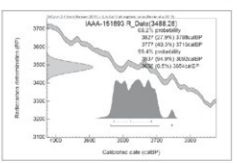


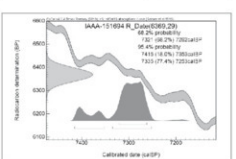












[図版]暦年較正年代グラフ（参考）

2　川半貝塚における火山灰の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県下閉伊郡山田町に所在する川半貝塚は、三陸海岸南部にある山田湾の南東岸を構成する船越半島中部の海岸に近い緩斜面上に位置する。発掘調査では、縄文時代前期および中期とされる竪穴住居跡などの遺構が検出され、それらに伴う石器や土器などの遺物が出土している。

調査区内には斜面を下る沢跡とそれを埋積する黒色土層が確認され、その黒色土層中には火山灰と考えられる堆積物が見出された。本報告では、その堆積物について、構成する砕屑物の特徴を明らかにし、特に重鉱物組成と火山ガラス比分析、火山ガラスの屈折率測定およびEPMA分析による火山ガラスの化学組成の諸特性を調べることにより、火山灰の同定を行う。その結果をもとに、沢跡の埋積時期について検証する。

1　試　　料

試料は、調査区内で検出された沢を埋積する黒色土層断面より採取された。黒色土層のⅣa層中に、明黄褐色を呈する厚さ数cm程度の砂質シルトのブロックが、層位的な広がりをもって挟在している状況が現地で確認されている。

試料は、試料1と試料2の2点が採取されているが、テフラと考えられる明黄褐色部が比較的多い試料2を分析対象とした。

2　分　析　方　法

(1) テフラの検出同定

試料約20ｇを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

(2) 重鉱物・火山ガラス比分析・屈折率測定

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、上述の3タイプに分類した。なお、火山ガラス比における「その他」は、主に石英および長石などの鉱物粒と変質等で同定の不可能な粒子を含む。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標と

する。屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

(3) EPMA分析

上記前処理試料を偏光顕微鏡を用い、火山ガラスのみを手選し、これをエポキシ樹脂を用いてスライドグラス上に包埋し、#3000カーボランダムで研磨して1μmのダイヤモンドペーストにて鏡面研磨した薄片を作成する。

この薄片を用いて以下の分析装置および条件により、エネルギー分散型X線マイクロアナライザー（EDX）を用い、火山ガラスの主成分を分析する.

使用機材：SEM:HITACHI SU1510　EDX:HORIBA EMAXEvolution EX-270（検出器:X-MAX80mm2）

加速電圧：15kV

試料電流：0.3nA.

ビーム径：4μm四方の範囲を約150nmのビーム径にて走査させて測定.

ライブタイム：50sec.

主成分組成計算方法：ZAF法を応用

なお、スタンダードには高純度人工酸化物結晶（純度99.99%以上のSiO_2、Al_2O_3、TiO_2、MnO、MgO）、純度99.99%以上の単結晶NaCl、KCl、CaF_2を用いた。これをアメリカ標準局NIST620ガラス、ATに含まれる火山ガラス、Aso-4テフラに含まれる普通角閃石、飯縄西山テフラに含まれるカミングトン閃石を用いてチェックする。また、ASTIMEX,Taylorなどのいわゆるの EPMA用標準物質などでもその精度をチェックした。ワーキングスタンダードにはATテフラの火山ガラスを用い、測定時毎に値をチェックする。

3．結　　果

(1) テフラの検出同定

結果を表1に示す。処理後の砂分中からは、少量の火山ガラスが検出された。火山ガラスは、径0.3mm程度、白色を呈し、スポンジ状に細かく発泡している。

砂分の主体は、白色または無色の石英や長石類の鉱物片であるが、黒色や緑色を呈する輝石類の鉱物片も比較的多く含まれる。さらに、細礫径の花崗岩類の岩石片や金色に風化した黒雲母片なども混在する。

(2) 重鉱物・火山ガラス比分析・屈折率測定

結果を表2、図1に示す。重鉱物組成は斜方輝石が最も多く、他に単斜輝石、角閃石および不透明鉱物が同量程度にそれぞれ少量含まれる。火山ガラス比は少量の軽石型と微量の中間型とが検出され、バブル型は認められない。

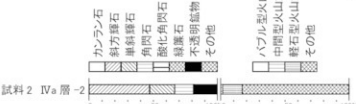


図1. 重鉱物組成および火山ガラス比

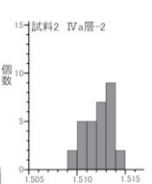


図 2. 火山ガラスの屈折率

表1．テフラ分析結果

層名	試料番号	スコリア	火山ガラス		軽石	備考
		量	量	色調・形態	量	
Ⅳa-2	2	－	＋	cl・pm	－	花崗岩類岩片、長石・石英鉱物片 黒雲母・輝石類鉱物片

凡例　－:含まれない．(+):きわめて微量．＋:微量．＋＋:少量．＋＋＋:中量．＋＋＋＋:多量．
cl:無色透明．br:褐色．bw:バブル型．md:中間型．pm:軽石型．

表2．重鉱物・火山ガラス比分析結果

試料名	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	緑簾石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
試料2　Ⅳa層-2	118	49	36	2	44	1	250	0	4	38	208	250

火山ガラスの屈折率を図2に示す。レンジはn1.509-1.514、モードはn1.513付近である。

(3) EPMA分析

結果を表3に示す。測定値は水分を除いて合計100%になるように再計算した値も示す。各主要元素の平均値は、SiO_2が75.47%、TiO_2が0.49%、Al_2O_3が13.19%、FeOが2.23%、MnOが0.12%、MgOが0.54%、CaOが2.52%、Na_2Oが4.10%、K_2Oが1.33%である。

これらの値から、SiO_2を横軸とし、それ以外の各元素を縦軸とした散布図を作成し、図3に示す。

4　考　　察

テフラの検出同定により確認された試料中の砂分は、花崗岩類の細礫や黒雲母片などが確認されたことから、その多くは貝塚の立地する船越半島を構成している白亜紀の花崗岩類の風化砕屑物に由来すると考えられる。これは沢を埋積する黒色土の母材の主体をなしていると考えられる。一方、少量ながらも検出された火山ガラスおよび重鉱物組成において主体を占める輝石類の鉱物片は、花崗岩類に由来するものではなく、火山灰の降下堆積物に由来すると考えられる。現地で観察された層相も考慮すれば、試料は軽石型の火山ガラスと両輝石の遊離結晶からなる火山灰（テフラ）の降下堆積物が、降下後に土壌表層における撹乱を受けながらも残存したものであると考えられる。

上述した火山ガラスの形態と屈折率および両輝石を主体とする重鉱物組成、さらには川半貝塚の地理的位置と黒色土層の層位年代と、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状（町田ほか(1984)、Arai et al.（1986）、町田・新井（2003）など）との比較から、試料は、十和田中掫テフラ（To-Cu:早川,1983;Hayakawa,1985）の降下堆積物に由来すると考えられる。火山ガラスの化学組成については、青木・町田（2006）に記載されたTo-Cu の値を示す（表4）。この値を図3～6に適用すると概ね今回の試料の測定値と分布域が重複する。このことは、今回の試料の火山ガラスがTo-Cu に由来することを支持していると考えてよい。

なお、To-Cuの噴出年代は、暦年で6,200年前とされている（工藤・佐々木、2007）ことから、試料の採取された沢の埋積もこの頃であったことが推定される。

引用文献

青木かおり・町田　洋,2006,日本に分布する第四紀後期広域テフラの主元素組成-K_2O-TiO_2図によるテフラの識別,地質調査研究報告,57,239-258.

Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyauchi,T.・Soda,T.・Yamagata,K,1986,Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan Ⅱ－Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido－,Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21,223-250.

古澤　明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別,地質学雑誌,101,123-133.

早川由紀夫,1983,十和田火山中掘テフラ層の分布、粒度組成、年代,火山第2集,28,263-273.

Hayakawa,Y.,1985,Pyroclastic Geology of Towada Volcano. Bulletin of The Earthquake Reserch Institute University of Tokyo,vol.60 ,507-592.

工藤　崇・佐々木　寿,2007,十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年,地学雑誌,116,653-663.

町田　洋・新井房夫,2003,新編　火山灰アトラス,東京大学出版会,336p.

町田　洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦,1984,テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－,渡辺直経(編)古文化財に関する保存科学と人文・自然科学,同朋舎,865-928.

表３　火山ガラスのEPMA分析結果（科学組成）

point No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	平均値	標準偏差
SiO_2	72.41	72.16	73.77	71.99	70.69	71.76	69.58	73.31	70.73	69.54	69.42	70.36	70.52	71.06	71.05	SiO_2	71.22	1.33
TiO_2	0.44	0.49	0.41	0.47	0.47	0.43	0.41	0.55	0.52	0.50	0.40	0.51	0.43	0.48	0.48	TiO_2	0.47	0.04
Al_2O_3	12.94	12.95	12.23	12.92	12.05	12.54	12.49	11.47	12.63	12.48	12.40	12.12	11.99	12.64	12.81	Al_2O_3	12.44	0.41
FeO	2.14	2.24	1.83	2.16	1.73	2.05	2.11	1.62	2.30	2.38	2.08	2.18	2.01	2.31	2.41	FeO	2.10	0.23
MnO	0.14	0.11	0.17	0.22	0.09	0.16	0.08	0.16	0.04	0.08	0.00	0.07	0.11	0.20	0.14	MnO	0.12	0.06
MgO	0.56	0.59	0.33	0.56	0.43	0.52	0.52	0.24	0.57	0.53	0.60	0.55	0.49	0.55	0.58	MgO	0.51	0.10
CaO	2.58	2.66	2.01	2.66	2.09	2.37	2.53	1.71	2.55	2.49	2.53	2.20	2.20	2.64	2.45	CaO	2.38	0.28
Na_2O	4.08	4.01	3.92	3.98	3.80	4.04	3.78	3.70	3.79	3.82	3.80	3.84	3.73	3.87	3.89	Na_2O	3.87	0.11
K_2O	1.25	1.23	1.39	1.15	1.36	1.21	1.13	1.49	1.24	1.19	1.21	1.28	1.33	1.22	1.21	K_2O	1.26	0.10
Total	96.54	96.44	96.06	96.11	92.71	95.08	92.63	94.25	94.37	93.01	92.44	93.11	92.81	94.97	95.02		94.37	
(合計が100%になるように補正)																		
point No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	平均値	標準偏差
SiO_2	75.01	74.82	76.80	74.90	76.25	75.47	75.12	77.78	74.95	74.77	75.10	75.57	75.99	74.82	74.77	SiO_2	75.47	0.88
TiO_2	0.46	0.51	0.43	0.49	0.51	0.45	0.44	0.58	0.55	0.54	0.43	0.55	0.46	0.51	0.51	TiO_2	0.49	0.05
Al_2O_3	13.40	13.43	12.73	13.44	13.00	13.19	13.48	12.17	13.38	13.42	13.41	13.02	12.92	13.31	13.48	Al_2O_3	13.19	0.37
FeO	2.22	2.32	1.91	2.25	1.87	2.16	2.28	1.72	2.44	2.56	2.25	2.34	2.17	2.43	2.54	FeO	2.23	0.24
MnO	0.15	0.11	0.18	0.23	0.10	0.17	0.09	0.17	0.04	0.09	0.00	0.08	0.12	0.21	0.15	MnO	0.12	0.06
MgO	0.58	0.61	0.34	0.58	0.46	0.55	0.56	0.25	0.60	0.57	0.65	0.59	0.53	0.58	0.61	MgO	0.54	0.11
CaO	2.67	2.76	2.09	2.77	2.25	2.49	2.73	1.81	2.70	2.68	2.74	2.36	2.37	2.76	2.58	CaO	2.52	0.29
Na_2O	4.23	4.16	4.08	4.14	4.10	4.25	4.08	3.93	4.02	4.11	4.11	4.12	4.02	4.07	4.09	Na_2O	4.10	0.08
K_2O	1.29	1.28	1.45	1.20	1.47	1.27	1.22	1.58	1.31	1.28	1.31	1.37	1.43	1.28	1.27	K_2O	1.33	0.10
Total	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00		100.00	

表４　To－Cuの火山ガラスの科学組成（青木・町田,2006）

point No.						平均値	標準偏差
SiO_2	75.36	74.89	74.86	74.48	SiO_2	74.90	0.36
TiO_2	0.43	0.47	0.47	0.49	TiO_2	0.47	0.03
Al_2O_3	13.65	13.97	14.00	14.09	Al_2O_3	13.93	0.19
FeO	2.35	2.26	2.27	2.37	FeO	2.31	0.06
MnO	0.11	0.10	0.09	0.09	MnO	0.10	0.01
MgO	0.52	0.54	0.54	0.55	MgO	0.54	0.01
CaO	2.35	2.48	2.49	2.56	CaO	2.47	0.09
Na_2O	4.01	3.98	3.96	4.03	Na_2O	4.00	0.03
K_2O	1.22	1.31	1.31	1.34	K_2O	1.30	0.05
Total	100.00	100.00	99.99	100.00		100.00	

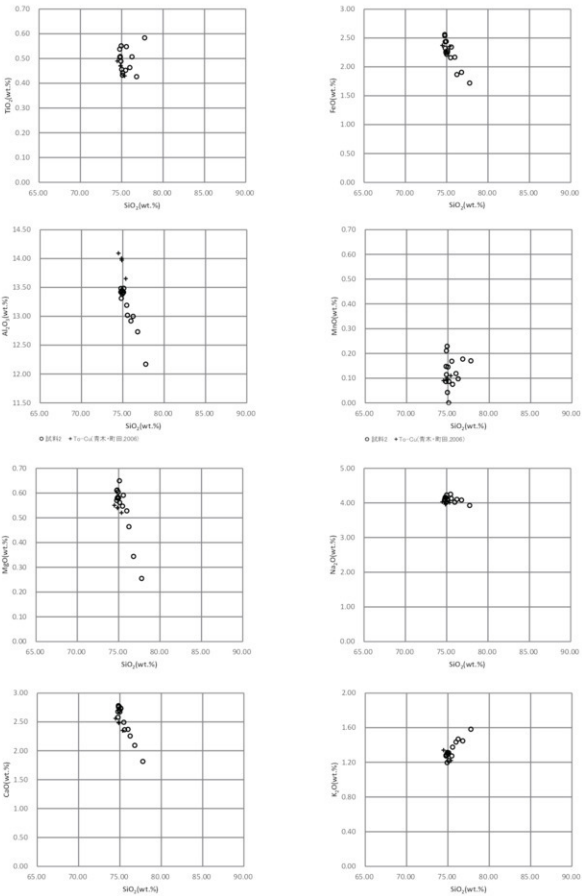
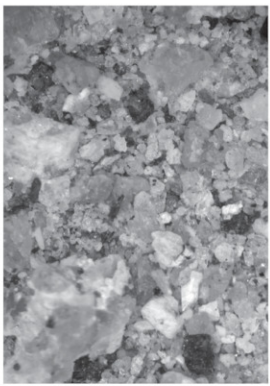
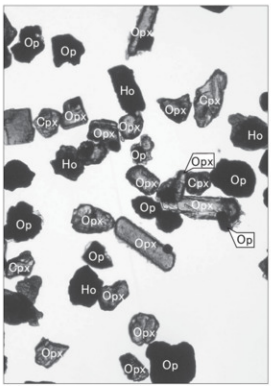


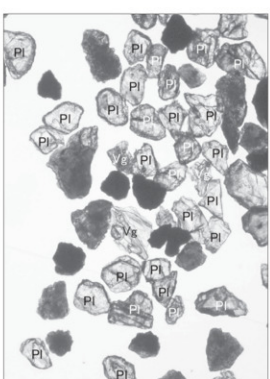
図3　火山ガラスの化学組織散布図



1.砂分の状況(試料2　Ⅳa層-2)



2.重鉱物(試料2　Ⅳa層-2)



3.火山ガラス(試料2　Ⅳa層-2)

Opx:斜方輝石．Cpx:単斜輝石．Ho:角閃石．Op:不透明鉱物．
Vg:火山ガラス．Pl:斜長石．

2.0mm　0.5mm
1　2.3

図版1　砂分の状況・重鉱物・火山ガラス

3　川半貝塚出土黒曜石製遺物の産地同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県山田町船越に所在する川半貝塚では、縄文時代前期や中期とされる竪穴住居跡、土坑等の遺構や土器、石器等の遺物が検出されている。本分析調査では、縄文時代前期とされる遺物包含層、遺構内から出土した黒曜石製遺物の石材産地に関わる情報を得ることを目的とし、蛍光X線分析装置による測定を行った。

1　試　　料

試料は、川半貝塚より出土した黒曜石のフレイク3点である。試料1、2は縄文時代前期の遺物包含層から、試料3は縄文時代前期とされる土坑（2号土坑）から出土している。各試料の詳細は試料一覧表（表1）に記す。

表1．分析試料一覧

試料No.	出土地点	出土層位	器種
1	IB5f	Ⅲ層	フレイク
2	ⅡA4j	Ⅲ～Ⅳ層	フレイク
3	2号土坑	埋土中	フレイク

2　分　析　方　法

(1) エネルギー分散型蛍光X線分析装置（EDX）による測定

本分析の特徴は、試料の非破壊による測定が可能であり、かつ多元素を同時に分析できることが利点として挙げられる。一方、非破壊分析である以上、測定は試料表面のみが対象となることから、表面が汚れた試料や風化してしまっている試料については試料の洗浄あるいは測定面の選択が必要となる。本分析では試料が貴重な遺物であることから、汚れが少なく、風化が進んでいない面を選択して測定を行うが、表面の風化、汚れが目立つ場合は、メラミンスポンジを用いて洗浄したあと分析を実施している。

本分析で使用した装置は、セイコーインスツルメンツ製エネルギー分散型蛍光X線分析装置（SEA2120L）であり、X線管球はロジウム（Rh）、検出器はSi（Li）半導体検出器である。測定条件は、励起電圧50kV、管電流自動設定（μA）、測定時間300秒、コリメータ（照射径）φ10.0mm、フィルターなし、測定室雰囲気は真空である。測定元素は、Al（アルミニウム）、Si（ケイ素）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Ti（チタン）、Mn（マンガン）、Fe（鉄）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）、Y（イットリウム）、Zr（ジルコニウム）の11元素であり、測定試料全てにおいてマイラー膜（PE2.5μm；ケンブレックス製CatNo107）を介して元素X線強度（cps）を測定した。

(2) 産地推定方法

産地推定は、望月（2004など）による方法に従い、測定結果（元素X線強度（cps））から、5つの判別指標値を求める。5つの判別指標値は、Rb分率|Rb×100/（Rb＋Sr＋Y＋Zr）|、Sr分率|Sr×100/（Rb＋Sr＋Y＋Zr）|、Zr分率|Zr×100/（Rb＋Sr＋Y＋Zr）|、Mn×100/Fe、Log（Fe/K）である。

一方、産地推定に必要な原産地の資料に関しては、望月（2004）等で用いられている原産地試料の分析データーを使い、原産地判定用資料を作成する。産地推定に用いた黒曜石原産地を図1に示す。

原産地試料の各分析データーを、Rb分率とMn×100/Fe、Sr分率－Log（Fe/K）についてグラフ化する。グラフの産状ならびに二次元正規分布密度関数の結果から、原産地を元にした判別群を設定

する。その名称ならびに判別群と原産地との関係を表２に示す。

各判別群について、二次元正規分布密度関数から計算した、重心より2σ（約95%）の範囲を示す楕円を98ページのグラフに書く（原産地試料の各分析データーは図が煩雑になるため割愛する）。これに、遺跡出土試料の分析結果を重ね合わせると、各判別群の範囲楕円内に収まるかどうかが視覚的にわかるため、産地推定の指標の一つとなる。

表２．黒曜石原産地試料一覧

大分類	中分類	判別群	記号	該当する原産地
北海道	白滝	白滝1群	白滝1	明石山頂、八号沢、白滝山頂、明石山頂
北海道	白滝	白滝2群	白滝2	八号沢、ホロカ、黒曜の沢、でんぷん沢、あじさいの滝
北海道	赤井川	赤井川	赤井川	赤井川、土木川、曲川
北海道	豊浦	豊浦	豊浦	豊泉
北海道	置戸	置戸1群、2群	置戸1，置戸2	置戸山系
北海道	十勝	三股	三股	十勝三股、十三の沢、タウシュベツ川、中阿寒
北海道	名寄	名寄	名寄	名寄布川
北海道	旭川	旭川	旭川	高砂台・雨粉台・春光台
北海道	ケショマップ	ケショマップ	ケショ	ケショマップ川
東北	深浦	深浦	深浦	岡崎浜、深浦公園、目和見、六角沢、八森山
東北	岩木山	出来島	出来島	出来島
東北	男鹿	男鹿1群	男鹿1	金ヶ崎、脇本
東北	男鹿	男鹿2群	男鹿2	脇本
東北	月山	月山1群	月山1	西川町志津、朝日町田代沢など
東北	月山	月山2群	月山2	鶴岡市今野川、鶴岡市大網川
東北	北上	北上1群	北上1	水沢折居、花巻日形田ノ沢、雫石小赤沢
東北	北上	北上2群	北上2	水沢折居、花巻日形田ノ沢、雫石小赤沢
東北	北上	北上3群	北上3	水沢折居
東北	湯ノ倉	湯ノ倉	湯ノ倉	湯ノ倉
東北	秋保	秋保1群	秋保1	秋保土蔵
東北	秋保	秋保2群	秋保2	秋保土蔵
東北	色麻	色麻	色麻	色麻町根岸
東北	塩竈	塩竈港群	塩竈	塩竈市塩竈漁港
東北	小泊	小泊	小泊	青森小泊村折腰内
関東	天城	柏峠1群、2群	柏峠1，柏峠2	天城柏峠
関東	箱根	畑宿	畑宿	箱根畑宿
関東	箱根	鍛冶屋	鍛冶屋	箱根鍛冶屋
関東	箱根	黒岩橋	黒岩橋	箱根黒岩橋
関東	箱根	上多賀	上多賀	箱根上多賀
関東	箱根	芦ノ湯	芦ノ湯	箱根芦ノ湯
関東	神津島	恩馳島	恩馳島	恩馳島、長浜
関東	神津島	砂糠崎	砂糠崎	砂糠崎、長浜
関東	高原山	高原1群	高原1	甘湯沢、桜沢
関東	高原山	高原2群	高原2	七尋沢
信州	霧ヶ峰	男女倉1群	男女1	ぶどう沢、牧ノ沢、高松沢、本沢下
信州	霧ヶ峰	男女倉2群	男女2	ぶどう沢、牧ノ沢
信州	霧ヶ峰	男女倉3群	男女3	ぶどう沢、牧ノ沢、高松沢、本沢下
信州	霧ヶ峰	鷹山系	鷹山	星鷹峠、鷹山
信州	霧ヶ峰	西霧ヶ峰系	星ヶ塔	星ヶ塔、星ヶ台
信州	霧ヶ峰	和田峠1群	和田1	古峠、土屋橋北
信州	霧ヶ峰	和田峠2群	和田2	丁子御領、芙蓉パーライト、鷲ヶ峰
信州	霧ヶ峰	和田峠3群	和田3	小深沢、芙蓉パーライト、新和田トンネル、土屋橋北、土屋橋東、18地点、24地点、26地点、丁子御領、鷲ヶ峰
信州	霧ヶ峰	和田峠4群	和田4	小深沢、芙蓉パーライト、新和田トンネル、土屋橋北、土屋橋西、土屋橋東、18地点、24地点、26地点、丁子御領、鷲ヶ峰
信州	霧ヶ峰	和田峠5群	和田5	24地点、25地点、26地点、小深沢
信州	霧ヶ峰	和田峠6群	和田6	小深沢、芙蓉パーライト、24地点、25地点、26地点、土屋橋西、土屋橋東
信州	霧ヶ峰	和田峠7群	和田7	東俣屋、芙蓉パーライト、古峠、丁子御領、鷲ヶ峰、土屋橋北
信州	霧ヶ峰	和田峠8群	和田8	25地点、26地点、土屋橋東
信州	北八ヶ岳	横岳系双子池	双子池	双子池
信州	北八ヶ岳	横岳系亀甲池	亀甲池	亀甲池　擂鉢池
信州	北八ヶ岳	冷山・麦草系	麦草系	冷山、麦草峠、双子池、渋ノ湯、八ヶ岳7、八ヶ岳9、長門美しの森
信州	北八ヶ岳	中ツ原	中ツ原	中ツ原(遺跡試料)
東海・北陸	新潟	新発田	新発田	新発田板山
東海・北陸	新潟	新津	新津	新津金津

一方、各判別群の５つの判別指標値について、基本統計量（平均値や分散、共分散など）を求める。さらに、各判別群の重心と遺跡出土試料とのマハラノビス平方距離を計算する。マハラノビス平方距離による判別は、先に述べた５つの判別指標値を使う方法（望月2004など）と、基本的にZr分率を除くグラフに使った４つの判別指標値を使うが、群間の判別が難しい場合にZr分率を加える方法（明治大学古文化財研究所2009など）がある。今回は、４成分、５成分双方の結果を掲載するが、判別には前述したグラフとの親和性などから、後者の方法を参考にする。測定試料と各判別群全てについて、４成分、５成分のマハラノビス平方距離を求め、測定試料に近いものから３判別群を表に示す。これらについてカイ二乗検定を行い、99.5%の範囲に入った場合を「True」、入らなかった場合を「False」とする。

図１．黒曜石産地一覧（淡色の産地は今回の判定対象外の地域）

３　結果と考察

各試料の詳細を表２に、元素Ｘ線強度（cps）および判別指標値を表３に示す。また、Rb分率とMn×100/Fe、Sr分率－Log（Fe/K）について、原産地試料の重心から2σ（95%）の範囲を記したグラフに、各試料の結果を重ね合わせた図を図２・３に記す。表４には、測定試料に近いものから３原産地分のマハラノビス平方距離を示し、これらについてカイ二乗検定を行なった結果を示す。この結果、No. １が湯ノ倉に、No. ２が北上系に属する。No. ３はカイ二乗検定の結果からは外れる（False）が湯ノ倉に近い。しかしながら、先にも述べたように、非破壊での蛍光X線分析では、表面部分のみで測定するため風化や付着物、表面の形状などの影響を受けやすく、値のばらつきが大きくなる。また、この試料には、類似する原産地エリアは他にみあたらない。さらに、マハラノビス距離では第二候補以下と大きくかけ離れている。以上の点を考慮すると、カイ二乗検定でFalseであったが、No. ３の原産地は湯ノ倉とみて問題ないと思われる。

図２・３に示すように、分析対象とした黒曜石のフレイク３点の産地は、湯ノ倉２点、北上系１点と推定された。比較的近い産地で採取された黒曜石を利用していたことが考えられる。今後は周辺の遺跡を含めて同様の分析を行い、石材産地に関わる情報を蓄積し、本遺跡が位置する地域の縄文時代における石材利用について検討を続けることが望まれる。

引用文献

明治大学古文化財研究所,2009.蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定　-基礎データー集1-.明治大学古文化財研究所,294p.

望月明彦,2004.第5節　和野Ⅰ遺跡出土黒曜石製石鏃の石材原産地分析.岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書452集　和野Ⅰ遺跡発掘調査報告書,476-480.

表3．スペクトル強度と判別指標

No.	強度(cps)											判別指標				
	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb 分率	Sr 分率	Zr 分率	Mn*100 /Fe	log (Fe/K)
1	64.01	500.61	22.47	51.33	5.95	8.50	276.38	3.12	15.74	4.51	21.59	6.94	35.02	48.02	3.08	1.090
2	53.13	455.05	36.63	24.40	4.74	6.95	145.39	6.67	7.91	4.61	19.11	17.41	20.65	49.90	4.78	0.599
3	54.45	418.25	22.09	46.18	5.99	8.70	275.58	4.03	18.41	4.60	25.81	7.63	34.84	48.84	3.16	1.096

表4．黒曜石判定結果

	4成分									5成分								
	第1候補			第2候補			第3候補			第1候補			第2候補			第3候補		
No.	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定
1	湯ノ倉	18.0	F	鍛冶屋	45.4	F	畑宿	108.1	F	湯ノ倉	18.7	F	鍛冶屋	47.9	F	畑宿	116.7	F
2	北上2	0.6	T	北上1	26.2	F	置戸2	132.1	F	北上2	23.6	F	北上1	38.8	F	置戸2	132.1	F
3	湯ノ倉	10.7	T	鍛冶屋	48.6	F	畑宿	97.6	F	湯ノ倉	11.4	T	鍛冶屋	48.6	F	畑宿	116.3	F

距離:マハラノビス平方距離　判定はカイ二乗検定の結果:T(TRUE), F(FALSE)

4　調査員のコメント

今回の調査で出土した3点の黒曜石全てを分析委託した。3点の器種は前述の通り、フレイクである。図化していないが、それぞれの分類や大きさ、重量は下図に示した通りである。

分析結果については、他の石器石材が、遺跡周辺から北上山系で採取できるものに占められている点（第Ⅶ章－1）とあわせて考えても、矛盾しない。

	出土地点・層位	器種	分類	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）
1	ⅠB5f・Ⅲ層	フレイク	Ⅲc	13.26	7.84	3.26	0.20
2	ⅡA4j・Ⅲ～Ⅳ層	フレイク	Ⅳd	9.43	15.48	5.17	0.54
3	2号土坑・埋土中	フレイク	Ⅰb	14.51	16.43	3.91	0.79

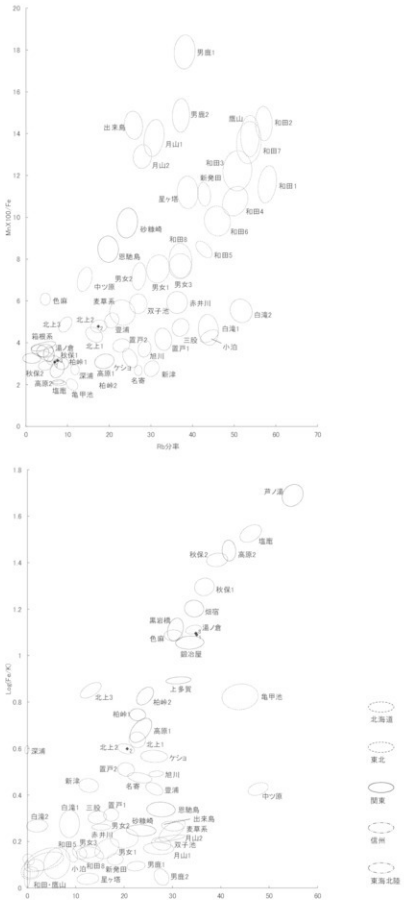


図2．黒曜石産地推定結果

Ⅶ 総　　括

今回、川半貝塚の遺跡推定範囲のうち、東端に相当する範囲を発掘調査した。調査範囲は、標高24～32mを測る、大浦半島山間部から続く比較的緩やかな斜面地である。過去に貝層が確認された地点は、遺跡推定範囲の西側に位置し、海（山田湾）に面した低地であったので、今回の調査範囲は、貝層範囲とは立地環境が異なっている。したがって、調査開始当初から、貝層やそれに伴うもの以外の遺構・遺物がみつかることが想定されていた。

今回の調査で、遺構は、縄文時代の竪穴住居跡７棟（前期初頭から前葉３棟、中期後葉４棟）、土坑5基（前期初頭１基、中期中葉１基など）、焼土遺構２基を検出し、また近世墓６基も見つかっている。遺物は、縄文時代初頭から前葉、中期初頭、中葉から後葉の遺物群が出土し、上記の遺構群にともなうものの他に、調査区東端に形成された包含層からの出土が顕著である。他に陶磁器片や近世墓に伴って銭貨が出土している。

以下、出土した遺物（縄文時代）について概観し、それを踏まえて遺構を時期毎にみていく。

1　出土遺物の検討

（1）縄文土器（前期）

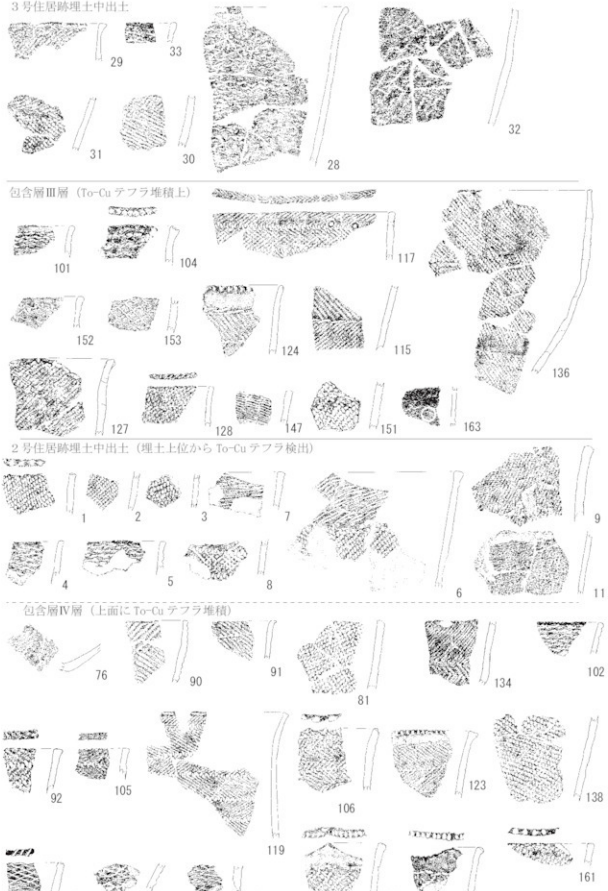
縄文時代前期初頭から前葉、後葉の土器が出土している。

前期初頭から前葉の土器群が主体で、今回の調査で最も出土量が多かった。主に２・３号住居跡と遺物包含層のⅢ・Ⅳ層から出土している。なお包含層はⅣa層中から黄褐色火山灰がブロック状で混入する。この火山灰については分析の結果、To-Cuテフラであることが分かっている（第Ⅵ章－２）。したがって包含層はⅣ層がTo-Cuテフラ降下期以前、Ⅲ層はTo-Cu降下期以降に形成されたということができる。また２号住居跡の検出面上でも同様の火山灰ブロックが確認できた一方、３号住居跡には認められない。３号住居跡は後世の削平が激しく、遺構上面が消失している可能性もあるが、このテフラの有無から両住居跡には時期差があり、２号住居跡の方が旧く（To-Cuテフラ降下期以前）、３号住居跡の方が新しい（（To-Cuテフラ降下期以降）と考えている。これらの点を踏まえ、各層から出土した土器群についてみていく（第54図）。

包含層Ⅳ層（第54図下）出土は全て深鉢で、尖底土器（76）も混じる。文様は非結束羽状縄文（90・91・134）、結節回転文（102）、結束羽状縄文（105・106・119・123）、単軸絡条体（140・145・146）、複節縄文（138）が見受けられる。概ね大木２a式やそれ以前と考えられる土器にみられる文様要素を有する一群と言える。なお159・160は口唇部に刻みが巡り、胴部に組紐が施文される土器。また161は口唇部には刻目（押圧文？）が巡り、口縁部に単節縄文（０段多条か）が施文される土器で、白座式の可能性がある。

２号住居跡埋土中（第54図下から２段目）出土もすべて深鉢である。文様は結節回転文（４・５・11）、結束羽状縄文（８）、単節縄文（１・２・７）、複節縄文（６・９）、非結束羽状縄文（３）である。結節回転文など、大木２a式のメルクマールとなる土器が主体となっており、包含層Ⅳ層出土の土器群と概ね同じ様相を呈する。

包含層Ⅲ層（第54図上から２段目）出土は全て深鉢である。文様では、結節回転文（101・104）が見受けられ、包含層Ⅳ層出土や２号住居跡埋土中と共通の土器が出土している。ただ結束羽状縄文



第54図　縄文時代前期初頭から前葉の土器

(115・124) も同様に見受けられるが、口唇部に縄文 (117) や刻み (124) が施文されるなど違いもある。ほかに単節縄文 (127・128)、単軸絡条体 (147)、組紐 (151)、付加条縄文 (136) が確認でき、大木２ｂ式のメルクマールとなるS字状連鎖沈文 (152・153) が見受けられた。また少量であるが、大木３式と考えられる沈線による円文を描いた土器 (163) も出土している。

３号住居跡埋土中 (第52図上段) 出土も深鉢のみである。非結束羽状縄文 (30・31) や結節回転文 (33) は包含層Ⅳ層中や２号住居跡埋土中からも出土しているが、S字状連鎖沈文 (29) が見受けられ、結節回転文でも口縁部から胴部へと及ぶもの (28) がある。

以上４つの地点・層から出土した土器群を見てきた。To-Cuテフラ降下期前後土器については、不明な点が多く、それに伴い大木１～２b式についてもその内容が不明な点が多々あるが、今回の調査で出土した土器群について、分かる範囲で言及するならば、To-Cuテフラ降下期以前は尖底土器や結節回転文が見受けれるため大木２a式とそれ以前の一群と言え (ただし、大木１式の特徴と考えられている「環付末端回転文 (ループ文)」を有する土器は第32図93 １点のみ)、To-Cuテフラ降下期以降は、S字状連鎖沈文などが見受けられるので大木２ｂ式頃の一群、ただし、結節回転文が混じることから、大木２a式も一部含まれている可能性がある、と位置付けられそうである。

（２）縄文土器（中期）

縄文時代中期初頭と中葉から後葉にかけての土器が出土している。

中期初頭は調査区北側の沢跡底面で少量出土している。概ね第35・36図に示した土器がそのほとんどである。すべて深鉢で、第35図117や第36図178・193は球胴形深鉢と考えられる。文様は装飾を施した隆帯や平行沈線によるものが多く、胴部には縄文のみ施文し、結節部分を残す。概ね大木７a式の古段階とされる土器群である。また第36図196 ～ 198は縄文原体押圧文が施文されており、大木７ｂ式の可能性がある。

中期中葉では、２号土坑や包含層Ⅲ層、また竪穴住居跡からも出土している。いずれも小片である。縄文を地文とし、沈線や隆帯で文様を描いており、大木８a式のなかでも新しい段階の一群である。続く大木８ｂ式に比定される土器も包含層Ⅲ層を中心に出土するが、同様に小片が多い。口縁部片で隆帯による渦巻き文に有棘文を伴う土器 (第37図221) や、胴部に隆帯による渦巻文が展開する土器 (第38図235 ～ 243など) が見受けられるので、大木８ｂ式のなかでも古い段階のものから新しい段階の土器まで出土していると言える。

中期後葉では４～６号住居跡や包含層Ⅲ層から出土している。４～６号住居跡は該期に比定される遺構であるが、遺構上面が削平されていることもあり、出土量が極端に少ない。竪穴住居跡出土で明確に該期に比定できる土器は５号住居跡の埋設土器 (第22図52) と６号住居跡埋土中 (第25図69) のみである。ともに区画文 (楕円形) が展開するので大木９式と考える。包含層Ⅲ出土では第40図258・259が大木10式の可能性がある。

（3）石器・石製品

今回の調査で1128点の石器、石製品が出土している。それらの出土位置や層位毎の点数の集計については、すでに第3表で示した。これらの石器の時期については、前述の通り、縄文土器の時期が前期初頭から中期後葉にまで及んでおり、石器もこれらに伴うものと考えられるので、時期幅があると推定される。なお出土点数としては基本土層Ⅳ層出土が最も多く（第3表下）、したがって縄文時代前期初頭～前葉に比定されるものが最も多いと考える。

ここでは第3表の内容を踏まえ、器種組成、石材の組成、器種毎の形態分類に関わる特徴などについてみていく（第55図）。

まず出土点数全体の内訳について、「剥片石器」、「礫石器」、「石核・フレイク」、「石製品」に大別し、各点数をグラフで示した（第55図左上）。グラフから、フレイクが最も多く、全体の5割強を占めていることが分かる。この点のみで考えれば遺跡内で石器製作を行っていたことが想定されるものの、今回の調査では石核が出土していない（第3表）こと、また後述するが第55図下に示したフレイクの細分類別点数の内訳では、かなり偏りがあることなどから、断言はできない。剥片石器と礫石器とでは、剥片石器の方が多く、礫石器の約2倍出土している。

剥片石器と礫石器について、器種毎に点数を算出し、組成比率を円グラフで示した（第55図右上）。敲磨器類が最も多く、石鏃がそれに次いでおり、どちらも全体の約4分の1を占めている。Uフレイク・Rフレイクも多い。一方で他の器種は極端に少ない。また礫石器も敲磨器類以外はさらに少ない傾向にあり、また、みつからなかった器種もある。以上のように、本遺跡から出土した石器群については、一部の器種に偏りがあるものの、縄文時代の集落遺跡から出土する石器群としては、特異性は見受けられない。一部の石器の出土量が少ない点、あるいは確認できない点については、沢跡の崩落などにより流失している可能性も考えられる。

石材について、「剥片石器・フレイク」と「礫石器」に分けて、その内訳を円グラフで示した（第55図中央）。剥片石器・フレイクでは頁岩が圧倒的に多く、全体のほとんどを占めている。この素材となった頁岩は北上山地系である。また頁岩のなかでも珪質頁岩や赤色頁岩といった、希少なものは少ない。またわずかだが凝灰岩といった、あまり剥片石器の石材としては適さないのではないかと考えられるものも見受けられる。黒曜石が3点出土しているが、2点は湯ノ倉系、1点は北上系で（第Ⅵ章－3）、遠方から運ばれた石材ではない。

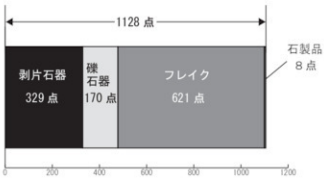
礫石器の石材は、剥片石器と比べると、ばらつきが見受けられる。花崗岩や閃緑岩、はんれい岩が多く、あわせれば全体の6割以上を占めている。これらの石材は遺跡周辺で採取できる石材であり、他の石材も花崗岩や閃緑岩系のものが多い。

次に器種ごとにその特徴をみていく（第55図下）。

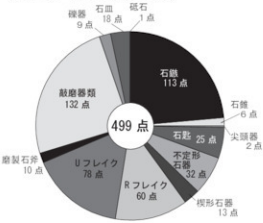
石鏃はⅠ・Ⅱ類（無茎鏃）が多く、Ⅲ類（有茎鏃）やⅣ類（円基鏃）は非常に少ない。石匙はⅠ類（縦型）が圧倒的に多く、Ⅱ類は少ない。石錐はⅠ類が多い。これらの器種の分類は、形態の特徴を基にしており、一部の分類に偏りが見受けられるのは、製作時にある程度の形状の制約があった可能性が考えられる。

楔形石器はⅠ類が多いが、こちらは使用方法の問題で、上下方向のみに打撃が加えられるものが多い。不定形石器はⅠ類が多いが、Ⅱ類も一定量見受けられる。敲磨器類はⅠ類が多いがⅡ・Ⅲ類も一定量見受けられる。不定形石器も敲磨器類も分類ごとに使用方法が違う可能性があるので、使用頻度（点数）はともかく、必要であったといえよう。Uフレイク・Rフレイクは素材となるフレイクの形態

【出土点数の内訳】

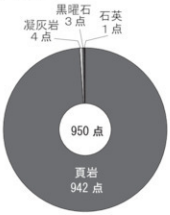


【剥片石器・礫石器の器種組成】

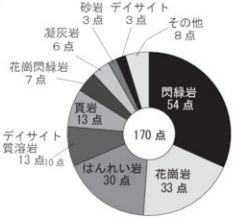


【石材組成】

剥片石器・フレイク



礫石器



※その他…ホルンフェルス2点・細粒花崗閃緑岩2点
・細粒閃緑岩2点・ひん岩1点・安山岩1点

【器種ごとにみる細分別点数】

石鏃

	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	石鏃失敗品	分類不明
点数	48	17	5	2	31	10

石匙

	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	分類不明
点数	19	2	3	1

石錐

	Ⅰ類	Ⅱ類
点数	5	1

楔形石器

	Ⅰ類	Ⅱ類
点数	11	2

不定形石器

	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類
点数	18	8	6

Uフレイク

	Ⅰb類	Ⅰc類	Ⅱb類	Ⅱc類	Ⅲb類	Ⅲc類	Ⅳa類	Ⅳb類	Ⅳc類	Ⅳd類
点数	4	11	3	8	1	10	2	1	12	23

Rフレイク

	Ⅰb類	Ⅰc類	Ⅱb類	Ⅱc類	Ⅲb類	Ⅲc類	Ⅳb類	Ⅳc類	Ⅳd類
点数	2	4	1	9	1	18	4	12	9

敲磨器類

	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅰ+Ⅱ類	Ⅰ+Ⅲ類	Ⅰ+Ⅱ+Ⅲ類
点数	98	16	18	4	90	7

フレイク

	Ⅰa類	Ⅰb類	Ⅰc類	Ⅱa類	Ⅱb類	Ⅱc類	Ⅲa類	Ⅲb類	Ⅲc類	Ⅳa類	Ⅳb類	Ⅳc類	Ⅳd類
点数	2	54	62	3	13	101	2	14	91	21	25	65	168

第55図　石器の分析

で分類した。どちらもⅢc類やⅣc類、Ⅳd類のフレイクを素材とするものが多く、これらはフレイク全体の出土量とも同じである。そのフレイクでは自然面の残らず、剥離作業もかなり進んだⅡc類やⅢc類が多く、また打面の確認できないⅣc類やⅣd類も多いことから、これらのフレイクは、遺跡内で石器製作が行われていたと考えても、これらは素材として集められていたものではなく、製作後に残った剥片であるといえる。したがってUフレイクやRフレイクはその残されたフレイクを二次使用したものとも考えられる。

以上が今回出土した石器の内容である。前述の通り、出土した縄文土器と比較すれば、本来これらの石器群は縄文時代前期初頭から中期後葉までの広範囲に含まれるものであるが、包含層Ⅲ層出土などは複数時期が混在するものであり、詳細に時期分類することが難しいので、あえて一括して検討した。したがって時期別に分析すれば、器種組成など上記とは異なる結果が出る可能性もある。

2　遺構の変遷

以下、時期毎に遺構の分布と、主な遺構の特徴を概観する。

（1）縄文時代前期初頭～前葉（第54図左上）

調査区中央、やや南寄り、南側の沢跡がまだ埋没しきらない段階でその南岸側に相当する場所に竪穴住居跡（1号住居跡）1棟、その西側の低い場所に貯蔵穴（1号土坑）1基とで構成される小規模な集落が展開する。1号住居跡は炉を有しない小型の竪穴住居跡で、主柱穴と考えられる柱穴も見受けられない。また火は屋外で焚いていることが想定されるが、それに相当する焼土遺構は検出しなかった。

（2）縄文時代前期前葉

調査区中央、東寄りの沢地形が緩やかになる、平坦地に2棟の竪穴住居跡が分布する。どちらも長楕円形で長軸6ｍを超えた大型住居である。2棟は重複関係にないが、埋土中へのTo-Cuテフラ混入の有無を基準に新旧関係を想定し、「2号住居跡→3号住居跡」と推測する。したがって大型住居1棟で構成される小規模な集落が2時期以上展開したものと考える。また今回の調査ではこれらの大形住居に伴う貯蔵穴などは見受けられなかった。2棟の大型住居はどちらも片側が消失し、全容がわからないが、歪な長楕円形で、柱の配列も不規則である。その点、同じ山田町内の沢田Ⅰ遺跡でも該期の大型住居が検出されているが、それらと比較しても2号・3号住居跡は規格性に乏しい住居と言える。ただ住居に付属する地床炉は複数個見受けられ、いずれも強い焼成を受けている。また柱穴は残存する床面の外側にも広がるので、本来はもっと大きい住居であったか、拡張・建て替えが行われていた可能性も考えられる。

（3）縄文時代中期中葉

該期については竪穴住居跡は見つかっていないが、調査区中央で大木8a式に比定される土器を伴う土坑1基（2号土坑）を確認した。また包含層Ⅲ層中には大木8a式に比定される土器が一定量、見受けられるので、調査区外に展開するか、あるいは北側の沢跡上に分布していたものが、斜面の崩落により消失したとも考えられる。2号土坑は遺構上面が消失しているが、形態から貯蔵穴の可能性が高い。

前期初頭～前葉

前期前葉

中期中葉（大木８a式期）

中期後葉（大木９式期）

0　(1：1000)　40m

第56図　遺構の変遷（１）

江戸時代

第57図　遺構の変遷（2）

（4）縄文時代中期後葉

調査区東側、2条の沢跡に挟まれた中州状の平坦地に竪穴住居跡4棟（4～7号住居跡）が分布する。検出した竪穴住居跡は4棟とも重複しているため、同時期存在ではなく、1時期1棟で構成される集落である。4～7号住居跡が分布する場所は集落の立地環境としては、狭小でかつ、住居床面に礫層が露出するような場所であり、あまりは適していないようにも考えられるが、4号住居跡は北側の一部が沢跡の崩落に伴い消失していることから考えると、北側の沢跡（沢地形）はまだ別の遺構（竪穴住居跡）が存在していた可能性もある。

竪穴住居跡はいずれからも炉を確認した。ただし残存状態が悪いものが多く、全容が分かるものは1号住居跡の複式炉のみである。この複式炉は石囲部2個と前庭部で構成され、山田町内の該期の竪穴住居跡で見受けられるものと大きな差異はない。また他に付属施設として埋設土器も2棟の竪穴住居跡で見受けられた。立地環境が悪い小規模な集落であるが、竪穴住居跡の特徴からは、決して簡易的な居住施設ではなく、該期竪穴住居跡としてはよく見受けられるものであった。

（5）江戸時代

調査区中央で6基の江戸時代の墓壙（近世墓）を検出した。各墓壙からは人骨は見つかっていないものの、遺構の規模・形態と、複数枚の銭貨（寛永通宝）が出土していることから判断した。該期においては、沢跡が概ね埋没し、今回の調査前の状況に近い地形になっていたものと想定される。6基中4基は重複している。また出土した銭貨はいずれも古寛永であり、これらの点から考えて、短期間にのみ利用された墓域であったことが想定される。今回の調査では該期の建物（掘立柱建物跡）は見つかってない。地形が斜面であることもあり、墓域としてのみ利用されたことが想定され、居住施設は別の場所にあるものと考える。

以上のように、遺物の特徴と遺構の変遷についてみてきた。前述の通り、集落の立地環境としては、決して良好とは言えない場所でありながら、小規模ではあるものの、複数の時代・時期に渡り集落が展開していたことが分かった。これは海岸（山田湾）や山地が近いことにより、食料の調達が容易であることなど、別の面からみれば「暮らしやすい」環境であったのかもしれない。今回の調査では、検出遺構の時期とは別の時期に比定される土器も認められた。遺跡周辺も含めて、今回の検出遺構とは別に、さらに複数の時代・時期に集落が展開されていた可能性がある。遺構数の割に石器の出土量が多いこともその点を裏付けるのかもしれない。

今回の調査では貝層は確認できなかったものの、川半貝塚の内容を知る上で貴重な資料になったのではないかと考える。